

南知多町天神山遺跡の 紅村弘氏保管資料について

増子康眞*・川添和暁

南知多町所在の天神山遺跡は、縄文時代早期末土器の標識遺跡として広く知られている。しかし、当時の調査記録がほとんど残されておらず、発掘調査の様子を追検証するには限界があった。そうしたなか、故紅村弘氏の保管資料のなかに、当時の調査の様子が窺えられる記録の一部が保管されていることが明らかとなり、経緯を含めて本誌に掲載することとなった。遺跡形成をはじめとする天神山遺跡の実態を解明する手掛かりになりうる資料から派生する意義について、主に土器について論じた。

1. はじめに 本稿の経緯と構成

筆者（川添）は、以前、小澤一弘氏が保管していた、南知多町天神山遺跡の調査メモについて紹介し、調査トレンドの推定を行ったことがある（小澤・川添 2018）。天神山遺跡の調査記録資料は、現在わずかな情報しか残されていない。いろいろな事情・経緯があったと思われるが、現地点での情報を整理して、その限りある情報から、どのような調査が行われていたのかを公開し資料化することは、第三者による本遺跡の検討を行う上で、極めて重要な作業である。これは、かつての調査成果を埋没させることなく、現在行われている研究資料と同等の資料的価値へと高めるための作業でもある。

本稿は、後述のように、故 紅村 弘氏によって保管されていた資料が、増子康眞によって確認されたことを契機としている。天神山遺跡の発掘調査は、1956年、名古屋大学文学部考古学研究室によって発掘調査が実施された。出土遺物は、長く文学部考古学研究室の所蔵となっていたが、最近、名古屋大学博物館に移管され、現在、遺物の整理調査が実施されている**。この故紅村氏保管資料自体、もとはこの名古屋大学調査資料の一部であった。

増子は、これまで故 紅村氏からさまざまな考古学的情報を伺っていたことから、この天神山遺跡についても、その発掘および整理調査の

経緯などを近くで伺っていたとのことである。増子からは、今回「発見」された件の資料の経緯についても、理由などが心当たりがあるなど、それを含めての文章化の契機とした旨のお話しを伺ったのである。筆者（川添）としても、経緯などの文章化は、当地域の考古学史を語る上で貴重な情報となると思い、現在の天神山遺跡資料管理者である名古屋大学博物館の門脇誠二教授と、移管前の管理者である名古屋大学文学研究科の梶原義実教授にご相談申し上げ、本稿執筆の了解を得たところである。まずは、両先生からご理解を得られたことを、お礼申し上げる次第である。なお、この「発見」された紅村氏保管資料についても、現在は名古屋大学博物館への移管が終了している。

文章化に際して、本誌となった理由は、筆者（川添）の先の小論を掲載したことにある。天神山遺跡の情報を発信するに、別の冊子に掲載されるよりは、できるだけ同系列の刊行物に掲載した方が良いのではと言う判断からである。

本稿の中心となる増子報告文は次節に掲載している。川添は、本誌掲載に向けた編集・加工と、土層断面図に関する検討を行い、これは文末に付載した。増子報告文の研究上のプライオリティーを尊重する姿勢を示すため、川添執筆部分とは明確に区別したところである。但し、参考文献の記載に関しては、増子・川添両者を一括している。（川添和暁）

*名古屋考古学会

**名古屋大学博物館では、HP上で資料リストが公開されている (<http://www.num.nagoya-u.ac.jp/data/num-l.html>)。また、その分析成果も明らかにされつつある（堀内・須賀 2021、廣瀬 2021、上峰編 2022など）。

2. 天神山遺跡第1次調査の再検討

2-1.はじめに

紅村弘氏は2020年11月病を得て逝去された。愛知県周辺在住の考古学爱好者のだれもが知る『東海の先史遺跡』三部作は、くまなく地域を訪れて地元の研究者や好事家と連絡を取り、その知見や収集遺物を集成され、1957年の美濃編、59年の三河編、63年の総括編が刊行された。第二次世界大戦後に、考古学を国民の参加を得て発展させる目的で、『私たちの考古学』(現『考古学研究』)を定期刊行された岡山大学の近藤義郎教授は、『東海の先史遺跡』を論評に取り上げて、域内の未公開だった考古遺物を資料化し、広く知らしめる優れた仕事と評価された。さらに繊細な実測図と、卓越した写真技術を示したことにも言及されている。多方面で優れて傑出した研究者であったことは周知と思うが、この三部作に触発されてご指導をいただき、考古学へ導かれた一人としてご冥福をお祈りします。

ご逝去のあと、残された多くの研究資産の整理をお手伝いしたが、この中に「尾張 天神山」と記載のある封筒と、43片の土器片を入れた木箱が残されていた。いうまでもなく天神山は、早期末から前期初頭土器型式が多重層位で出土し、今も完存する極めて重要な遺跡である。

残された封筒には、手製のスクラップブック、師崎町地図、遺跡と遺物の写真および実測図数枚が収納されていた。スクラップブックには、A～I区の注記ある84点以上の土器拓影が貼付され、発掘時のトレース層位断面図(A～F区)のトレースした図などが挟まれていた。別に1955年8月2,3日に実施した試掘資料拓影。土器・石器他の遺物実測図とスケッチがある。さらに「宮西貝塚」「新津」と注記された各数点の土器拓影もある。

天神山遺跡は師崎町が主催して、名古屋大学考古学教室と地元の研究者によって1956年1月4日～8日の予定で発掘調査が行われた。発掘資料は名古屋大学博物館に保管される。

本遺跡の発掘成果の概要是、1963年の『東

海の先史遺跡 総括編』に紹介され周知されている。早期末の上ノ山式・入海式・石山式・天神山式・木島式類似の各型式が層位的に出土していること。また入海式に凹基盤(注記に赤色チャート)・打製石錘・骨製尖頭器が伴う。石山式には打製石錘・礫器・平板石皿・骨製尖頭器・骨ヘラ・骨鐵?が伴う。天神山式には打製石錘・礫器・骨製尖頭器を共伴したこと。オセンベ土器に伴う?土偶片等が図示されている。時期不明だが、臼形土製品・断面梢円形の磨製石斧・鹿角斧・糸掛け加工ある角製釣り針軸片があること。他にはシカ・イノシシ他の動物と爬虫類の多くの骨角歯類、多量の魚骨と若干の貝類が残存するが、貝層の形成はなかったことが紹介されている。川添は早期の骨角器群の重要性に鑑み、図化して資料の検討を試みた(川添2018)。

上記の石山式層の平板石皿については、厚さ5.6×幅20×長さ22cmの砂岩製石皿として実測されていたので、トレースし掲載した(図6-77)。図下部の細線付近は摩耗しており、右上のドット付近は使用痕がないと注記がある。

1956年の発掘調査関係の記録や詳細地形測量図・層位断面図の所在が現在は不明とされている。現存する澄田正一教授(当時)の発掘メモには「12月27～28日(橋崎・立松・紅村)測量」とあって、発掘に先立つ詳細地形図が作成されたことは確かである(小澤・川添2018:3頁)。当然に発掘区の層位断面図も作成されたと推測される。

2005年に刊行された知多市楠廻間貝塚の報告書付載1に、増子は早期末の研究史と研究の現状を執筆したが、この参考のため『東海の先史遺跡・総括編』に、天神山遺跡の詳細な記述ができたのはなぜですか?と紅村先生にうかがつたことがある。

お答えの要旨は「1951年の南山大学による入海貝塚の調査に参加し、56年に石山貝塚報告が刊行されて、早期末の土器編年が活発に論議されていた。この時代背景の中で、層位的調査が可能な遺跡で詳しく述べたいと考えていた。たまたま天神山遺跡の調査員に加えられ、発掘後に澄田教授から、報告に必要な整理を手伝うよう指示を受けたので着手したが、町から

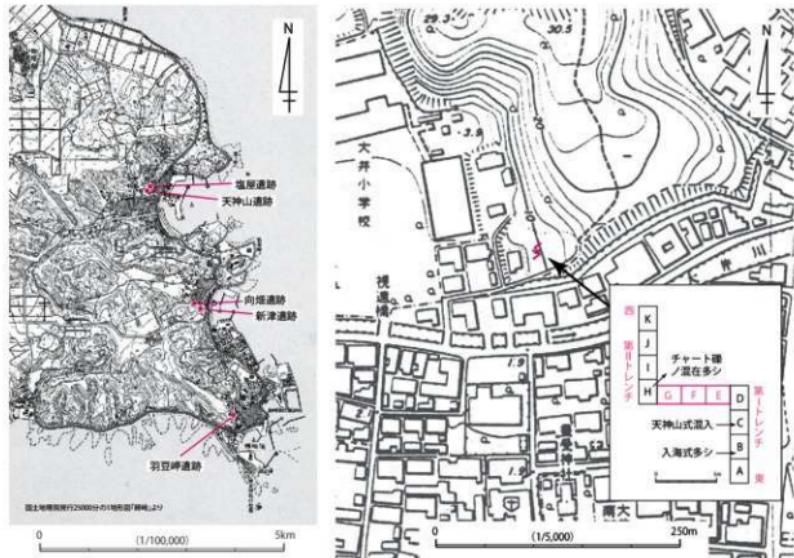


図1 南知多町内縄文早期遺跡（左）天神山遺跡付近詳細図とトレンチ配置図（右）



写真1 天神山遺跡発掘前状況



写真2 測量風景

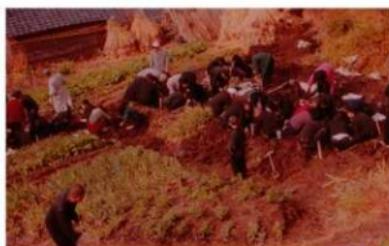


写真3 調査風景

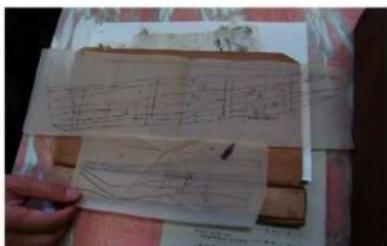


写真4 土層断面図もと 写真

の正式な報告書作成の依頼がなかったので、整理は中断された。

手許の土器片は埋め戻しまでの間、トレンチの壁に残された資料を、自身が確認し提唱した、石山式と天神山式の層位に基づく細別を検証する目的などのため採取した。その後『東海の先史遺跡・総括編』の作成を、澄田教授経由で名古屋鉄道から依頼された。報告書の作成が頓挫した絆を知っていたため、この重要な成果の早期公開が必要と考えていた。今後報告書を作成する場合に支障のない範囲で、整理参加時の手許の記録の一部と、採取した土器片を加えて図・拓本やスケッチで概要を紹介した」とご教示いただいた。

以下では紅村資料の発掘時の層位断面図と、紅村氏の残された実測図や拓影、現存する土器片を資料化して、本遺跡についての新たに判明した事実を含めて、天神山遺跡の様相を検討するとともに、最近の研究動向についても言及する。今回南知多町社会教育課長の森崇史氏のご厚意から、故磯部幸男調査員の撮影したカラー写真を頂戴できたことを記し謝意を表する。(写真1～4・7)

2-2. 遺跡の立地環境(図1)

知多半島先端周辺は砂泥岩からなる師崎層群を基盤とする急峻な地形となっている。三河湾から西へ湾入する、大井漁港のある入江に流入する大井川の谷は幅約200mで、北側の海蝕断崖は、標高約10mあたりまで立ち上がり、ここから標高25m付近までは緩斜面に変わる。標高25～30mの丘陵頂上付近は平坦面となって南東～北西に延びている。この棱線の西側に天神山・約100m北東の反対側斜面に塩屋遺跡が立地する。

天神山遺跡は、丘陵南端の海食崖の傾斜変換線上には接する位置で、標高約10m付近の緩斜面地形に包含層が厚く堆積している。ひろがりは数百m程度と推定されたが、自然遺物と土器の量の多さから、発掘後の埋め戻しの土量が足らず、困惑したと紅村は回想された。稜線の北東に存在する塩屋遺跡はさらに小規模だが、天神山と同様な立地・環境にかかわらず、土器は多いが自然遺物は鹿角1片のみで保存の差が大きい。なお天神山と塩屋のほぼ中間の

丘陵上に製塙土器を伴う古代～中世の包含層があり、天神山B遺跡と命名されている。

大井港と丘陵をはさんで南に片名の谷があり、その南側丘陵には新津・向畠遺跡が存在するものの、ともに破壊に際しての発見で、十分な調査はなされていない。南北約3kmの三河湾に臨む知多半島先端の丘陵に、4遺跡が集中するがいずれも貝層を伴わない。

2-3. トレンチの位置と包含層の堆積

この調査では人工層位を設定した発掘方法を採用している。非貝塚である遺跡の性格と、2×8mのトレンチ内の斜面堆積だが、10cm区分であれば容易に原層位を復元できる、として試掘時に採用し、その結果から有効であると評価して本発掘でも用いたという。

澄田メモには、「上ノ山式→入海式→約10cmノ間層→天神山式 オセンペ式」とあるが、「東海の先史遺跡」には「間層」の用語はない。図2ではB区7層に間層とメモされているが、7層には斜線があり、厚さが20cm以上あり「間層」ではなく、石山式層の強調と推測される。その上の6層はA区とB区にかけて薄い層を形成しているが、これが澄田メモの「約10cmノ間層」に相当するのではないかと推測される。しかし「入海式→約10cmノ間層→天神山式」の澄田メモには「石山式」層が欠如しているが、これらが間層とどう関わるか不明である。

紅村のトレースしたセクション図(図2)は縮尺1/20、第Iトレンチは2m単位でA区からD区に4区画され、トレンチ北側断面の測図と推測される。図からはA区が相対的に高く、D区に向かい緩やかに低くなるが、現在の斜面地形は北→東が高く、南→西に低くなっている。

磯部幸男の撮影した当時まだ珍しいカラー写真が残されていた。各方向から撮影されており、それによると、建物の壁から30mほど東に、ほぼ西北西→東南東方向に主軸を置くトレンチがクランク状に設置されている。家の位置から見ておそらく凹地形の中央に、第Iトレンチが設定されたと推定される。またE～F区は直角にDとつながる。

澄田メモによれば、第IIトレンチはH区～K

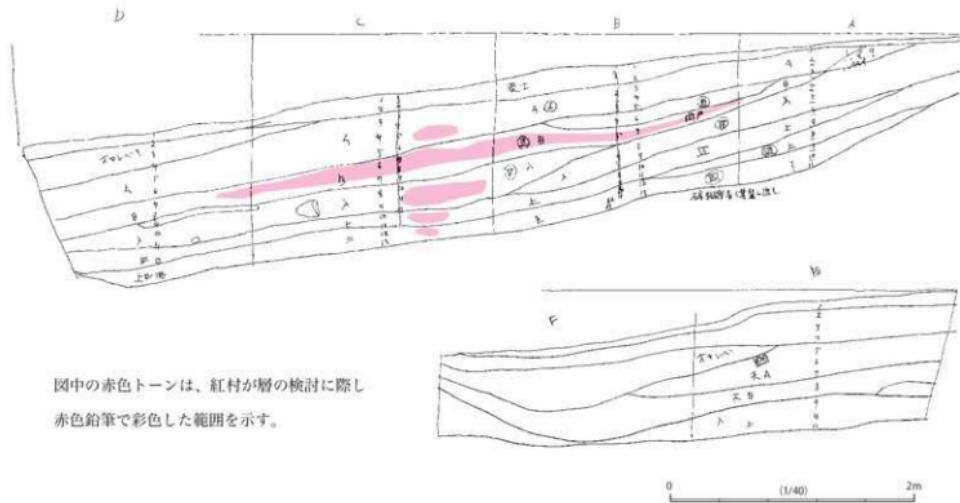


図2 天神山遺跡 1956年A～F区トレンチ断面図(1/40)

区に区分されているが、『愛知県史資料編 考古1』の記述は、上層30cmに多量の遺物があり、その下層には第Iトレンチ1層土器が少量出土したとされ、攪乱が示唆されている。しかし紅村資料にはi 7と注記がある石山式土器(図4-36)と、i 10と注記ある上ノ山式?(図3-10)の存在から正常な層位状況で、攪乱がないことが推測される。第IIトレンチに攪乱されていなかった部分もあった可能性を示す。

考古学研究室からの移管を受けて作成された、「名古屋大学博物館 考古資料 天神山遺跡」の目録には、A～J区までの注記遺物が掲載されているが、K区名の遺物はない。

紅村氏保管のセクション図(図2)は、A～F区までが記載されるが、修正を加えつつある検討過程で、突然に中断された図であると思われる。土層の色調・土質の記入もわずかで、説明との対応も不明確である。第IIトレンチを含むG～K区の図はない。

図2の「1～13」の表示は10cm単位の人工層位で、ローマ数字I～IXは試掘時の層位を対応させたものと推定される。土器型式の略記は上=上ノ山式、入=入海式、B=石山式、A=天神山式と推定される。A区最下層?は土

器(図3-1)にA 11と注記がある。

『東海の先史遺跡』の層位説明は、「①、下位は粘質黒色土層で上ノ山式層」。「②、その上は約20cmの黒色土層で入海式を包含」、「③、その上は黄色砂質土層で石山式の単純層」、「④、その上は黒色土で天神山式層」。「⑤、(その上層)は木島式」とされるが、傾斜地のため乱れた部分もあったという。実際にA区では2、3層に上ノ山式や入海式が多く、上方にあった古い包含層が押し流されて再堆積した可能性を示唆する。

2-4. 各区の層位と土器型式の状況

紅村資料の区と層位の注記ある土器について検討したところ、最も多いのはB区の40片、次いでE区の23片、注記のない20片、D区の14片である。A区の19片は多いが層位との整合性がなく、他の区は資料がすくないので除き、B/E/D区の層位別土器拓影一覧集成図を作成した(図7)。また区/層別数値の一覧表と共に掲載した(表1・表2)。

B区：10層以下の土器はなく、9層は入海0式、同I、II式、と(集成図A最上段)右3例の石山式からなる。分厚い繊維を含まない大型土器(図4-35)がある。

表1 紅村氏保管の天神山遺跡土器点数

区 人工層位	A	B	C	D	E	F	G	H	I
1		1							
2	1	1			1				
3		1			1				
4					1	1	1		
5		1	1	2	1				
6	1	1	2						
7				2					
8		1	1						
9		2	3						
10					1				1
11	1								
12				1	1				
13			1						
不明		10							
計	3	18	6	7	7	1	0	0	1
総計									43

表2 紅村氏保管の天神山遺跡土器拓影点数

区 人工層位	A	B	C	D	E	F	G	H	I
1		2							
2	14	2			1		2	1	
3	1	4			5			1	
4	1			1					
5		3			3				
6									
7					1				1
8		18		2					
9		3		3	4				
10				1	2				
11									
12									
13									
不明		10							
計	16	32	0	7	16	0	2	2	1
総計									86

8層は入海II式が約30%で他は石山式である。三条の沈線ある1例は天神山式とは異なる。「8層下部」と注記ある3片の石山式土器の内、集成図A2段目の右は、弧線状ないし円を描くような爪形列で描く。

6層は図4-28の石山式と図6-72の小型土器がある。

5層は石山式(図4-29)1例を含むが、天神山式が3例ある。3層から1層は石山式と天神山式の混在層と推定される。

D区: 10層の(図3-4)は柏烟式と推定さ

れる。9層は入海II式・石山式・天神山式各1例。8層は石山式2片。6~4層には同一個体の天神山式の大破片が分布している(図5-50)。3層は無文土器(図6-73)と天神山式が存在する。

E区: 図2の層位は11層まで記載しているが、(図3-15)の入海式土器は「E 12」と注記がある。同じ12層の(図3-5)は、集成図2段目中の10層条痕土器と共に、柏烟式に比定される。右端は入海式か。9層の右端は上ノ山式、入海I式とII式、下は石山式。7層に天神山式1例(図5-47)と石山式がある。5層は石山式2片と無文土器。4層(図6-75)は楠廻間式、3層は天神山式、楠廻間式と塩屋式である。2層は入海II式と天神山式である。図2の「天A」土器片は(47)を指す可能性がある。この「天A」層を上から切るかたちの層に「オセンペ」と記入があり、E区3、4層と注記ある紅村資料は楠廻間式・塩屋式土器で、天神山式との層位関係を明確にできることを強調したメモとも推測される。

この発掘では主に中学生を動員した調査で、人工層位別の遺物回収でかなり混乱はあったが、調査員の現場での観察では主要部分の包含層は、層序の乱れや土器の混在は少なかったと紅村は強調された。

2-5. 層位区分の傍証

調査員であった磯部幸男は層位について「昭和31年…調査員として参加していた紅村弘が、試掘層準IV・V層(天神山式…増子補記)の単純層と、その直下の黄褐色砂層に爪形文土器の単純層を確認したことをもとに、石山式土器として一括されてきた爪形文土器と横線文、波状文とを分離したもので、以来…石山式→天神山式の推移は一般化されてきた」と記している(磯部1984:7頁)。この黄褐色砂層は紅村が細別の論拠としたが、磯部も調査時確認していたことを示す。また試掘層準IV・V層が天神山式の単純層であることは、試掘資料報告に「天神山式土器のみが検出されている」と立松は記載している(立松・山下1983:55頁)、一連の事実関係は調査員間で共通認識だったと推測される。以上の概観で石山式→天神山式→オセンペの層位の変化が検証されたことは確認でき

る。

だが上ノ山式に統く入海式は、現在3型式に細別している（増子 1983 b）。発掘と同じ1956年刊行の石山貝塚報告で、坪井清足は入海0式を上ノ山式に含めていたが、紅村は天神山遺跡の土器編年配置で、入海0式を上ノ山式と入海I式の中間に置いている。後に「君（増子）が入海0式の複数条突帯は上ノ山貝塚ではなく、上ノ山式と分離すべきと主張していたが、出土状況もそれを追認する状況であったのを考慮して、配置した」と伺った。増子の入海式三細別の提起は事実の検証が遅れたが、紅村は天神山の発掘時に、すでにその層位の変化を捉えていたことになる。

2-6. 天神山遺跡の形成期

県史は、本遺跡の最下層に上ノ山式土器の層があり、この時期に居住が始まるとする。しかし「但し調査が最下底の岩盤までおよんでいない」（紅村 1963-P-103）、との指摘があり未発掘部分を残したことを示唆する。図2の層位図で、A区11層下に「礫・細礫多く基盤に近し」との記載があるが、11層の左の「？」は型式名称欄であり、不明土器型式の存在を示唆している。紅村土器資料の「A 11」と注記ある土器（図3-1）が該当する可能性が強い。

これは素地に長石、石英、雲母が多く混ざる花崗岩のばいらん土（サバ土）を含む。庄内川から矢作川水系の繩文土器一般に共通する胎土で、繊維を含むが器壁は5～7mmで厚くない。色調は暗い茶褐色。信州や関東からの搬入ではなく、愛知県内での製作品と推測される。

器形は深鉢胴部片で上下幅65mmの段をつくり、器面にLr繩文を施した後に、幅12mmのヘラ？で横位に二条の浅い凹線を描く。下部凹線の下に沿って刺突列を加えるが、直後のナデで左下の文様は消されている。典型的な茅山下層式土器である。壁面からの引き抜きのためガジリはあるが保存は良好。天神山遺跡の形成期を確定する新知見である。

（図3-2）は区層位の注記はないが、器壁は7～9mmで繊維を多く含む。器面は保存が良く、破断面も新鮮。深鉢の波状口縁部分で、口端面に連続刻目を加え、口縁に平行に細かい刺突列を二条、その下に波状の刺突列を描く。波



写真5 天神山遺跡出土茅山下層式土器（図3-5）

頂部の内面に指頭による押圧を加え台形状に加工する意図がうかがえる八ツ崎I式土器⁹である。茅山下層式末の吉井城山最下層に共伴することが報告されている（岡本 1962）。

試掘区最下層のIX層出土（図3-3）は薄手の平滑な器面に、上下の横位刺突列間に、斜位の二条単位の刺突列を配置する小片であり、細かい刺突痕列文様は上ノ山式の貝殻復縫文土器に比定されたが（立松・山下 1983）、本例はまぎれもなく八ツ崎I式である。

なお、試掘資料報告書土器番号と、残る紅村拓影資料の土器番号はすべて一致している。調査者間で共有されていた情報と思われる。

紅村拓影資料にD 10と注記ある土器拓影（図3-4）は、詳細は不明だが口縁部に横位の条痕調整を加え、口端面と口縁に横位と斜位の刺突列を加える。2に類似しており、八ツ崎I式か古い柏原A式（増子 2001）のいずれかに相当すると推測される。D区は包含層が厚く13層まであり、注記の資料は11層直上に描かれた方形の可能性がある。

5はE 10を12と注記の修正がある。土器は繊維を多く含む黒灰色の素地で口縁施文部は平滑に、以下は右傾に二枚貝条痕で調整し、内面も横位の条痕調整である。器厚は平均7mm。口縁部に左傾・右傾・左傾の刺突帶を三段描くが、この原体は石山式に多い薄いヘラや二枚貝縁端ではなく、断面三角形の厚く鋭い刺突である。口端は縦に刻む。これらの属性は柏原式土器の特徴と一致する。

なおこの発掘は8日までの予定であったが、博物館目録によれば9日にC・D・E区の12

*八ツ崎I式土器について静岡県埋蔵文化財センターの報告書に、「八ツ崎式土器」と略記する例があると開いた。「八ツ崎式土器」とは大歩義一により、上ノ山式→八ツ崎式→入海式という型式変遷が示され、定義された型式名称である（大歩 1963 P.27）。筆者は大歩氏の命名された「八ツ崎式土器」名称を尊重し、本貝塚出土の柏原式直前の別な土器群に八ツ崎I式土器と命名し弁別を図った（増子 1983 a）。この学史上的事実を知らずに、上ノ山式に統く八ツ崎式土器と、柏原式に先行する八ツ崎I式土器を混同する誤りを避けるため、注意を喚起する。

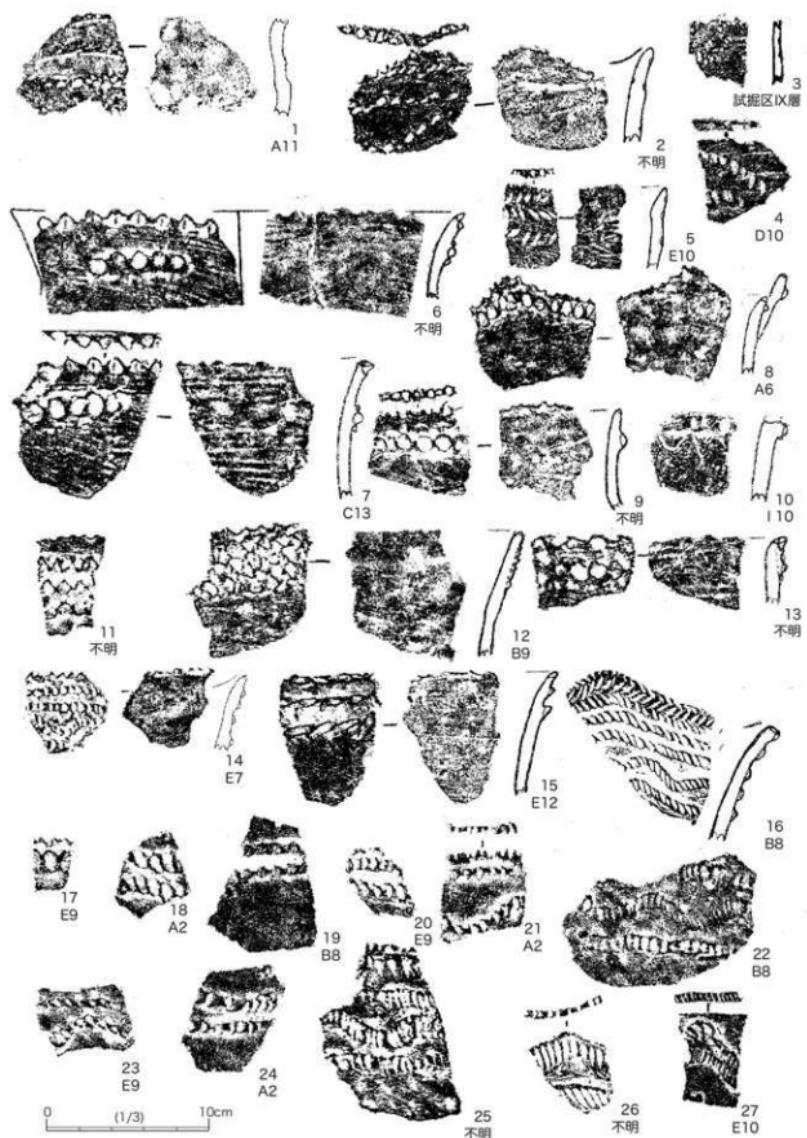


図3 天神山遺跡の土器（I）

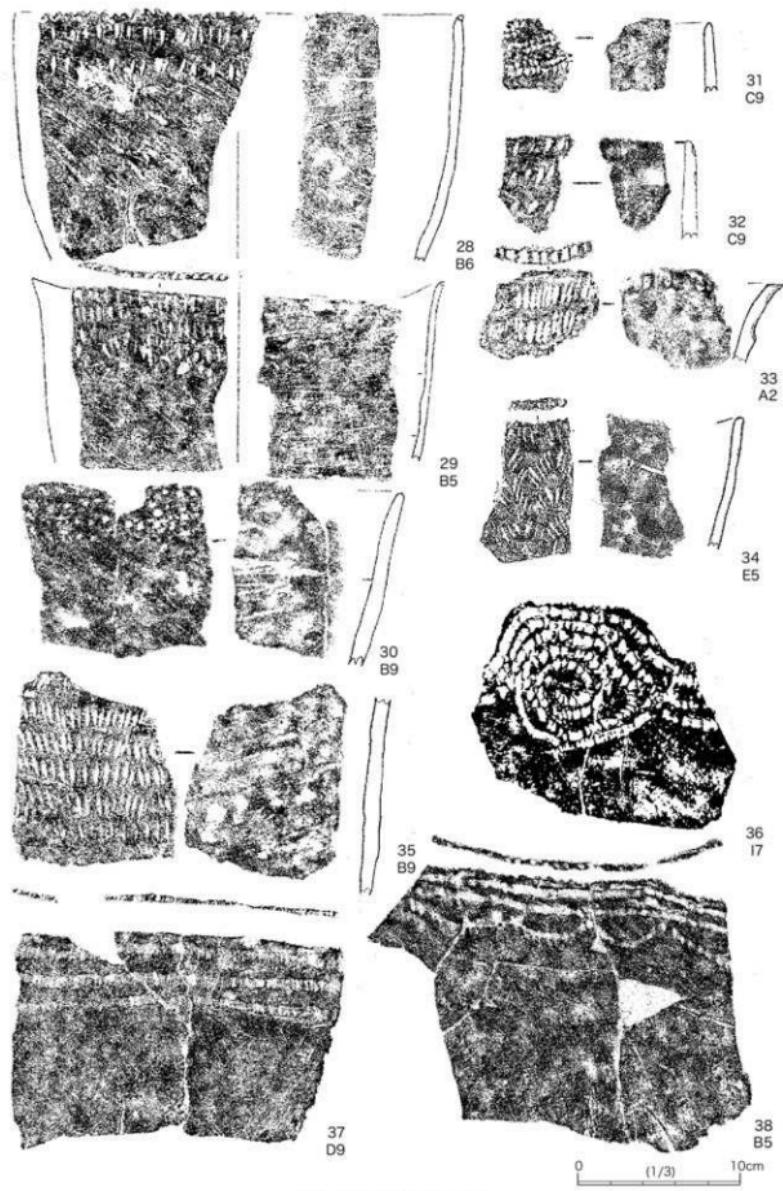


図4 天神山遺跡の土器（II）

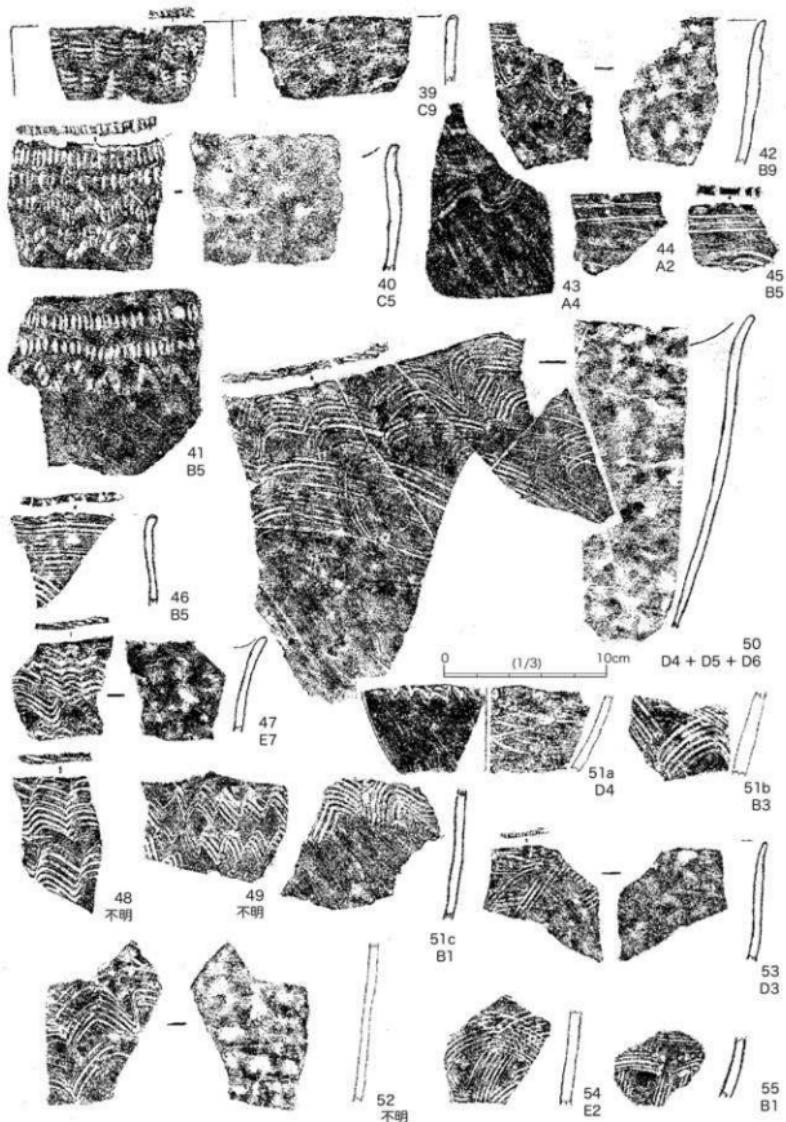


図5 天神山遺跡の土器（III）

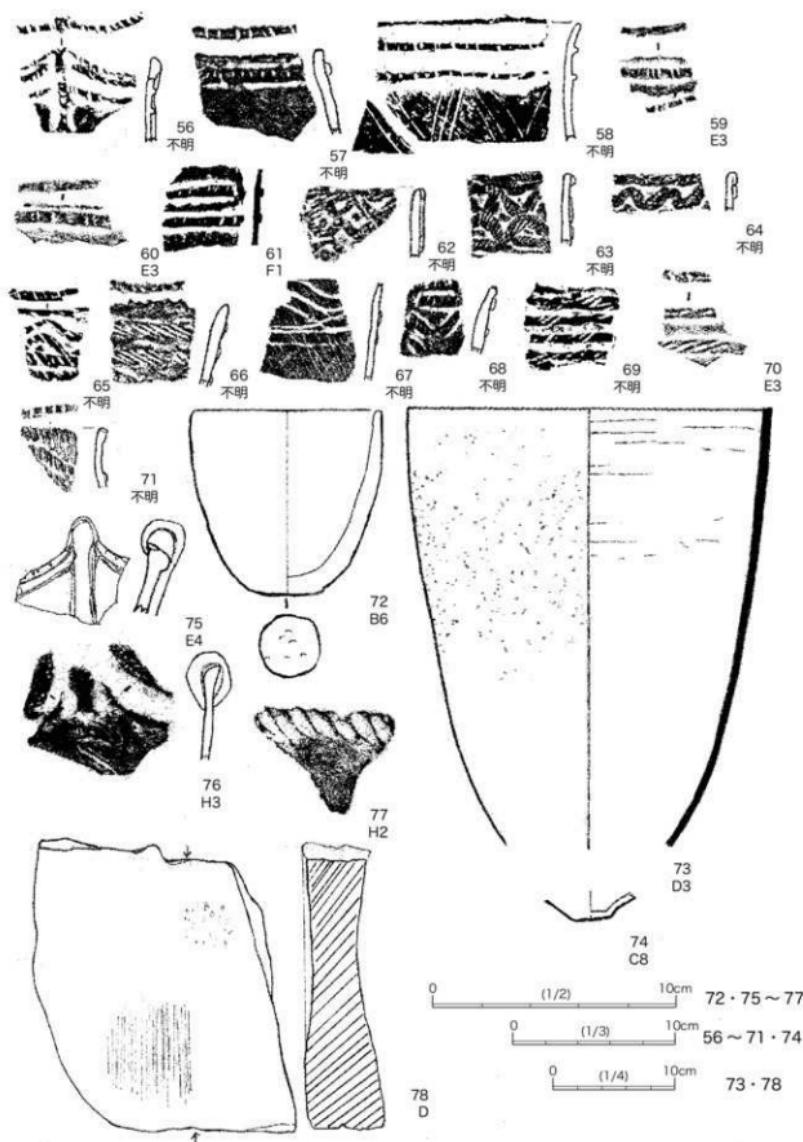


図6 天神山遺跡の土器 (IV) / 石器

E区

D区

12

B区

9層
(30-35)8層
下部

8層

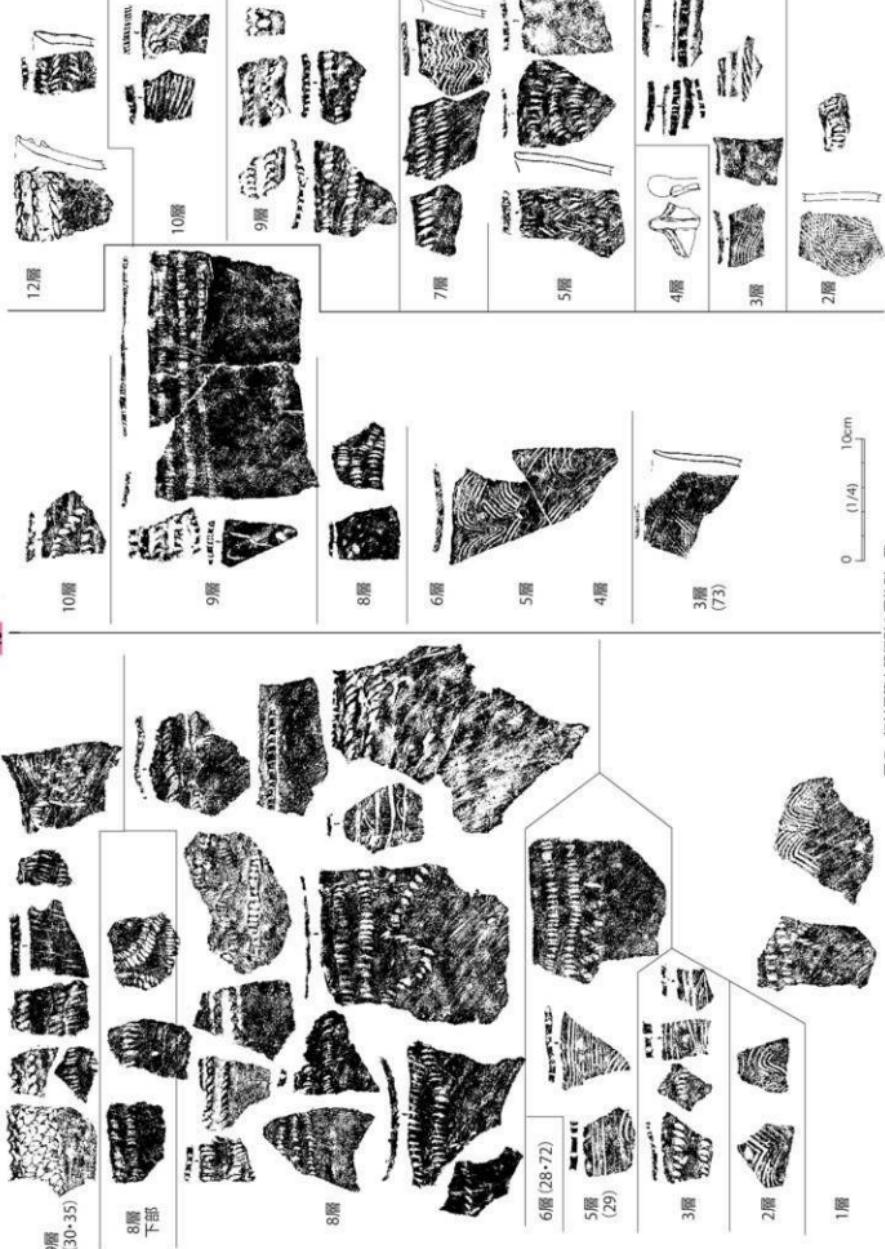
6層(28-72)
5層
(29)

3層

1層

図7 紅村保管土器拓影の層位別一覧

0 (1/4) 10cm



層や最下層13層を発掘している。推測ではあるが、上記の知見にない土器の存在を知って、出土区のさらに深部を発掘し、資料を集め努力をしたかと推測される。しかし当時舶畠式までの認識はあったが、それ以前の土器様相は不詳であった。検討を果たさぬまま保管されたと思われる。

久永春男は知多半島先端の早期末遺跡群を総括検討して、その形成は上ノ山式からと述べている（磯部ほか1965）。だが、紅村資料から観察した天神山遺跡の居住は、茅山下層式・八ツ崎I式・舶畠式土器に遍及することが判明した。開地遺跡で10型式以上が絶えることなく長期存続する天神山遺跡は、地域を代表する拠点集落であったと思われる。

天神山遺跡の終末に関しては1963年当時、オセンベ・木鳥式類似と表現する土器の編年はなされていなかった。紅村資料の終末期は後述で検討する。

2-7. 紅村資料の土器（A～Hは区・数字は出土層位を示す。？は未記入）

以下に紹介する土器は、①、土器片に墨で注記のあるもの、注記のない土器片、②、拓本のみがあり、鉛筆による注記のあるものと、ないもの双方がある。断面測図を入れたものが一部ある。ここでは①を主に掲載するが、②も必要と判断した例を図示している。

上ノ山式土器（図3-6～10,17）紅村氏の収集された上ノ山式土器は、押圧痕を加えた一条の把手状の短い突帯を二ないし四單位口縁部にめぐらす6（？）と7（C13）では、口端面と口端に水平に交互刺突した指と爪の痕跡が残る6と、口端の内外から交互押捺の7。口縁部に指頭押捺ある一条の突帯を口端に平行にめぐらす8（A6）と9（？）17（E9）がある。胎土には繊維を含み、器面はハイガイ等の背面条痕で調整される。

上ノ山式土器は一条突帯土器が主体であるが、ヘラ描の斜線帶や羽状沈線帶の系列と併用

されることもある。舶畠C式土器の主体である刺突列土器が10%程度残存するのが普通である。少ないが縄文施文もある。これらの多様な系譜と、底部資料は紅村資料には含まれていない。

図3-10（i 10）は繊維を少し含む胎土で、当地に多い雲母・石英・長石を含まない。色調も白色に近く緻密な胎土は異質で、搬入品と推測される。押圧ある突帯の下に割れた原体で波状沈線を描く。突帯の貼付法は上ノ山式的だが、i区10層出土で他の型式との共伴関係の情報もない。川崎市新作D貝塚（渡辺・村田1966）に相似例をみると、つながりは不明である。こうした早期末の異系統土器は知多半島に、ほとんど類例はない。

入海0式土器（図3-11～13）この型式は入海貝塚の南山大学報告で2類A類に分類され（中山・福垣1955）、先行して入海貝塚を調査された、吉田富男が入海A～C式に分類した土器（吉田1954）とは異なる特徴を有するとして留意されている。前述したが石山貝塚報告では2類A類を上ノ山式に含め、入海A式と同B式を入海I式・II式とする。

増子は各遺跡資料を検討した結果、入海2類A類土器は、上ノ山式の突帯一条限定に対して複数条を用いる入海I・II式と共に通すること、一方で上ノ山式特有の突帯の交互押圧法を多用し、口端面の押圧も引き継いでいる。だが、縄文施文と舶畠式以来の刺突列文という伝統的な要素は、上ノ山式までは存続するが、複数条突帯の出現を契機に消失する。

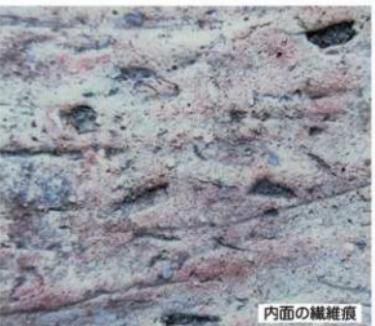
以上の状況から入海2類A類土器は、上ノ山式直後に位置付けられるべき型式であり、複数条の交互押捺突帯の出現を指標として、入海0式土器と命名した（増子1983b）。

11は交互押圧ある突帯三条を平行して重ねる。12（B9）は突帯四条を密接に貼付して交互押圧を加えている。口端部の押圧は上からの単独押圧である。13（？）は二条を密接して

*上ノ山式土器の詳細な検討は「補題間報告」付載1に論じたので参照いただきたい（坂野ほか2005）。



表面剥離



内面の繊維痕

写真 6 28 器面写真 (150%)

口縁部に配置するが、上の突帯は剥離している。口端部の押圧痕は上と横から交互押圧する。

入海Ⅰ式土器（図3-15・18・19） 紅村資料に入海Ⅰ式の資料は少ない。15（E12）は口端面と二条の突帯に斜めに棒を押し当て連続する押圧する。18（A2）と19（B8）は指頭痕である。

入海Ⅱ式土器（図3-14・16・20～27）
14（E7）は口縁部に平行する二条の突帯・下に蛇行する一条突帯・下限に横位一条突帯を配置する。突帯には密な刻目を加える。16（B8）は口端と直下に羽状沈線を描き、四条の突帯の三条目を蛇行させる。突帯上は右傾の密なヘラ刻目を付す。共に入海式の典型的な文様構成である。20以下に拓本資料を掲載した。

石山式土器（図4） 石山式土器と天神山式

を細別した提唱者であり、情報量が多い。

文様面では、33（A2）は入海Ⅱ式の突帯が消失した直後の様相をとどめ、形式的に最も古い石山式の様相を示している。口端を刻む28（B6）は単純な二条横位の施文。34（E5）は刺突列の上一列と最下段は横帯で中の二列を連続波状に貼付する。同配列は入海Ⅱ式の25と同一であり、押引文で描く横位3列の37（D9）と、下の一列を波状とする38（？5層）は大破片で、磯部・山下の塙屋中層B式の典型だが、層位的に28や29の刺突文列と共に伴している。石山式は入海Ⅱ式の文様を選択的に踏襲するが、以下の様相の違う土器を含む。

36は口径を実測した線が残され、台形の把手の渦巻直下で口径約14cmの小形土器である。出土層は「0 i 7」メモされており、第ⅡトレンチⅠ区7層と推測される。紅村が注目したのは渦巻文を押引爪形文で表現したことにあると推測される。石山式土器に渦巻文を表現する土器は類例がないが、図7のB区層位別出土土器一覧の上から二段目「8層下部」の右端例は二列單位で下に横位帶状、その上に対弧状に描くが波状ではなく、別の文様と推測される。「8層下部」はすべて石山式土器で、この類例の存在から紅村は石山式と判断した可能性がある。

72（B6）は口径8cmの小型土器で平底に近い底面に不規則な刺突痕がある。30（B9）は刺突痕を4段施す深鉢、同じ35（B9）は繊維を含まない？厚手の白灰色の土器で、胎土とつくりは石山式一般とは感覚的に異なる。石山式では6段以上の刺突列を重複する例はないが、両者ともB区9層出土で、石山式包含層の範囲に収まる。

28（B6）の中央上の剥離した胎土表面には、長さ13～20mm、幅1.5～2mmの短冊形の炭化物が方向を描いた状態を観察できる。本例の器壁厚は平均6mmであり、本遺跡の八ツ崎Ⅰ式～上ノ山式の器厚が平均約10mm程度であることに比較して、薄く軽い方向への改良が認められるが、依然として含繊維土器であることを証明する資料である（写真6）。

天神山式土器（図5） 口縁部に櫛やハイガイなどを原体として、幅広く波状文や弧線を横

位方向に描く 47 (E7) 48 (?) 49 (?) 50 (D4 + D5 + D6) など、櫛描文系譜の深鉢が主体となる組成である。加えて、入海式以来のモチーフや、石山式の施文法が残存し共伴する。40 (C5) 41 (B5) は横位爪形文帶下に波状押引文帶を描き、石山式のモチーフを継承する。42 (B9) 44 (A2) は同じ文様を平行沈線で表現し、43 (A4) は押引文と櫛描波状文を併用する。45 (B5) 46 (B5) は上に横位沈線帶・下に櫛描波状文を配置するが、これは 40.41 の文様を原体置換によって描いている。39(C9) はハイガイの縁辺を深浅に押引く断続文を二列配置する。73 (D3) は紅村の実測した無文土器で、層位から天神山式に属する。

紅村が注目して採択し、断面図を残した 76 (H3) は、波頂部に円盤をかしめる技法が天神山式特有の波状文と併用されている。以上の例示資料は石山式から天神山式への密接不離な転化を物語る。天神山式は本来 B 5 層、C 5 層、D 4 ~ 6 層に集中し、石山式土器との前後関係が層序で分離されている。(72 · 75 · 76 は縮尺 1/2 で表示している)

天神山式土器の製作法の特徴は、内面壁に指痕を多く残すことである (42 · 47 · 50 · 52)。また肉眼観察では限界はあるが、繊維を全く含まないと推測できる資料も多く、50 の内面観察では、明らかに長石・石英を微粉砕しており、素地つくりに改良を加えているようにみえる。知多半島の天神山式土器は含繊維土器伝統から、無繊維素地での制作技法への転換期であったと推定できる。50 の平均厚は 5 mm で、石山式の 28 に比べ 1 mm が薄くなっている。74 (C8) はおそらくこの時期の底部片で、口縁部から積み上げてきた粘土板円筒の底面部にくぼめた円盤を押し当て塞いでいる。

天神山式土器の名前である本遺跡の在り方と、他遺跡の組成を比較してみよう。図 7 上段は北に隣接する塩屋遺跡の中層で、石山式と混在していた天神山式土器である。報告 (磯部 1984) では約百片を図示しており、ここでは (図 8-1 ~ 21) を示した。4 は磯部報告では中層 B 式に類別されている。押引波状文 (1 ~ 3) と凹線文 (4 · 5) 沈線波状文 (6 ~ 10) および主体となる櫛描文土器 (11 ~ 20) からなる。

塩屋遺跡では文様全体が判明する大破片が少ない。ただ (7 · 11 · 12) は口端直下に沈線列を置き、その下に横位波状文を組み合わせる配置は (図 5-45 · 46) と同様、前型式以来のモチーフの伝統である。(13 · 14) は横位波状文を上下二段に重ねている。(15 ~ 19) は一列以上である以外はわからない。斜行施文 (20 · 21) は原体置換例 (10) を含むが少ない。

瀬戸市長谷口遺跡 (永井ほか 2004) は三河山地の河岸段丘面に立地するが、早期末の入海 II 式・石山式・天神山式土器が多くあり、天神山式は 56 片が図示されている (図 8 下段)。立地環境からハイガイ原体の施文は少なく数片で、ヘラ・棒・半截管状具等により描く例が多いのが特徴である。文様自体は横位波状文が主体であるが、(図 8-42) は上から刺突列・横位ヘラ線・横位波状文を描く。(図 5-41) と共に刺突列の伝統を残存する。

2-8. 「塩屋中層 B 式土器」存立の是非

一部の研究者は石山式と天神山式の間に、別型式が存在すると主張している。磯部幸男は塩屋遺跡の「発掘調査では遺物包含層の層序によってこれを (中層土器の A ~ C の三別…増子補記) 分けることはできなかった」(磯部 1984 : 7 頁)。しかし「上層土器と伴出する中層土器が B 類と C 類に限られ、A 類は上層土器と伴わなかったことも考えあわせ、編年上の位置を爪形文列を主とする石山式と (A 類の文様構成のモチーフを継承しながら、押し引き文とする B 類) 天神山式との間におき、塩屋中層 B 式土器と仮称することにしたい。」(同前) と論じた。これが塩屋中層 B 式土器名称の初出である。

山下勝年は磯部説に従いつつ、東海西部を分布の中核とする早期末土器型式に、関西の石山式の名称は適切ではないので塩屋中層 A 式と改名し、次いで塩屋中層 B 式、天神山式は塩屋中層 C 式と改称すべきと主張した (山下 1989)。

結論から言えば、磯部が塩屋中層 B 式と仮設した組成は、石山式・天神山式と分離独立して、あるいは遺構一括単純資料としても、今に至るまで確認されていない。紅村は天神山遺跡の層位的事実に基づき、爪形刺突列と押引文化した刺突列が、当初から石山式に共存していること、さらにこの両手法が天神山式の層準にお

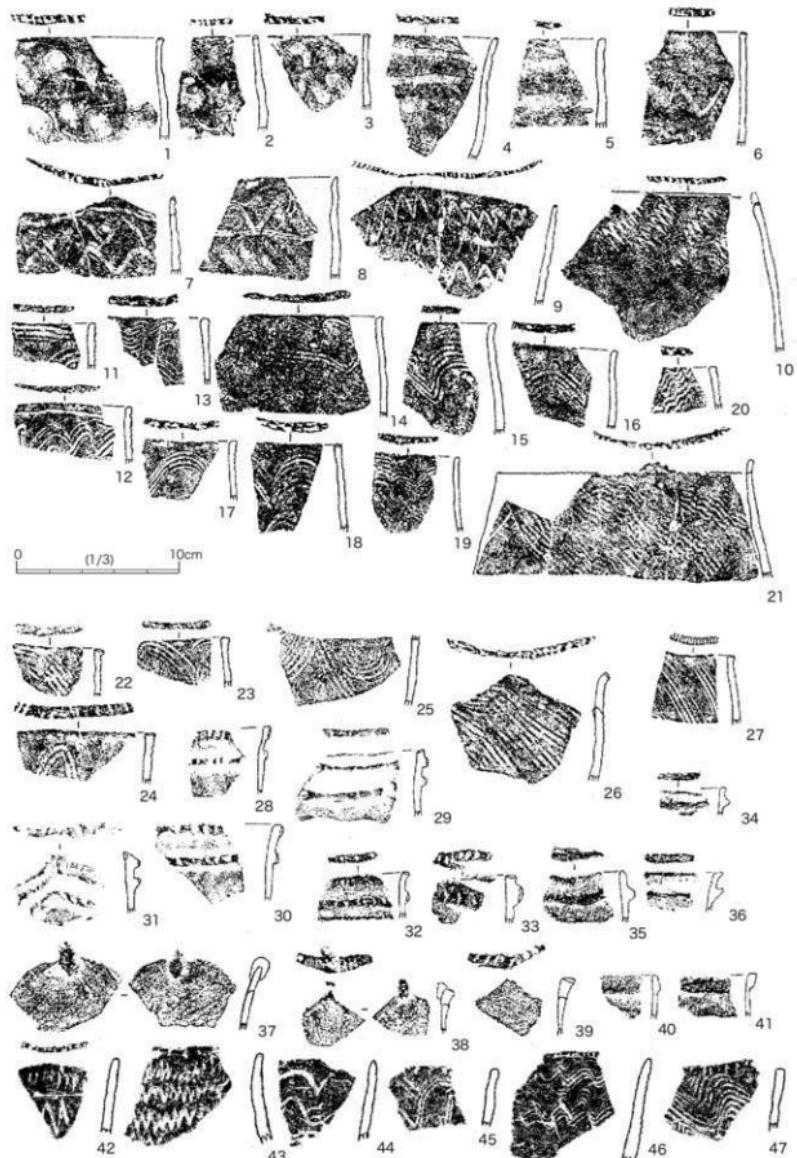


図8 塩屋遺跡の土器（1～41）(山下 2006)、長谷口遺跡の天神山式土器（42～47）(永井ほか 2004)

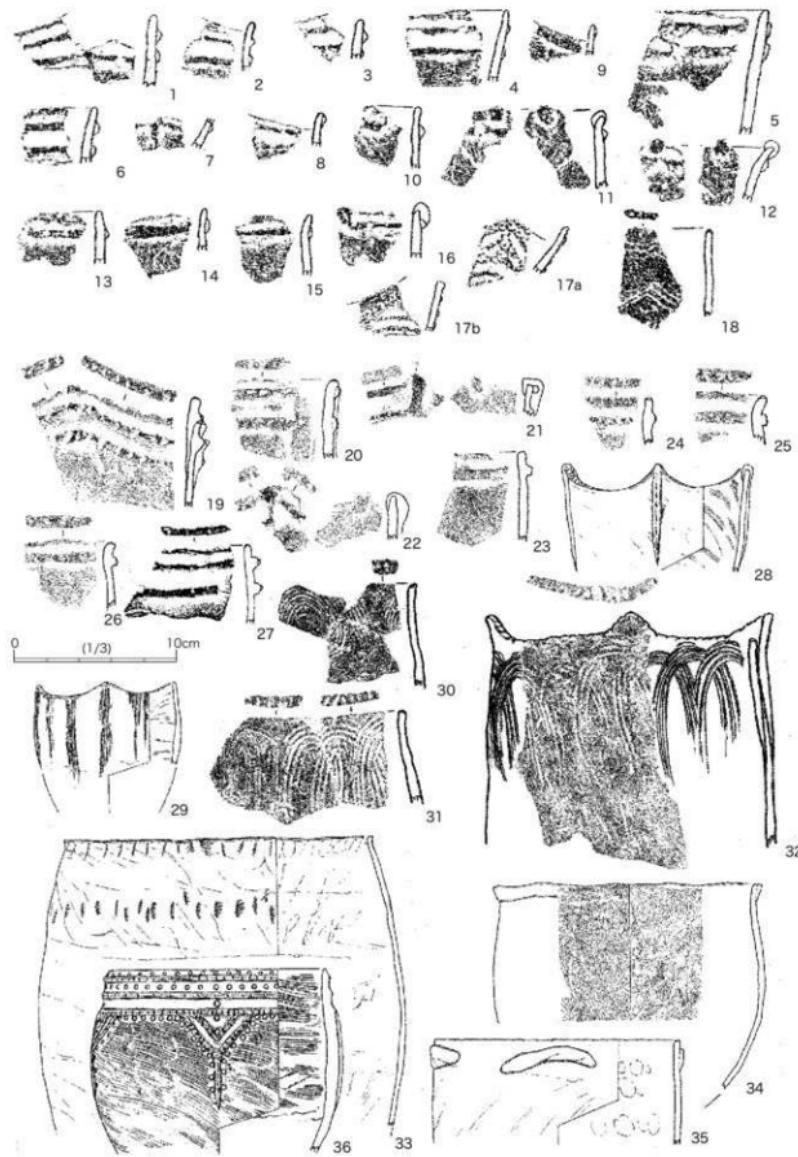


図9 蘇原東山遺跡の土器 (1～18) 1/3 : 桶廻間貝塚の桶廻間式土器 (19～36)
(各務原市埋蔵文化財センター 1999、坂野ほか 2005)

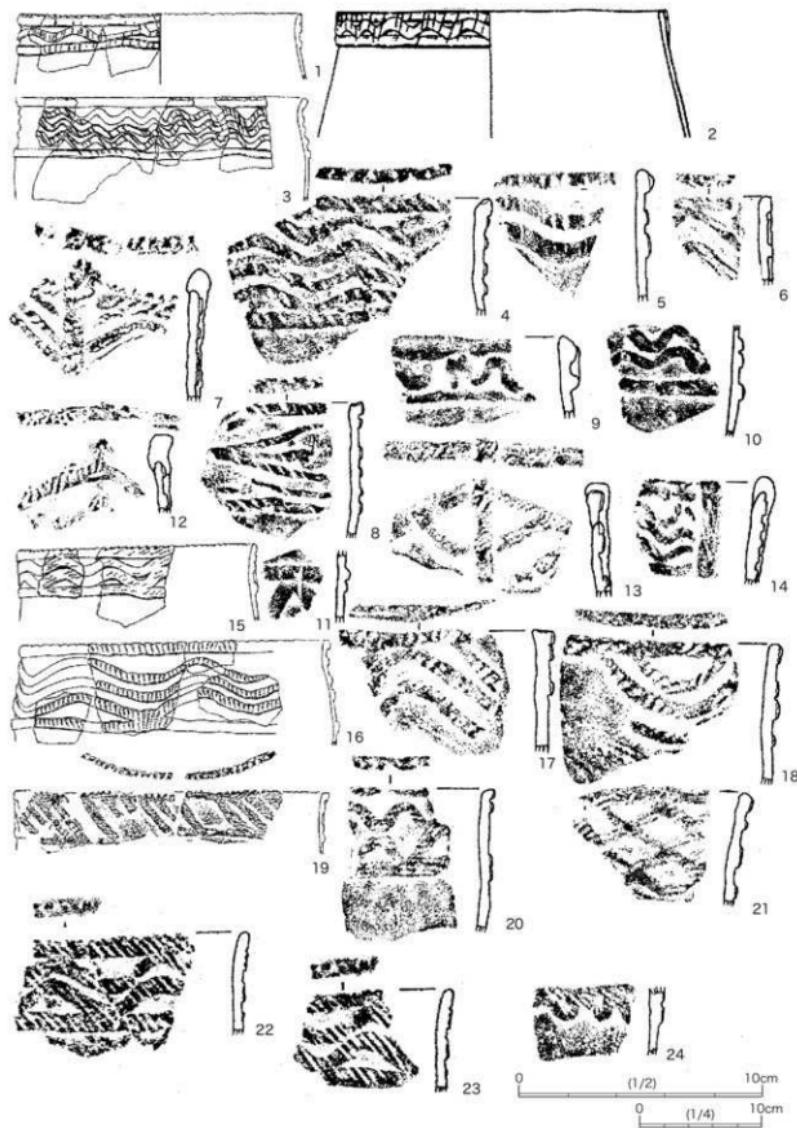


図 10 塩屋古式土器（1～21）塩屋中式土器Ⅰ（22～24）2以外は塩屋遺跡
(1～3・15・16・19 1/4。他は1/2) (磯部 1984, 山下 2006)

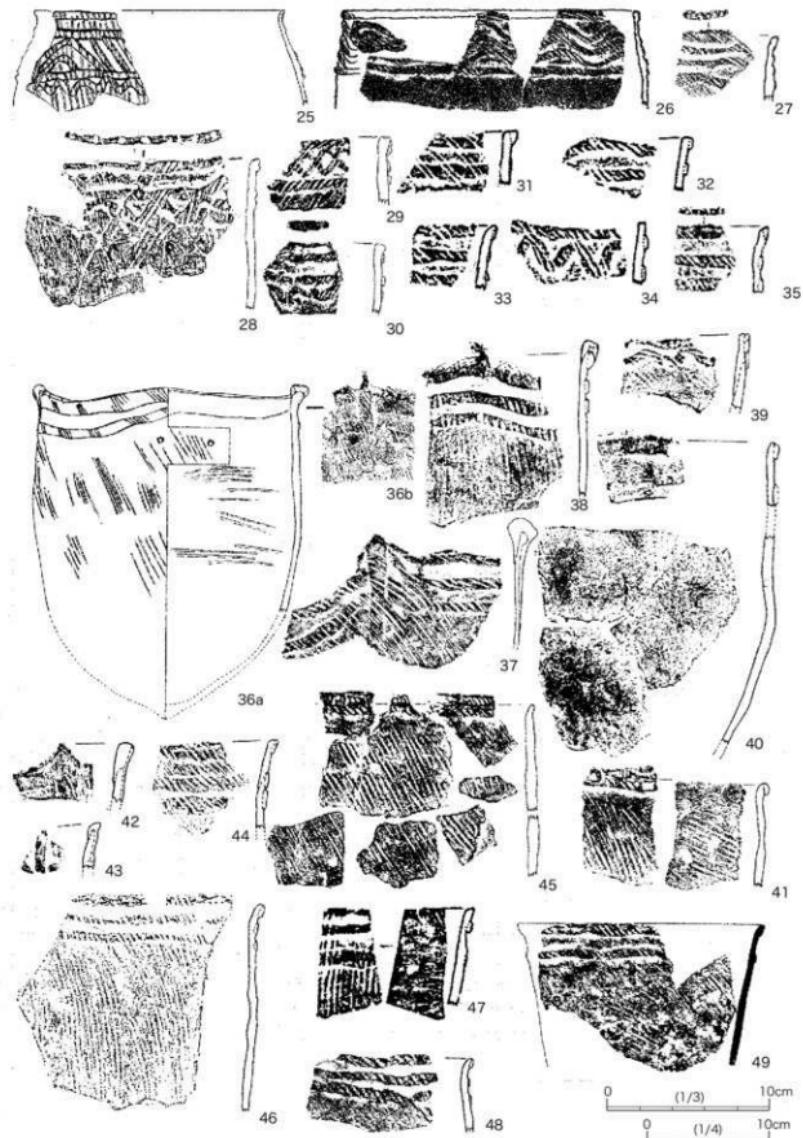


図 11 塩屋中式土器 II (25 ~ 35) 塩屋新式土器 (36 ~ 49) 25・26・36・49以外は1/3
 (25 子種、26.27 楠庭間貝塚、28 港町、29.30 北貝戸、31~34.47 小の原、
 35 山手宮前 36.38~45 市場、37 大曲輪、46 旧紫川、48 今朝平、49 羽豆岬)

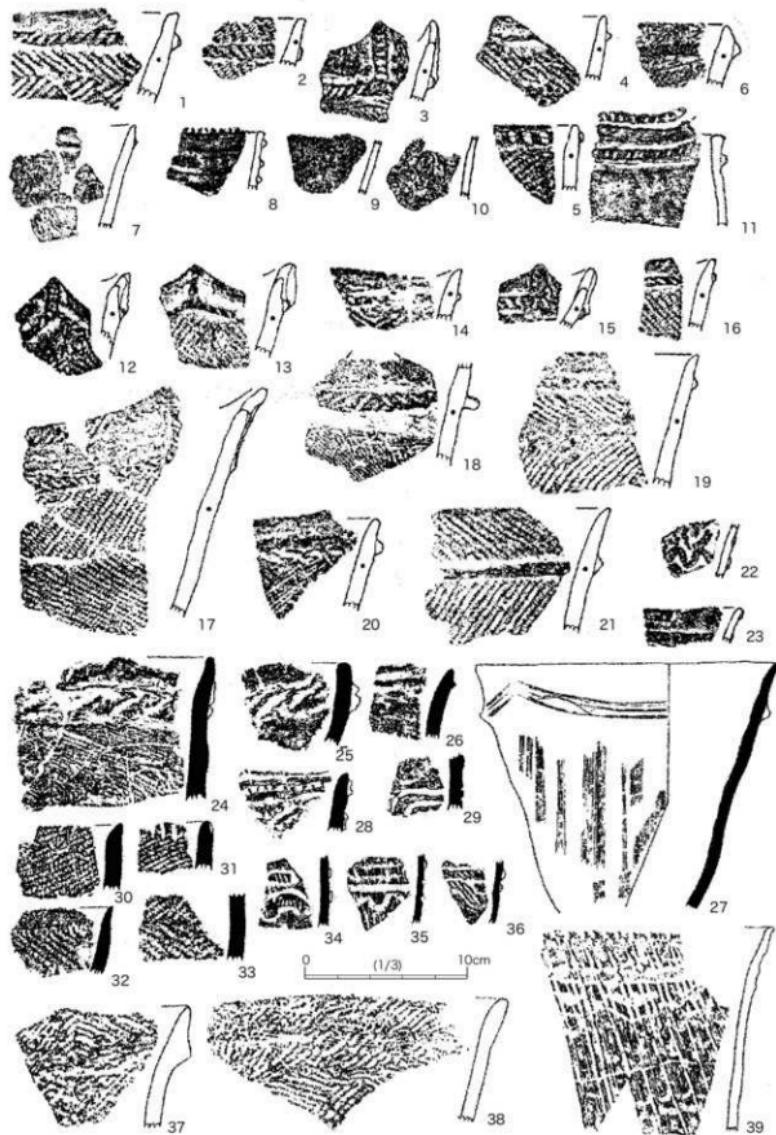


図 12 長野県の早期末～前期初頭土器の推移 (1 ~ 10 貴地 3 号住, 11 芥沢, 12 ~ 23
貴地 6 号住, 24 ~ 36 芥沢昭和 26 年発掘住, 37 ~ 39 胸形 1 号住)

いても、残存要素となって少数が共伴することを1963年すでに明示していた。今回のB区とD区の層位状況も紅村の指摘とおり、石山式から天神山式への変化の過程に、塩屋中層B式土器の介在は全く不要であること、塩屋中層B式の設定が誤りであることを明示している。

2-9. 天神山遺跡の終末期土器群（図6）

天神山式直後として設定された桶廻間式土器が存在する。図6-56は試掘I・II層出土、57は県史P.247の15の転載である。58は『東海の先史遺跡』掲載資料で、胴部に3条単位ヘラ線で連続三角文を描く。ヘラ刻目ある二条の断面三角形の細い突帯の特徴は桶廻間式土器と推定した。75（E4）は口端に横位の突帯をめぐらし、波頂部の内面側から外面口縁に垂下する突帯を追加しており、この特徴は桶廻間式の突帯文土器の典型である。なお桶廻間式に続く塩屋式土器（59・60・70）が同じE区の3層から出土しており、両式時間の時系列での層位の変化が確認されている。

塩屋式土器は図6-59～70が相当する。64～68は『県史資料編考古I』の250頁からの転載で、出土位置・層位は不明である。E区3層に塩屋A類（59・60・70）が存在する。（62～64）は塩屋B類に相当し出土位置は不明だが、後述する塩屋古式～中式に相当する。

天神山遺跡の最終末期を示すのは、紅村土器資料（図6-71注記なし）である。特に注意して観察したが、同じ木箱に他の土器と共に保管されており、灰褐色の器面の色調と素地の特徴は他の土器と違和感なく、木箱には別遺跡の土器等の混入はなかった。保存状況も発掘直後の洗浄を経て保管された、他の土器片と変わりではないと観察したので、本遺跡資料と推測した。

外反する深鉢の口端に接して細く低い紐状の突帯一条と、その下に波状に貼付される。最後に櫛歯状の細い条線を器面全体に縦位に施す。口端面にはヘラの刻目がある。この特徴は後述する塩屋新式土器である。

71の存在は天神山遺跡が前期初頭まで継続したことを示す。隣接する塩屋遺跡より一型式

遅くまでの土器があり、南知多の縄文早期後半遺跡群では最初に出現し、また最後まで存続したのが天神山遺跡であった可能性は高い。

2-10. 天神山式と桶廻間式土器との関係

新発見の知多市桶廻間貝塚の採集土器から、塩屋中層C式（天神山式）と「天神山式桶廻間段階」土器の細別が提唱された。天神山式桶廻間段階は、天神山式の主体となる櫛描文系18個体、無文土器18個体、突帯一条の隆帶文土器12個体、その他1個体からなるとされた。細別の根拠は天神山式の主体となる櫛描文系が依然主体となるが、神之木台の影響を受けて、新出現した突帯一条の隆帶文土器の新規の共伴を挙げている（山下2003）。

同貝塚の緊急発掘調査が実施され、その報告で桶廻間式土器が設定された（図9-19～36）。この組成は口縁部に細い貼付突帯を少条（1ないし2条）めぐらす薄手の深鉢（19～27）が約40個体あり主体となる。次いで無文土器28個体。縦方向に花弁状に描く櫛描波状文土器（29～32）は3ないし4個体ある^{*}。他の有文土器数個体、これに関西の一乗寺南下層式類似土器（36）を伴うと報告された（坂野ほか2005）。

「天神山式桶廻間段階」と「桶廻間式」の違いとして次の点がある。

①. 桶廻間式の主体となる突帯文土器は、組成の50%を超える主体であって、山下の指摘した櫛描文土器に随伴する少数派ではない。一条以上の複数条の突帯土器（19～21.27）7個体以上を含み、一条に限定する山下の指摘はあたらない。

②. 桶廻間貝塚の櫛描文系土器の内、主な施文原体としてハイガイなどの肋条ある二枚貝背面を用い、横位に展開する櫛描文系（図5-42～52に相当）35個体は天神山式である。と坂野は指摘している。事実、南知多の新津・向畑の二つの遺跡は天神山式の段階まで継続し、瀬戸市の長谷口遺跡も同じで、すべて横位に展開する櫛描文土器が主体となる。三遺跡ともに桶廻間式土器まで継続しておらず、天神山式段階で廃絶している。この事実から、横位展開の櫛

* 報告に個体数の記載はなく、2021年7月直接坂野から教示を得た。

描文土器は天神山式の主体となる固有の系譜であり、山下の主張するように「天神山式楠廻間段階」に残る、という確実な証拠は確認されていない。

③. 突帯文土器を主体とする楠廻間式にのみ伴う、縦位花弁状の櫛描文系（図 9-30～32）は、楠廻間式の組成に占める割合は 5% 未満である。突帯文土器と無文土器の二者で約 9 割を占める楠廻間式土器は、新たに出現した型式系統だが、天神山式に完成した土器製作技術を引き継ぎ、無織維・薄手という属性は東海西部地域の特徴である。

以上の事実関係から判明した楠廻間式土器の他遺跡での在り方を検証する。

（図 8-1～41）は隣接する塩屋遺跡の天神山式であるが、坂野説に即して（25～27）の縦位花弁状となる可能性ある櫛描文系を楠廻間式と仮定すると、突帯文系の（28～36）とは 3:9 の比率で、後者が明らかに多く楠廻間式の構成に共通する。

天神山遺跡の（図 6-56～58）の突帯文土器に対応する、櫛描文系の有無を検討する。（図 5-53）は中央から右下が、施文後のナデによって文様が消されているが、縦位の弧線文を配したと推測される。D 区 4～6 層接合の（50）より上位の同 3 層の出土である。（54）は E 区 2 層出土。B 区 2～5 層は天神山式が主体で、B 区 1 層出土の（55）はより新しい。

以上の 3 片は縦位展開の楠廻間式の櫛描文系と類似すること、また本来の天神山式層より上層から出土した共通点を持つ。突帯文系とともに各 3 片のみで量の乏しさは否めないが、天神山遺跡にも楠廻間式土器が存在したことは確かである。

（53～55）の 3 片の施文原体は（47～50）のハイガイではなく、細く密な櫛状である。塩屋の（図 8-23・25・27）も細く密な櫛状で、図 8 上のハイガイによる（15～21）の天神山式固有の櫛描文とは相違する。楠廻間貝塚では楠廻間式にハイガイ原体もあるが、報告書の 388・394・396 等は天神山・塩屋と同じハイガイ以外の不描いな原体である。

（図 9-1～18）は木曾川下流の各務原市蘇原東山遺跡の土器で、（18）の櫛描文系は横位

展開の天神山式である。主体は突帯文系の楠廻間式土器である。（17 a、17 b）の円形刺突は一乗寺南下層式に酷似し楠廻間式に伴うと推測される。

関東甲信地域の早期末に突帯文土器が一齊に出現するが、それは先行する各地の土器の属性に、突帯を付加するかたちで形成される。楠廻間式土器の薄手の突帯文土器は、関東の神之木台式の影響で出現したと理解されていたが、埼玉・打越遺跡や山梨・釣迦堂遺跡で、神之木台式に共伴するのは天神山式である例が指摘されていた（神奈川考古同人会 1983）。神之木台式の影響を受け天神山式から楠廻間式土器に移行するが、その交代は神之木台式の存続期間途中に生じた可能性が強いと推測される。

天神山式のハイガイ原体の櫛描文から、楠廻間式の別な原体の櫛描文になぜ置換したのか？を検討する必要がある。想像ではあるが、アカホヤ火山灰の降下によって、海底に潜り込むアサリやハマグリなどと異なり、海底面上で生活するハイガイは火山灰の混ざる海水に直接晒されるため、浅い海岸付近では生息が長期間途絶えた可能性がある。

伊勢湾岸の楠廻間貝塚を除き、三河湾沿岸を含む入江では楠廻間式～塩屋式土器の貝塚形成が絶無となる状況は、通常の気候変動からは考え難く、格別な現象が生じた結果と推定し、アカホヤ降下を仮説とした次第である。それは天神山式から楠廻間式土器への、型式変化の契機にもなったとも推測している。

楠廻間式土器の遺跡は特別に少ないが、上記以外に浜名湖に臨む有力な寺川・天白遺跡がある。天竜川を遡る長野県へ拡大し、上伊那郡飯島町カゴ田遺跡では、花弁状櫛描文土器を伴うと推測できる突帯文土器が確実にある（神奈川考古同人会 1983、長野県図版 3 参照）。木曾川経由も木曾・板敷野遺跡を経て、塩尻市にも無織維突帯文の楠廻間式土器が持ち込まれている状況が判明している。

2-11. 塩屋式への移行とその推移

塩屋式土器の生成は、楠廻間式の突帯文土器を祖型とすると考えている。この系譜の推移を追うため塩屋遺跡の土器を（図 10）に示した（2 のみ）神之木台遺跡。

塩屋遺跡の土器を再検討した山下勝年は、本遺跡に楠廻間式土器は存在しないと断定し、その前提で塩屋式を4型式に細別した（山下2006）。この仮説に対しては、塩屋遺跡と楠廻間貝塚の土器を並べて図示し、塩屋に楠廻間式土器の実在を検証した（増子2006）。

発掘者の職部によって塩屋上層のA類土器が下に、B類が上から検出されたという1984年の記述がある。公開された上層土器群には数型式の混在が判明した。A類とされたいくつかは楠廻間式であり、その一部がB類の下層にあるというのは当然である。要は上層土器群の厳密な型式分離が不可欠である。塩屋A式とB式編年試案（増子2006）を取り下げる。図8-30他の楠廻間式を塩屋A式に含めた誤りがあるためである。

塩屋式土器は古・中・新の三型式の変遷が適切と思われる。

塩屋古式土器（図10-1～21）：塩屋上層土器群から、石山式・天神山式・楠廻間式・塩屋中式土器を除いた一群である。指標となる特徴は基本的に丸底深鉢で、器壁は楠廻間式より薄く器面調整は平滑である。口縁に3条以上の細い突帯で構成される装飾をつける。上下2条の横位区画突帯間に波状文を1条（1・2・9）2条（15）3条（3・16・17）4条（4）表現する一群が主体である。

量は少ないが波状口縁の場合、波頂から垂下する突帯を加えるが（7・12・13）、平縁でも縦位の区画帯の（14）もある。モチーフが不明の多条貼付（8）、重弧文（18）上下対弧文（20）格子目文（21）單斜列（19）などの多様な文様を描くのがこの時期の特徴である。

突帯上に付加する文様原体で分類する。

1類：楠廻間式以来の伝統のヘラ刻目（1～8）を突帯に加える。

2類：海産の小巻貝である、ヘナタリカウミニナの殻を突帯上に押捺する（13～21）。

3類：素文の突帯（9～11）が数個体存在する。

4類：無文土器も存在するが量は少ない。

以上4類からなる塩屋古式土器は、分布圏が拡大し東海全域と伊那谷地域・滋賀県・福井県・石川県・神奈川県に及ぶ。編年的位置については後述で検討する。

塩屋中式土器（図10-22～24、図11-25～35）口端に接する突帯は低く目立たない。平口縁が多いが波状口縁もある（32）。突帯貼付は口縁部に集中することは古式と変わらないが、（25）のような古式に多い複雑な文様は少なくなる。上下区画帯内波状突帯貼付（26・29・34）が継続し定型化する一方で、波状突帯が文様帯下端に移行する（24・25・28）は中式の指標となる特徴である。2ないし4条の横位平行のみ（31・33・35）は古式ではなく、中式で新たに出現する。

突帯上から脇部に付加される条線帶の原体は、沿岸地域では途絶えていたハイガイ利用が復活して、肋条ある二枚貝背面を多く用いるようになる（22～27・29・32～35）。内陸では櫛状具（28・35）半截竹管状（31）も原体に用いる。付加する条線帶は頗る多く、左傾（28～30）は内陸部遺跡に多い傾向がある。

塩屋遺跡には（図10-22～24）の塩屋中式土器がわずかに残る。これはハイガイの条線帶（22・23）の利用と、文様帯下端波状突帯の（24）の特徴から古式と分離した。

引き続き長野県南部から静岡県東部まで土着化し、関西から日本海岸まで最大の広域分布を示す。そのため文様表現は各地で地域的多様性が生じている。

塩屋新式土器（図11-36～49）口縁部の波状突帯貼付は痕跡的となるが、横と波状各1帯の（39）は省略の極限となる表現と思われる。横位突帯は1条（41）が楠廻間式以来復活するが、これも省略の結果であろう。2～3条が多い一方で無突帯（45）もある。波状口縁深鉢は37の低い波状と42の鋭く尖る例がある。名古屋市大曲輪の37に酷似する例は楠廻間貝塚にある（報告117P-594）。36は低い四波頂で一対にのみ、2条の横位突帯上に短い縦の貼付を付ける。38は口端の突帯に縦瘤を貼り付ける。

口縁部の条線帶はハイガイが多い。内陸の市場遺跡では半截竹管（45）原体不明（41）とともに、条線帶の省略（40）も現れる。

塩屋新式土器は関市市場遺跡を除いて、ある程度以上のまとまりのある一括資料はないが、図示した岐阜・愛知県下の遺跡で少数が認めら

れる。他地域では長野県下伊那の倉平、上伊那では舟山、諏訪の十二の後に確実な塙屋新式が認められる。静岡では木島遺跡三次調査と、四次調査集石内に存在し、この遺跡の東海西部地域との強いつながりを暗示している（引用は神奈川考古同人会編1983による）。西方への波及は滋賀県安土遺跡M地点246と、N地点155の波状口縁例は塙屋新式土器に比定される（泉編2005）。

2-12. 塙屋式土器の編年位置決定の試論

東海西部地域では塙屋式段階に他地域型式土器の搬入がほとんどなく、直接の型式対比は困難である。一方塙屋式土器は長野県南部域に比較的安定的に搬出される傾向のあることは知られていたが、東海西部地域の側からその実態を分析したことはこれまでない。長野南部では神之木台式や下吉井式土器が、山梨・静岡由東海系以上に持ち込まれ、在地型式との関係もかなり判明している。早期末・前期初頭の堅穴住居址が数多く調査され、複数の共伴関係の比較検証が可能という利点がある。

長野の早期末は絡条体圧痕系土器群で、突帶は前期初頭の塙田式から繩文と併用されると認識されていた。しかし中沢道彦は塙田遺跡の報告総括「塙田遺跡出土早期土器群について」で、逆T字形突帶に着目して、塙田式に先行する要素であり早期末まで遡るとして考察した（中沢1994）。これを受けた守矢昌文の分析（守矢ほか2000）によって、茅野市周辺の早期末の知見が追加された。

（1）神之木台式土器の共伴

守矢は茅野市買地遺跡3号住の、器面に繩文施文の盛行する1群1、2類土器の逆T字形を含む突帶の一部に、絡条体（図12-1.2）繩原体（同5）棒状工具の押圧（同3）ある突帶土器を含むこと。共伴するのは関東の神之木台式（同7）と、東海系の薄手の土器（同8～10）であると指摘した。東海系の土器は指頭押圧痕ある器面と観察されており、楠廻間式土器と推定される。同市内の芥沢遺跡には楠廻間式の明確な例がある（同11）。

茅野市内の神之木台式土器の様相は、芥沢遺跡で切り合う31号住（古）に天神山式比定土器と共伴する。34号（新）には楠廻間式と

類似する土器を含むが、在地化した突帶土器がなく、買地3号住との比較はできない（百瀬2007）。ただ神之木台式土器は、天神山式（31号住古）と楠廻間式？（34号新）双方に伴う事例は貴重な成果である。

重要な情報は東海系とされた薄手土器である。木島遺跡を含む富士川流域は神之木台式の分布圏で、木島遺跡に楠廻間式土器は存在しない。天神山式と楠廻間式土器の主分布域は伊勢湾沿岸であり、その伊那・諏訪への搬出は天竜川・木曽川水系を経由する東海西部地域が発出地に限定される。

中沢の予測した、塙田式に先行する逆T字形突帶の出現と、突帶上に絡条体・繩・棒の各圧痕を付ける二つの要素を備えた組成を、守矢は買地3号住でセットとして確認し、早期終末に位置付けた（図12-1段目）。これは遺構一括資料による矛盾のない、正確な情報に基づく指摘である。

（2）塙屋古式土器の共伴

第二段階の図12の2段目は、買地3号住に重複する6号住の土器である。守矢は3号との混在を予測して、形式的な分類を併用して整理する。在地の突帶繩文土器の突帶刻はヘラが多用され（12～17）、タガ状（18）を含む。この主体となる土器群と、図示しないが繩文のみの土器も多い。撚糸文も使用している。6号では3号になかった下吉井式（20）が存在するので、前期初頭の塙田式土器に比定されている。

6号で重要なのは、東海系の小貝具圧痕のある塙屋古式2類（22）と、素文突帶の同3類（23）が存在することである。これらは3号にはなかったので、新たに6号の塙田式に加わった要素と認定される。これまで塙屋古式2類土器＝塙屋B類＝木島II式土器は、濱谷によって早期末に位置付けられていた。しかし上記の買地6号住の在り方は、塙屋古式2類土器が前期初頭である塙田式に組成することを明示する。

前述の芥沢遺跡31号と34号での神之木台式土器に伴う東海系が、天神山式と楠廻間式にまたがることは、買地6住の在り方に矛盾のないことを、間接的ながら証明している。

（3）塙屋中式土器の共伴

図12の3段目は諏訪考古学研究所による、芥沢遺跡昭和26年発掘住居址資料で、下吉井式土器に共通する突帯(24~27)押引文と沈線(28.29)縄文土器(30~33)と塙屋式(35.36)からなる。本遺跡の2007年報告では30軒を超える住居址が記録されているが、本遺跡の突帯土器は器面に縄文施文のない例が多く、突帶上に稚な刻目を付ける特徴が目立つ。駒形遺跡も同様な例が多く、從来これらは在地化した下吉井式土器と呼ばれていた(樋口ほか2004)。

北信の塙田式と並行する、南部に分布する坂平式土器と定義された(諏谷2006)が、茅野市内の買地6号住は、突帯と縄文を特徴とする塙田式が主体である。同市内の芥沢遺跡は器面の縄文がない坂平式が主体で、同時期ではあり得ない。

共伴する東海系土器から分析すると、時系列で前後関係にあることを示している。買地6号住の塙田式土器には塙屋古式が伴うことは前記した。一方、坂平式に共伴する東海系土器は、ハイガイを含む原体の条線帯を、口縁部の突帯から上脚部器面まで施す塙屋式土器である(35.36)。特に35は波状細隆線が口縁部文様帯下へ移動した典型である。

諏谷論文の第5図1~7は坂平61号住土器であるが、突帯上と器面に縄文を施文する(5)を塙田式とするが、報告では花積下層式に比定されている(報告P.306)。共伴する東海系土器は、上ノ山Z式ないし直後で塙屋式より新しい。坂平式と塙田式との共伴を、立証する根拠になる資料ではあり得ない。

(4). 塙屋新式土器の共伴

図12の4段目は宮坂英式昭和36年発掘の駒形1号住の資料で、(37.38)は肥厚口縁の深鉢。その特徴は中道式の指標とされている。共伴する(39)は明らかに塙屋新式土器である。

東海西部地域の早期末~前期初頭の型式を、関東編年と直接対比するのは難しいと考え検討を怠ってきたが、長野県の研究成果を積極的に援用すべきと判断した。その結果は上記のとおりである。天神山式と楠廻間式土器が神之木台式土器並行であることは、精度の高い買地遺跡3号と6号・芥沢遺跡31号と34号の切り合の報告に矛盾はない。

塙屋古式は買地6号住で、塙田式と下吉井式と共に伴し、同時期である確率は高い。一方で(在地の下吉井式)と坂平式土器が塙田式の後続型式であることは、芥沢昭和26年発掘資料に塙屋中式が共伴することから、その蓋然性は高いと思われる。塙屋新式はそれに続く中道式土器に伴う。両地域の編年は相互検証までが展望に入ってきたと思われる。東海は長野県の研究成果を、謙虚に学ぶ必要があると思う。

2-13. 結語

東海西部地域の縄文早期後半の研究は、吉田富男を中心に柏畠式・上ノ山式・入海A、B式の設定に始まる(吉田1954)。石山貝塚での石山式の設定を受けて、紅村は本遺跡の層位から石山式と天神山式の細別を確定した。増子は八ツ崎I式・入海O式を追加したが、優れた遺跡の層位的資料の情報も、編年的な整備を伴うことがないと読み解けないことがある。天神山遺跡の柏畠式以前土器はその典型例であった。

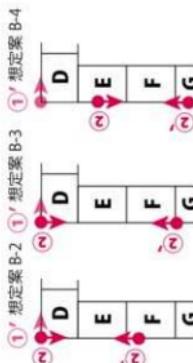
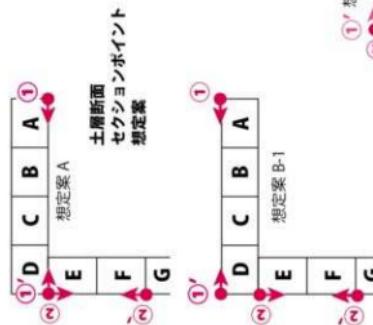
しかし、事実関係を正確な記録に残された紅村資料によって、我々は本遺跡が知多半島南端遺跡群の中で、異例の茅山下層式・八ツ崎I式・柏畠式に始まることを、層位との関係で論ずることのできる稀な機会を与えられた。

最後に、資料の扱いと研究に関して全面的に委託を頂戴した、紅村京子様に厚くお礼を申し上げます。(増子康眞)

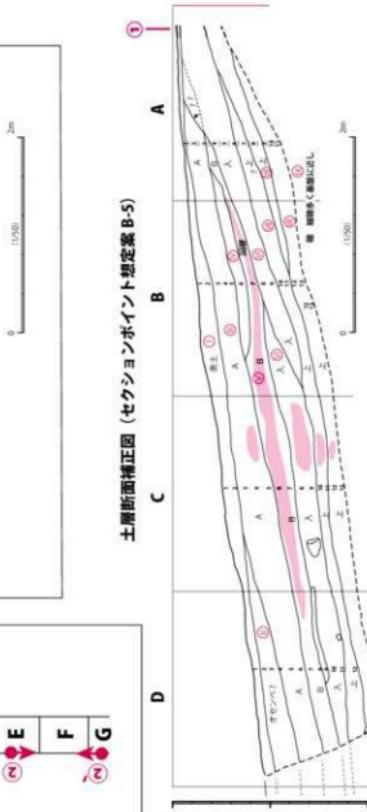
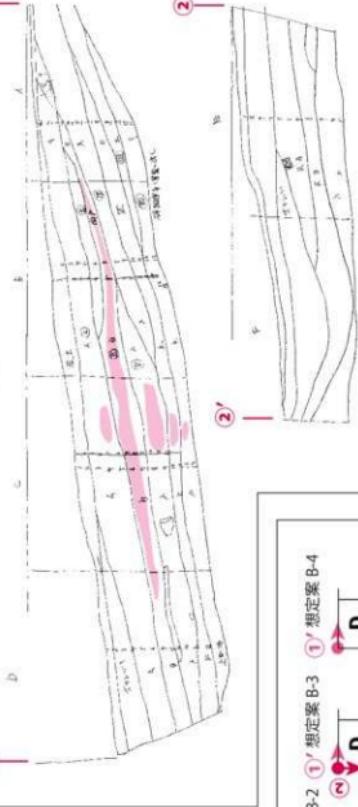
3. 天神山遺跡の土層断面図について

図2の土層断面図は天神山遺跡調査時の数少ない記録として、とても重要な情報を与えているものであることは間違いない。しかし、やや詳細に見ると、難しい図面であることが理解できる。端的に言うと、土層断面記録のセクションポイントがよく分からぬのである。土層断面は、A~D区の壁記録から、90度クランクしてE・F区の壁記録へと続くようであるが、D区からE区へのクランク部分がどのように接続するかの特定が難しい。特にこの点に関して検証し、当時の調査の状況を復元してみたい。

図13は土層断面図の元図と検討結果を示したものである。右上は元図(図2と同一)、左上はセクションポイント位置想定図である。想



土層断面元図



土層断面補正図（セクションポイント想定案 B-5）

1) 地盤上・下部に、既存の斜面を有する。 2) 地盤上・下部に、既存の斜面を有する。
3) 地盤上・下部に、既存の斜面を有する。 4) 地盤上・下部に、既存の斜面を有する。
5) 地盤上・下部に、既存の斜面を有する。 6) 地盤上・下部に、既存の斜面を有する。
7) 地盤上・下部に、既存の斜面を有する。 8) 地盤上・下部に、既存の斜面を有する。

図 13 天神山遭跡 土層断面補正図



写真7 調査風景写真 (磯部幸男氏撮影)



写真8 調査風景写真 (岩野見司氏撮影)

定案は、A区～D区の南壁ラインの記録を残したとする想定案Aと、同北壁ラインの記録を残したとする想定案Bとに大きく分けられ、想定案BはE～F区のセクションポイントの位置によって、B-1～B-5案までを提示した。これは、『愛知県史 資料編』で知られている写真で見た場合（写真8）、これだけの場合が考えられるというもので、A区～D区の土層断面セクションポイント（①・①'）と、E区～F区の土層断面セクションポイント（②・②'）との位置関係に基づくものである。このように複数通りの想定案が考えられたのは、元図（図2）でみたところのE区～F区セクションの右端が、区下方に從って手前側に傾斜をなしており、掘削箇所の端部である形状を呈していることによる。A案の場合は、A区～D区の土層断面はトレーシングペーパーに写し取られる際に左右反転したものと考えられるが、現在は現地で作図した測量図面のもとがないため、その可能性の是非は不明と言わざるを得ない。また、B案にした場合について、5通りを想定した。B-1案は土層断面元図にあるE区・F区の記載を尊重した場合である。この場合D区南東端が掘削端部となるには、少なくともD区の一部が未掘削であった場面があったことになる。B-2・B-3案は、掘削箇所の端部からの測量を重視して、実際にはD区南西端からの測量であったことを想定したものである。E区・F区の4mの測量であったとする記録との整合は保てないようである。B-3案はE区・F区の記録を実施したことと尊重したもので縮尺と変倍する形で図化してしまったとするものである

が、果たして実際にそのようなことが起こるのであろうか。

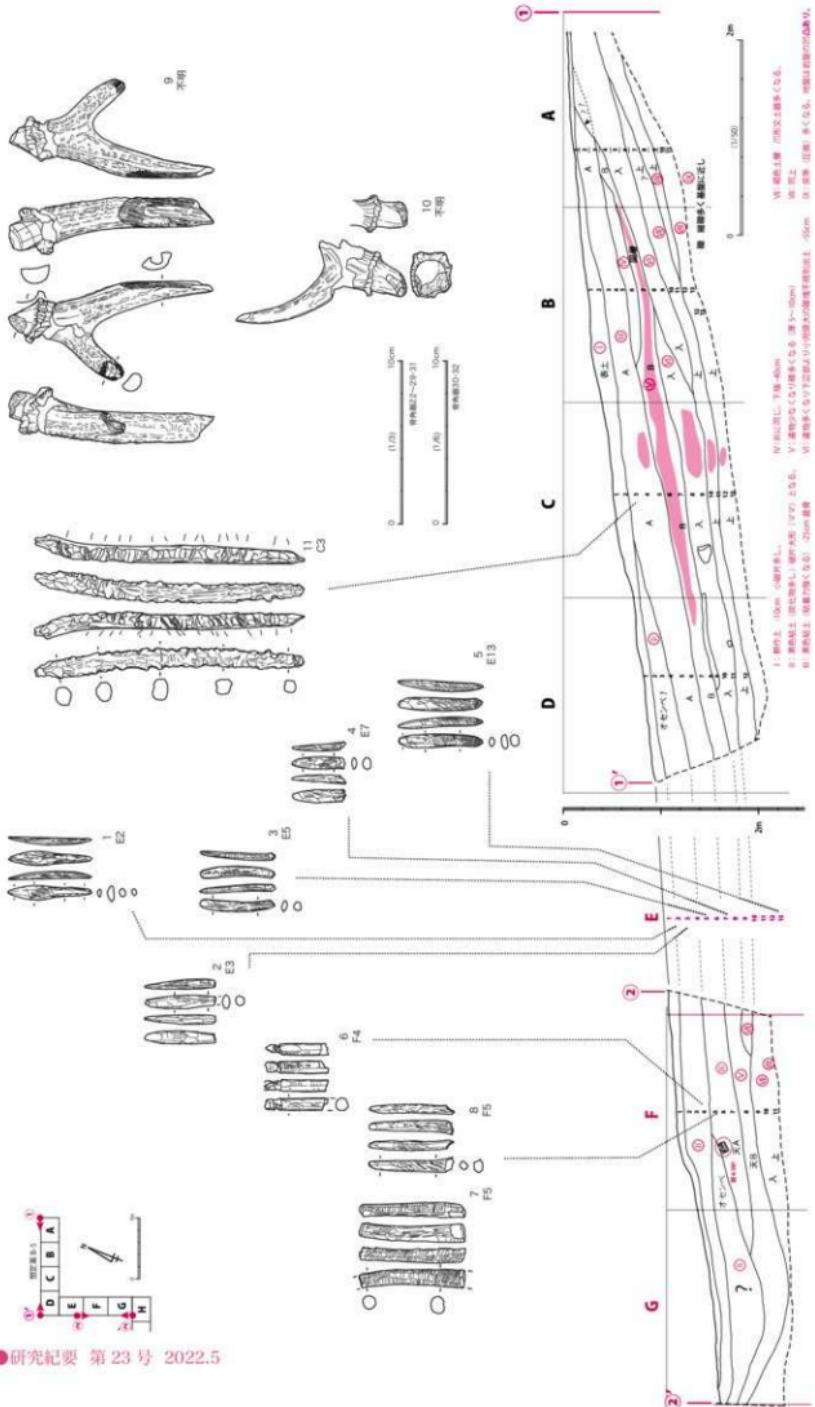
このことを考える上で、重大な示唆を与える情報を、磯部幸男氏の一連の調査写真に見つけることができた（写真3・7）。写真7は北東端よりA区からD区側に撮影した調査風景である。これまで知られていた調査写真では、グラウンド状に貫通して掘削調査している様子しか知られていないなかつたが、写真7を見ると区の上から人が立って見れるほどに土橋状に掘削が残されていたことが分かる（写真7白の矢印部分）。この部分は、写真8では白印部分に当たるようで、A～D区の掘削に当たっている生徒らの状況から、写真7の状態から写真8の状態に、掘削調査が進行したことが分かる。それを勘案したセクションポイント案が、B-4・B-5案である。特に、写真7を見ると土橋の幅は1区分あるように見受けられる。従って、最も可能性の高いのはB-5案と考えた次第である。

セクションポイント位置がB-5案であるとして、セクションを補正したものが、図13の下図である^{*}。元図に区分けの線が入れられているものの、これが実はF区とG区の境に相当するようである。北端の掘削はE区内から始まっていたようで、掘削の下場がF区端の位置に当たるようである。このことから、②・②'の土層断面の主体はF区～G区であったと考えられ、土層断面記録終了後にE区の掘削が本格的に開始された可能性が高い。

また、土層断面元図には、紅村氏によって試掘調査時の土層との対比が試みられていた。紅村氏の残された検討と澄田メモにある土層断面

*赤線・赤字部分が筆者（川添）の加筆・検討部分である。

図 14 天神山遺跡 骨角器の出土様相



記録を参考とすると、図 13 下の注記のようになる可能性が考えられる。今後、各方面からのさらに検討の進むことが望まれるところである。

図 14 は、筆者が調査をした骨角器資料を配列したものである。図 14-9・10 の鹿角斧については出土区・層位は不明であるものの、ペン先形刺突具・釣針などの利器（図 14-1～8）に関しては E 区・F 区出土か集中しており、装身具・儀器と思われる鹿角製品（図 14-11）のみがやや離れた場所で出土している。11 自体、何か特別な意味を有していた可能性が、この出土地点の差として表出しているかもしれない。（川添和暁）



写真 9 鹿角斧（図 14-9）出土状態（磯部幸男氏撮影）

掲載土器出典

図 9-2：高橋雄三・吉田哲夫 1977『横浜市神之木台遺跡出土の縄文時代遺物』調査研究集録第 2 冊。

図 11-25：増子康頼・長江洋一 1995『クダリヤマ遺跡』福武町教育委員会。

図 11-28：吉田英敏 1979『港町岩陰』美濃市教育委員会。

図 11-29.30：豊田市 2013『新修豊田市史』18a。

図 11-31～34.47：大參義一ほか 1991『小の原遺跡、戸入障子原遺跡』岐阜県教育委員会。

図 11-35：岐阜県文化財保護センター 1997『山手宮前遺跡』。

図 11-37：名古屋市教育委員会 2018『大曲輪遺跡』。

図 11-46：名古屋市見晴台考古資料館編 1993『名古屋の縄文時代資料集』。

図 11-48：長田友也 2019『今朝平遺跡』豊田市埋蔵文化財調査報告書 79 集。

図 12-1～10.12～23：守矢昌文 2000『買地遺跡』茅野市教育委員会。

図 12-11：守矢昌文ほか 1990『芥沢遺跡』茅野市教育委員会。

図 12-24～36：神奈川考古同人会編 1983『シンポジウム'83 縄文時代早期末・前期初頭の諸問題 土器資料集成図集』。

図化資料の所在

図 14-1～11：名古屋大学博物館

参考・引用文献

- 泉拓良編 2005『山内清男考古資料集15』奈良文化財研究所
- 磯部幸男・杉崎章・久永春男 1965 「知多半島南端における縄文早期末～前期初頭の遺跡群」『古代学研究41』古代学研究会
- 磯部幸男 1984 「塙屋遺跡出土の縄文土器」『知多古文化研究1』知多古文化研究会
- 上峯篤史編 2022『天神山遺跡』南山大学上峯篤史研究室
- 大參義一 1961 『八ツ崎の貝塚』刈谷市教育委員会
- 岡本勇 1962 『吉井城山貝塚』『横須賀市立博物館研究報告6』
- 岡本勇 1970 『下吉井遺跡』神奈川県教育委員会
- 小澤一弘・川添和曉 2018 「南知多町天神山遺跡の調査メモについて」『研究紀要 第19号』愛知県埋蔵文化財センター
- 各務原市埋蔵文化財センター 1999 『蘇原東山遺跡群発掘調査報告書』
- 神奈川考古同人会編 1983 『シンポジウム'83 縄文時代早期末期～前期初頭の諸問題 土器資料集成図集』
- 川添和曉 2018 「東海地域・関西地域における縄文時代早期骨角器の様相」『考古学フォーラム24』
- 紅村弘 1963 「東海の先史遺跡 総括編」名古屋鉄道株式会社
- 小松学ほか 1994 『矢口唐沢南遺跡』塙尻市教育委員会
- 渡谷昌彦 1981 『木島 静岡県富士川町木島遺跡第4次調査報告書』富士川町教育委員会
- 渡谷昌彦 1994 「土器型式より見た縄文早期と前期との境について」『第7回縄文セミナー 早期末・前期初頭の諸様相・縄文セミナーの会』
- 渡谷昌彦 2006 「坂平式土器の設定」『長野県考古学会誌118号』長野県考古学会
- 坪井清足ほか 1956 『石山貝塚』平安学園考古クラブ
- 立松宏・山下勝年 1983 「愛知県天神山遺跡の縄文早期土器」『古代人41』名古屋考古学会
- 中山英司・稻垣哲也 1955 「入海貝塚」東浦町教育委員会
- 永井宏幸ほか 2004 「長谷口遺跡」愛知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書126集
- 坂口俊哉ほか 2005 「桶廻間貝塚」知多市教育委員会
- 桶口誠司ほか 2004 「坂平」富士見町教育委員会
- 廣瀬允人 2021 「愛知県南知多町天神山遺跡出土の縄文早期末頃の動物遺存体群」『あいちの考古学2021資料集』51～52頁 愛知県埋蔵文化財センター
- 堀内祐花・須賀永輝 2021 「南知多町天神山遺跡の縄文土器」『あいちの考古学2021資料集』49～50頁 愛知県埋蔵文化財センター
- 増子康眞 1983 a 「八ツ崎I式土器をめぐって」『古代人41』名古屋考古学会
- 増子康眞 1983 b 「入海式土器の再検討」『古代人42』名古屋考古学会
- 増子康眞 1999 「列島における縄文土器型式編年研究の成果と展望～東海地方前期」『縄文時代 第10号第二分冊』縄文時代文化研究会
- 増子康眞 2006 「桶廻間式から塙屋式土器へ」『伊勢湾考古20』知多古文化研究会
- 百瀬一郎 2007 「芥沢遺跡II」茅野市教育委員会
- 守矢昌文ほか 1990 「芥沢遺跡」茅野市教育委員会
- 守矢昌文 2000 「賀地遺跡」茅野市教育委員会
- 山下勝年 1989 「所謂、石山式土器の再検討」『伊勢湾考古5』知多古文化研究会
- 山下勝年 2003 「天神山式の終焉と塙屋式土器の成立」『伊勢湾考古17』知多古文化研究会
- 山下勝年 2006 「塙屋式土器の細分」『古代人66』名古屋考古学会
- 吉田富男 1954 「入海貝塚の思出」『郷土文化9巻2号』
- 渡邊誠・村田文夫 1966 「新作D地点貝塚発掘調査報告」『川崎市文化財集録2』

設楽町川向東貝津遺跡出土の 礫器についての再検討 ～縄文時代の礫器について～

田中 良

設楽町川向東貝津遺跡から出土した礫器について、再分類を試みた。その結果、27点中24点が石核となつた。石核は、剥片剥離を一方向ないし二方向から行う一群(a・b群)と周縁から行う一群(c群)に分類できる。これらの石核に共通しているのは、彫形状大きく変えない程度の剥片剥離作業で終了している点と、作出された剥片は、剥片石器として加工されない点である。また、礫器とした1点には、潰れが認められた。

1.はじめに

現在、設楽町では設楽ダム建設に関連して、大規模な発掘調査が継続して行われている。それにより、縄文時代の遺跡が数多く発見されている。それらの遺跡から多く出土するのが、在地石材である安山岩製の石器である。特に、ガラス質で、赤灰色の層状あるいは脈状が確認できる安山岩が大量に使用される(安山岩B類)。この安山岩は、設楽町付近に広く分布する「設楽火山岩類」に伴う安山岩である(樋木2019)。この安山岩は、硬く緻密で、打欠くと鋭利な縁刃を作出できるため、スクレイパーや刃器類、打製石斧など幅広い器種に利用されている。設楽地域の縄文時代人の営みを考える上で、非常に重要な石材である。しかし、風化面の摩耗が著しいことや加工の頻度が他の剥片石器に比べて低いことなどから、漠然とした捉え方しかされてこなかった。

設楽町マサノ沢遺跡の整理作業の際、長田友也氏から、「礫器と分類されているものの中に、石核と考えられるものがある」と指摘された。一見すると、縁辺に両面から加工を施し、鋭い刃部を形成するような剥離痕が認められるが、使用痕のような潰れや摩耗は認められない。むしろ、連続した剥離作業面が片面に認められた。

こうして得た知見のもと、改めて既報告の資料を再検討する必要があると考え、今回川向東貝津遺跡の礫器を再分類し、分析を試みる。

2.川向東貝津遺跡の概要と分析

分析の前に、川向東貝津遺跡の概要について簡単にまとめる。

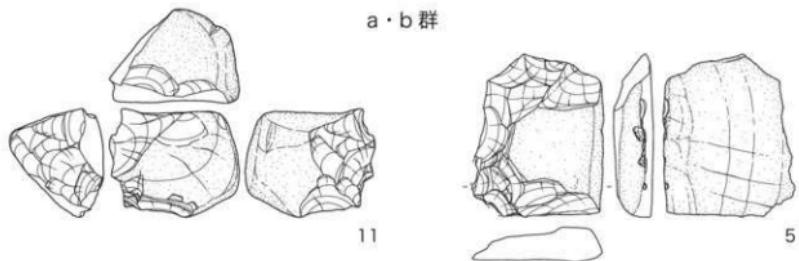
遺跡は設楽町川向に所在し、境川右岸の台地上に立地している。遺跡の南西には境川が流れている。縄文時代中期後半の竪穴建物跡4棟や後期の竪穴建物跡2棟などがあり、中期後半から後期前葉までの集落跡が確認されている。また、集石土坑や陥し穴は早期まで遡る。それら縄文時代の遺構より下層からは、縄文時代草創期と後期旧石器時代の遺物集中地点が検出されている(樋上2020)。

今回分析する礫器は、礫器として報告されている27点である。時期幅がかなり広いが、対象の遺物は縄文時代遺構面よりも上位から出土しているため、草創期以降の所産である可能性が高いものである。石材は安山岩が25点(A類1点、B類9点、C類1点、D類13点、E類1点)、凝灰岩が2点となっている。どの石材も遺跡周辺で採取可能であり、安山岩は他の石器にも多用されている。

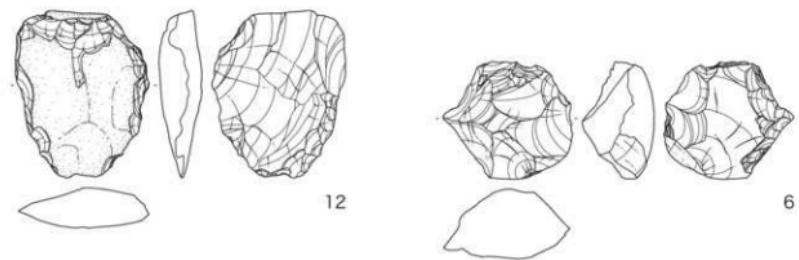
再分類した結果、石核24点、剥片1点、礫器1点、礫片1点となつた。ほとんどが石核という結果になったが、それらには共通点が認められるため、それを中心に分析を試みる。

石核として分類した24点には、剥片剥離を一方向からのみ行う一群(a群)と、二方向から行う一群(b群)、周縁から行う一群(c群)の3種類認められる。また、それぞれに原礫面を作業面にする個体と、打面を平坦にする調

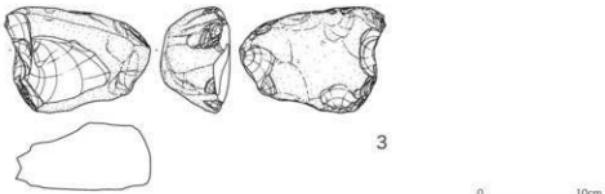
a・b群



c群



礫器



0 10cm

図1 川向東貝津遺跡出土の石核(a・b・c群)と礫器(S=1/4)

表1 川向東貝津遺跡出土の礫器

通番	発掘区	グリット	遺構・土層	番号 d- d	器種 (旧)	群別	素材	打面	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
1	10cb	i5		6	礫器	礫片			安山岩 A	15.7	13.8	6.0	1.20	
2	10cb	i5		22	礫器	c	円礫	平坦打面	安山岩 B	77.8	63.3	44.5	228.60	
3	15A1	9829		0015	礫器	-	亜円礫		凝灰岩	97.8	134.9	64.2	892.90	刃部再生?
4	15A1	9728	0035I	0045	礫器	a	亜円礫	原礫面	凝灰岩	42.6	84.5	89.8	364.70	
5	15A1	9730	0025I	0077	礫器	a	亜角礫	原礫面	安山岩 D	150.4	121.7	36.6	943.00	
6	15A1	9731		0386	礫器	c	剝片素材	平坦打面	安山岩 D	108.3	119.8	66.3	816.40	
7	15A1	9729	0035I	0826	礫器	a	円礫	原礫面	安山岩 D	117.3	69.1	38.7	384.30	
8	15A1	9730	0025I 床面 直上	1047	礫器	b	亜角礫	平坦打面	安山岩 D	163.0	80.3	67.4	133.00	大形の剝片を作出
9	15A1	9732	楔 2	1280	礫器	a	円礫	原礫面	安山岩 B	138.8	94.3	44.8	897.50	
10	15A1	9930	南壁	1295	礫器	a	円礫	平坦打面	安山岩 D	102.6	66.9	39.6	324.60	
11	15A1	9831	1775I	1653	礫器	a	亜角礫	平坦打面	安山岩 D	100.2	120.3	86.9	1193.60	縦に長い剝片作出
12	15A2	9732	楔 2	2254	礫器	c	剝片素材	原礫面	安山岩 D	154.3	123.4	39.7	785.50	
13	15A1	9729	0035I 床面 直上	2761	礫器	b	亜円礫	平坦打面	安山岩 B	118.2	80.4	50.1	444.50	
14	15A1	9728	0035I	2842	礫器	c	亜角礫	平坦打面	安山岩 D	123.7	93.3	39.4	630.10	
15	15A1	9730	1295K -20009	礫器	a	亜円礫	原礫面	安山岩 D	143.8	105.2	64.5	1178.00		
16	15A1	9731	1405X 北 -20010	礫器	b	分割礫 (円礫)	平坦打面	安山岩 B	91.5	78.5	35.6	300.40	階段状の剝離面	
17	15A1	9730	1975K -20026	礫器	b	剝片素材	平坦打面	安山岩 D	110.4	75.3	21.9	239.50		
18	15A1	9733	2785K -20033	礫器	a	亜円礫	平坦打面	安山岩 D	131.0	123.0	47.3	773.30		
19	15A1	9830	表面精査 -20044	礫器	a	円礫	平坦打面	安山岩 D	89.2	72.9	36.3	280.40		
20	15A1	9931	南壁	1295I -20051	礫器	c	亜円礫	原礫面	安山岩 D	124.8	76.9	59.6	622.00	
21	15	-	表採	15 -20058	礫器	a	亜円礫	原礫面	安山岩 B	92.7	81.5	42.3	398.40	
22	4KKH	9729L		0540	礫器	a	亜円礫	原礫面	安山岩 E	(106.3)	(69.8)	34.1	395.13	
23	4KKH	9527L		0595	礫器	b	亜円礫	平坦 + 原礫	安山岩 B	92.9	73.5	32.3	280.48	
24	4KKH	9527N		0702	礫器	c	円礫	原礫面	安山岩 B	(96.1)	(80.9)	41.0	462.62	
25	4KKH	9930C		0818	礫器	a	亜角礫	平坦 + 原礫	安山岩 B	105.8	112.0	88.3	1187.80	
26	4KKH	9729P		2368	礫器	剝片?			安山岩 B	120.6	96.5	53.0	392.90	
27	4KKH	9829A		3274	礫器	a	亜円礫	平坦打面	安山岩 C	120.0	113.4	82.9	1233.10	

整を行う個体があるが、細かい調整は行われない。a群は、4・5・7・9・10・11・15・18・19・21・22・25・27である。その内、作業面が原礫面(4・5・7・9・15・21・22)、調整面(10・11・18・19・27)、混合(25)である。b群は、8・13・16・17・23である。その内、作業面が調整面(8・13・16・17)、混合(23)である。c群は、2・6・12・14・20・24である。その内、作業面が原礫面(12・20・24)、調整面(2・6・14)である。

a群とb群は、幅広な不定形剥片を作出する事例が多く、幅3~4cm程度の剥離痕が認められる。少数ではあるが、7~8cm程度の剥離痕が認められる個体もある(13)。これらの石核に共通する点として、作業面を作り変えたり、複数作出した痕跡が認められないことである。また、鋭利な剥離面を持ち、それらが一見すると刃部のようにも見える。しかし、摩耗や潰れなどは認められない。c群は、前述した一群とは目的が異なる石器の可能性がある。これらは、一つの作業面から連続的に剥片剥離作業を行う一群とは違い、周辺から剥離する。平面形は円盤形になるが、刃線の形成には至っていない。また、片面加工で原礫面を多く残す。刃部には摩耗や潰れ、敲打痕は認められない。以上のことから、a・b群とは別の器種と捉えることも可能である。砾器としたものは1点(3)のみであったが、上記の石核とは異なり刃部下部に潰れが認められ、上部では垂直方向の剥離の後、作業面の作出のような水平方向の剥離が加えられている。刃部再生に伴う剥離であろうか。このような点から、a・b・c群とは異なるため、砾器と認定することにした。

3. 考察

これらの石核は、時期的な差や特徴などは見出せなかつた。その理由は、単純な剥片剥離作業に起因するためである。また、これらの石核からは、4cmほどの幅広な不定形剥片を剥がしていたと考えられるが、その剥片が石鐵やスクレイパーに加工された資料はほとんどない。しかし、安山岩製の剥片は縄文時代遺構面で1038点出土しており、安山岩を用いた剥片

剥離作業をおこなっていたことがわかる。それら剥片を製作するために、これらの簡易的な石核が用いられた可能性が高い。また、こうして得られた剥片は、素材として石鐵などに加工されたのではなく、それ自体が利器として用いられたのであろう。

4.まとめと今後の展望

今回は、報告書で漠然と砾器として分類していた資料を再検討した。その結果、砾器と認定できるものは少なく、石核が圧倒的に多いことが判明した。また、これらの石核から剥離された剥片は、簡易的な石器として利用されていた可能性が想定される。この認識にたつと、石核の素材形状を変えるほど剥片剥離が行われず、一方の縁辺のみおこなわれることにも説明がつきそうである。砾器については、長田氏が指摘するように、「縄文時代において砾器は、極めて限定的かつ少量みられる石器」(長田2021)であることが、今回の検討からも追認できた。今回の検討を通して、砾器の分類基準について改めて再確認した。また、こうした分類に立って剥片の分析をしないことには、縄文時代の剥片剥離技術の解明には至れないことも痛感した。今後も設楽ダム関連遺跡の整理作業が継続中であり、この手の安山岩製石器の剥離技術の解明は避けては通れない課題である。この分析を通して得られた知見をしっかりと活かし、設楽の縄文時代を解明していきたい。

本稿を執筆するにあたり、中部大学の長田友也氏にご教示いただいた。また、愛知県埋蔵文化財調査センターには資料の実見に際し、格別のご配慮をいただいた。記して感謝申し上げる。

引用・参考文献

- 大沼克彦 1998「第5章 剥離作業」「石器研究入門」57-80頁 株式会社クバプロ
- 長田友也 2021「東海地方における縄文時代の砾器について」『東海石器研究第11号』121-130頁 東海石器研究会
- 齊藤基生 1991「第5章 人工遺物 第5節石器」『久須田遺跡発掘調査報告書』111-176 中津川市教育委員会
- 桶上 昇編 2020『JR向東貝津遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第213集
- 根本真美子 2019「第5章第7節 石材分類について」『西地・東地遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第211集

清須城本丸出土の木製刀形について

鈴木正貴

清須城本丸東側の部分の発掘調査では木製刀形が出土していたが、これまでに報告書を含めて全く資料紹介されていなかった。本稿はこの木製刀形の資料紹介を行うとともに、歴史の出土状況も加味して、清須城本丸普請における祭祀行為が存在した可能性を指摘した。

1.はじめに

1996年度から1997年度にかけて、清須城本丸東側の部分の清洲城下町遺跡の発掘調査（96区・97C区）が実施された。この調査で織田信雄が改修したと推定される本丸東面石垣とそれに付随する遺構群が検出されており、後期清須城を考える上で、その調査成果は注目されているところである。この地点の発掘調査報告書は、2002年度に『清洲城下町遺跡VIII』として刊行された（宮腰・鈴木編2002）が、97C区で出土した木製刀形1点（図1）が整理作業の過程でのミスのため報告されていない。本稿は、この97C区から出土した木製刀形について資料紹介し、出土した背景について若干の考察を加えるものである。

清須城は濃尾平野を南流する五条川中流域に所在しており、戦国時代には尾張守護所が設置された拠点的城郭である。織田信長が居城したことで有名であるが、守護斯波氏が守護館を構えたのは五条川左岸と推定され、これが前期清須城と評価されている。その後、織田信長次男である織田信雄が天正14（1586）年に伊勢長島城から移転し清須城を大改修したとみられ、五条川右岸の本丸を中心とした遺構群が後期清須城と位置付けられている。その後の研究の進展より、前期から後期への移行過程は単純ではないことが推測されているが、問題となる97C区は後期清須城の本丸東端部に該当する。

2. 資料紹介

今回紹介する木製刀形は、97C区のIII G9j グ

リッドで検出2として1997年12月9日に取り上げた木製品である。他に出土状態に関する具体的な記録はないが、木製品の残存状態が良好であるため、出土位置は埋積環境が潜水状態を長期間維持した状況であったと想定される。

さて、1997年12月9日の調査日誌には

- (1) 城跡前 (SW01) SD05 東側 検I～検III
- (2) SW01 前拡張 (11j) グリッド 検II、III、IV
- (3) SW02 南側 検II、III 植物質敷物 (検II、III)
- (4) 杭列 しがらみ 清掃
- (5) D 地点 グリ石瓦溜 清掃
- (6) 特筆すべき遺物、遺構 杭列としがらみ
高下駄の蔵、漆椀、箸（数多く） 曲物（弁当箱？）
天目（大小）おろし皿 焙烙 木製品6 コンテナ10箱<以下略>

と記されている。この中で、III G9j グリッドの検出2に該当する部分は（3）SW02 南側 検IIのみであり、問題の木製刀形は（6）の木製品6点のうちの1点と推察される。SW02 南側を掘削した結果、SW02 に平行して構築された柵列SA07が検出された。SA07の遺構図（報告書第15図）の原図には、木製品と注記されたものが2ヶ所（赤色で示した細長い材）あり、両者とも長さは60cm程度に表現されているが、刀形であるか否かは特定し難い（図2）。北東側のものと仮定すればSA07の構成材の一部であった可能性が考えられ、南西側のものと仮定すればSA07及びSW02前の基礎部分に埋没していたものと推定される。

柵列SA07は城下町期Ⅰ期の溝状遺構 SX02

が埋没した後に、かつ石垣 SW02 より前に構築されたものである。他の柵列 SA04 から SA08 と合わせてその内側の地盤を固めたものと考えられることから、上記の推測が当たっているとすれば、木製刀形は石垣 SW02 構築前に埋置された可能性が高い。

刀形は、保存処理を実施する前の全長が 68.7cm を測り、長さが 2 尺以上あることから太刀をモチーフにしたと思われるが、打刀の可能性は残される。一般に平安時代を境に直刀から湾刀に変化するといわれる（本間 1939）が、本品は反りが無くむしろわずかに逆に湾曲するくらいの直刀形であり、これは木製品としての材質的特徴が形状に影響している可能性が高い。刃部は幅 0.5cm 程度薄く削る加工があつて切刃造を模したとみられ、棟（刃の反対側）は断面方形形状の平棟である。先端部の切先（鉢子）は短い小鉢子で直線的な？切先である。刃部と柄部の境界には長さ 6cm 程度のわずかに幅広の部分があり、彫に相当すると思われる。柄部の大部分は断面長方形形状で、特に細かい加工は認められない。柄部の先端は柄頭を保護する背金を表現したと思われる段差があり、刃の反対側にある突出部は背金に腕貫緒を通すための猿手を模したものかもしれない。刃文は直刃状にヤリガンナで削られたものとみられ、切先部分は細かく丁寧に作られている（図 1）。

本品は出土状況から城下町期 II 期末頃に埋置されたものと思われるが、柄部の拵えを持つ直刀形であり一般的な刀剣類の変遷とは合致しない。しかし、切先から刃文および柄部の拵えなどの表現は写実的で精巧な作りであると評価できる。

3. 木製刀形出土の意味

木製刀形は実用品とは考えにくく、雑形か形代として使用されたものと考えられるが、出土状況から見て形代として埋設されたものと推察される。大平によれば飛鳥時代以降（中世を含む）の木製祭祀遺物には木製模造品（人、馬、刀、舟、鳥、鍔先、斎串など）がある（大平 2008）と記述され、本品も木製祭祀遺物と位置付けられる。木製刀形は石垣構築に係る祭祀遺物の可

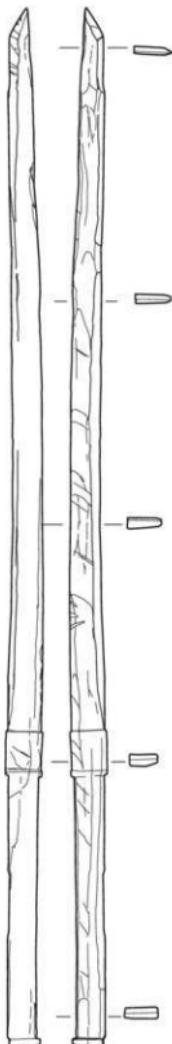


図 1 木製刀形実測図（1/4：保存処理前）

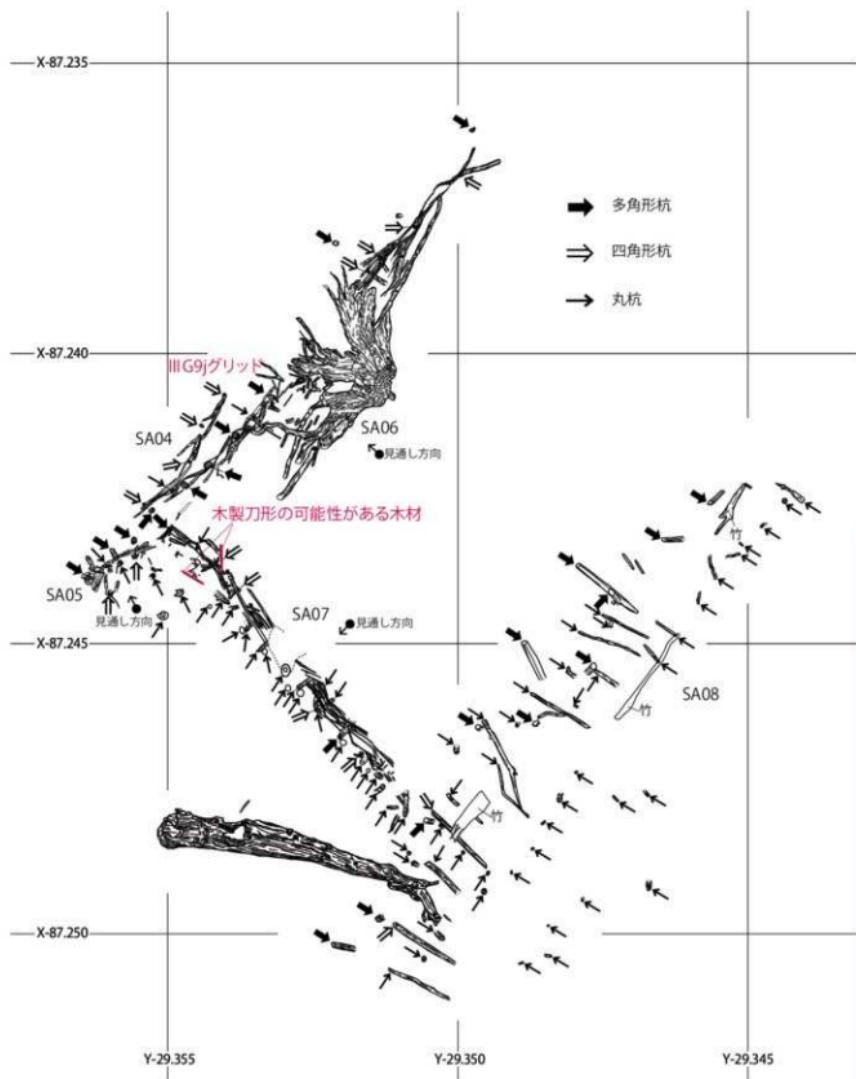
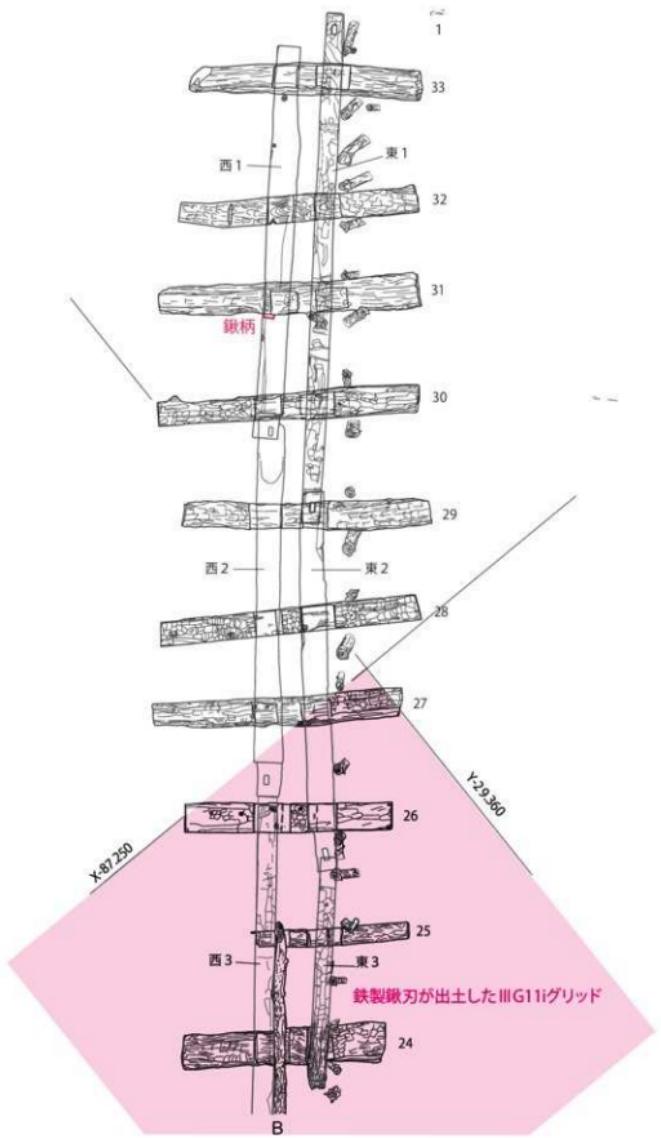


図2 木製刀形出土状態図 (1/80 報告書第15図を一部改変)



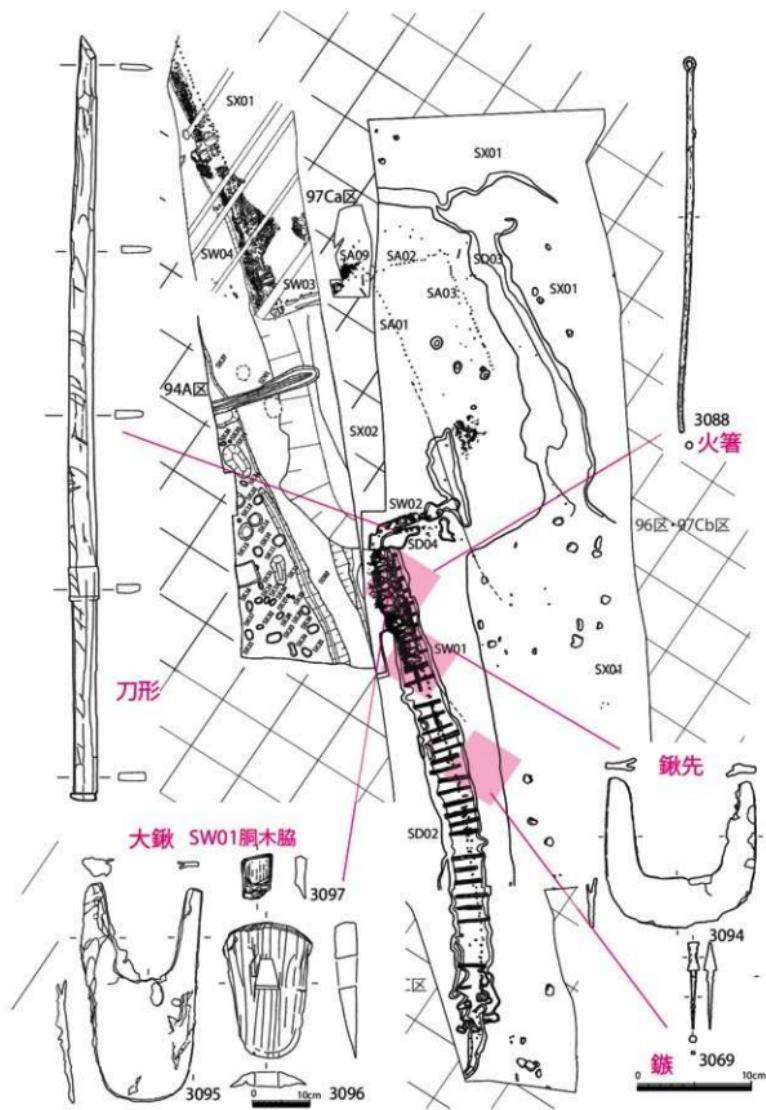


図4 94A・96・97C区祭祀関連遺物出土分布図 (1/400 報告書第264図を改変)

能性が考えられるが、この他に注目すべき遺物に鍬先 2 点がある（図 3・4）。なお、この他に火箸と鍬の存在が確認されるが、特に追加情報はなく指摘するにとどめておく。

報告書第 211 図 3094 は 97C 区のⅢ G11h グリッドで SW01 裏込めとして 1998 年 1 月 13 日に取り上げた鉄製品である（図 4）。

1998 年 1 月 13 日の調査日誌には

（1）SW01 裏込め 脚木部分の落とし ツラ出し

SX01 横 櫃部分 ラスト出し

脚木清掃

SX01 瓦取り上げ 櫃出土 杭列出土

石垣脚木

（2）特記すべき遺物 SW01 裏込めより鍬 or 鋤の刃 SX01（瓦だまり）瓦多数＜以下略＞

と記されている。この中で、問題の鍬先は清須城本丸東面石垣「SW01 裏込めより」出土した「鍬 or 鋤の刃」が該当するが、これ以上詳しい出土状況を知ることはできなかった。全長約 13cm、幅約 13cm で横断面形は V 字形を呈す。石垣の裏込めから出土しているので、石垣構築段階で埋没したものと理解される。

報告書第 212 図 3095～3097 は、97C 区のⅢ G9i グリッドで SW01 脚木脇として 1998 年 1 月 14 日に発見された鉄製品と木製品である。

1998 年 1 月 14 日の調査日誌には

（1）脚木部分清掃 脚木脇 北西より 鍬出土（1580 年代か？）

SX02 北側 檜出 III 落とし → SX02（漆椀出土）

SX01 内 杭列 櫃（倒れたもの）瓦だまり 石垣脚木＜以下略＞

と記されている。この中で、問題の鍬先は清須城本丸東面石垣 SW01 の基礎構造である「脚木脇 北西より 鍬出土」が該当する。SW01 の石垣石材を除去したのちに梯子状に組まれた土台木が検出されているが、この遺構図（報告書第 13-1 図）の原図には、枕木状の土台木 31 の中央部直下に少し横にはみ出る形で「鍬先」と

注記されたものが描かれていた（図 3）。この描写から第 212 図 3095 の鍬先は土台木が据えられる直前に置かれたものと推定できる。全長約 40cm、幅約 21cm の大鍬の鍬先で横断面形は V 字形を呈す。3095 の内側には鍬身 3096 が嵌め込まれており、平面台形の孔が穿たれている。孔に鍬柄が取り付いたものと思われるが、これを固定するための楔 3097 も出土している。この残存状態からみて、大鍬を使用後に柄のみ取り外したものと考えられる。

4.まとめ

以上の検討の結果、後期清須城本丸東面の石垣南半部を構築する際に、木製刀形と鍬先が意図的に埋納されたものと推測され、石垣が構築される前に祭祀が行われていた可能性が考えられた（図 4）。この祭祀行為は、状況からみて本丸普請の地鎮めが行われたものであろう。

最後に、このような重要な資料が報告書に掲載されなかつたこと、およびそれが約 20 年もの長期間にわたり資料紹介されなかつたことを、関係者の一人として深くお詫び申し上げる。この資料紹介が、城普請における祭祀行為の研究に寄与し進展することを願って止まない。

引用・参考文献

- 大平茂 2008 「第 4 章 祭祀考古学の体系」『祭祀考古学の研究』雄山閣
- 本間順治 1939 「日本刀」岩波新書
- 宮腰健司・鈴木正貴編 2002 「清洲城下町遺跡Ⅲ」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 99 集

紀年銘箱書と 阿蘭陀焼 資料紹介 01 ～松浦コレクションから～

武部真木・堀木真美子

「阿蘭陀焼」とは、長崎出島へオランダ船（連合オランダ東インド会社）が運んできたやきものをいう総称名詞である。日本で古美術品として扱われているプリントウェアは1800年～1860年頃の鎖国期に伝来したもので、出土資料には18世紀末～1870年頃に製作されたものが多い。これらは欧洲で普及品として量産された製品であったが、伝来した日本では茶器として高く評価されたりともあり、今日まで所蔵されてきた資料も数多く存在する。

紀年銘箱書をもつ資料（個人蔵）に接する機会に恵まれたことで、考古学資料との比較を目的とした資料調査・分析を行うことができた。今回の資料群にはイギリス（アダムス／W. ブラウンフィールド）とオランダ（ペトゥルス・レグター）の製作窯の製品が含まれ、箱単位で一見組物とみられる同一文様のプリントであっても、素地の形状や刻印などでは差異が抽出された。

1. はじめに

愛知県陶磁資料館にて2011年に開催された企画展『阿蘭陀焼 憧れのプリントウェア—海を渡ったヨーロッパ陶磁』では、「京阿蘭陀」とも呼ばれた京焼系の阿蘭陀写（おらんだうつし）、幕末に銅版転写による絵付を行った川名（かわな）焼（名古屋市）、里泉（りせん）焼（岐阜県瑞浪市）など色濃くその影響を受けた資料群と共に展示されていた。阿蘭陀焼とは「長崎出島へオランダ船（連合オランダ東インド会社）が運んできたやきもの」を指し、「狹義の生産地域を意味するものではなく」「広い意味で総称名詞的に用いられている」（仲野2011）とされる。

鎖国期の文政頃から明治5年頃にかけて、オランダ商館の商館員を通じてイギリス製、オランダ製、ベルギー製の陶磁器が日本国内に大量に輸入されたと推定され（岡1993）、遺跡調査においては出島遺跡、長崎市域をはじめ京都、大阪、江戸など都市部の武家屋敷や蔵屋敷、公家屋敷でみられるほか、オランダ商館長の江戸参府の際に設けられた阿蘭陀宿などに関連して伝えられている資料が知られている。

こうした陶磁器類は、例えば名古屋城や城下周辺のこれまでの調査では十分に検討されたとはいせず、その存在については不明瞭となっている。近年、城郭域も含む発掘調査が一部で継

続的に行われており、近代を含む出土遺物にも対応する環境が準備されつつある。

本稿では遺跡出土品との比較が可能となるよう基礎的な情報を整理することを目的とし、まずは紀年銘箱書をもつ資料を取り上げた。原則として箱単位での現時点のセット関係をそのまま提示し、加えて計測が可能な場合については釉薬等の蛍光X線分析を行い、箱単位の組合せを優先しつつ個体のデータの比較・検討を試みることにする。

2. 紀年銘箱書をもつ資料から

（1）資料01（図1）

収納木箱の寸法は高さ37cm、幅21cm、奥行21cmである。前面が嵌め込み式の蓋となつており、仕切板により皿10枚が収納可能である。箱書は、前面蓋に墨書きで「二十人前之内」「阿蘭陀色繪 手引皿 十人前」「東 竹川」とあり、箱の背面にも墨書きで「弘化四 丁未 三月於京都求之」とある。（弘化四年：1847年）

収納されているのは硬質陶器の手描色絵平皿8枚である。1は径（稜の位置）19.4cm、器高2.3cm、高台径は11.4cmである。2は径（稜の位置）19.4cm、器高2.3cm、高台径は12.0cmである。目跡は内面に3ヶ所、外側は高台の外側に3点1組のものが3ヶ所みられる。口縁端部には等間隔で稜があり（14稜）、内面

【資料 01】箱書紀年銘「弘化四」(1847 年)



正面蓋 箱書



背面

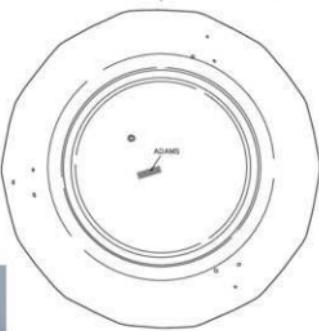
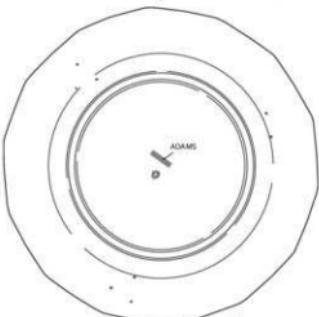
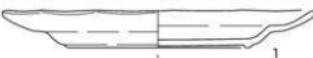


図 1 資料 01 弘化四 (1847) 年箱書と色絵平皿 (実測図縮尺 1/3)

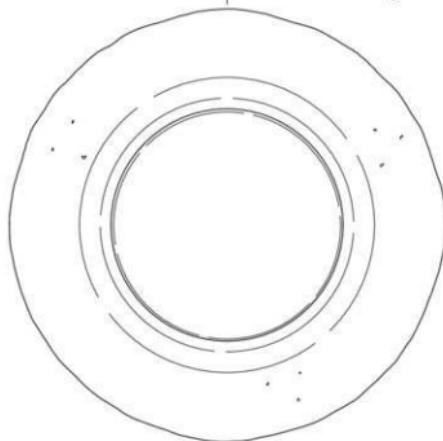
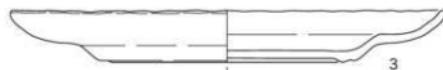
【資料 02】箱書紀年銘「嘉永元年」(1848 年)



正面蓋 箱書

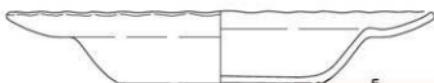


蓋背面



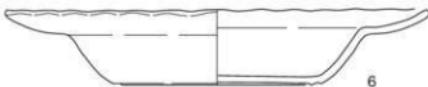
0 10cm

図2 資料 02 嘉永元(1848)年箱書とプリントウェア(その1)(実測図縮尺1/3)



0 10cm

5



6

図3 資料02 嘉永元（1848）年箱書とプリントウェア（その2）（実測図縮尺1/3）

【資料 03】箱書紀年銘「慶応元」(1865 年)



図4 資料 03 慶応元 (1865) 年箱書とプリントウェア (その 1) (実測図縮尺 1/3)

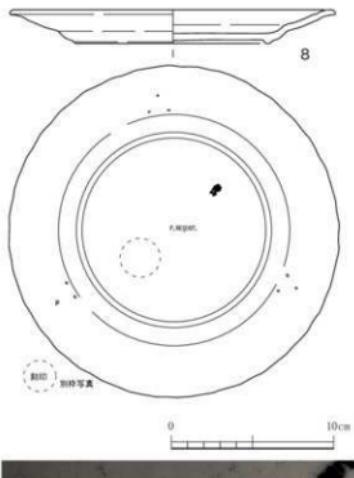


図5 資料03 慶応元(1865)年箱書と
プリントウェア(その2)(実測図縮尺1/3)

の透明釉の下に赤色で花弁、緑色で葉、濃紺色で蔓(枝)を描く。文様は口縁端部に赤色で囲線、周縁に4対の草花文、見込に若葉(?)を描く。外面は白色無文であり、高台内に「ADAMS」(英アダムス)の刻印マーク(Impressed mark)が押されている。

内面の文様および外面の印、白色無地部分の色調などは同一で違いが認められないが、高台径が異なり2グループに分けられる(11.4cm前後が3点、12.0cm前後が5点)。

参考例1「色絵花文皿」径24cm、高さ4.1cm。1847年以前、オランダペトウルス・レグラー窯。(弘化四年箱書『神戸市博物館蔵品目録 美術の部20 外国製陶磁器』) 参照例2伝世品に径26.6cmの皿があり、これと同一品が肥後細川藩家老で八代城主であった松井家所蔵品にみられるという。(永松,1993)

(2) 資料02(図2・3)

収納木箱の寸法は、高さ25cm、幅29.2cm、奥行30cmである。前面が引き上げ式の蓋となつており、蓋に墨書きで「蘭陀焼四対入 嘉永元年 甲 十月新調」とある。(嘉永元年:1848年) 収納されているのは藍絵プリントウェア平皿2枚(3・4)と深皿2枚(5・6)の計4点である。3の文様は藍絵西洋風景画で内面表面は広く剥離している。径26.8cm、器高3.2cm、高台径14.2cm。4は藍絵西洋風景画で径26.4cm、器高3.0cm、高台径14.4cm。5は藍絵西洋風景画で径26.2cm、器高4.6cm、高台径10.4cm。外表面は白色で高台外に転写マーク「IMPROVED STONWARE Screen Border WB Co. (英 W. ブラウンフィールド)」がある。6は藍絵西洋風景画、径26.0cm、器高4.7cm、高台径10.4cm。外表面は白色無地である。

平皿2枚の文様パターンは同文である。4点の資料全て目跡は内面に3ヶ所、外面は高台外側に3点1組のものが3ヶ所に認められ、口縁端部は平縁ではなく大小交互の凹みからなる輪花状となっている。

5に関する参考例赤絵西洋風景画(パターン名:スクリーンボーダー)径26.3cm、器高4.8cm、高台径11.5cm、同様の外面転写マークあり。19世紀後半とされる。(愛知県陶磁資料館,2011,出品目録No.64)

(3) 資料03(図4・5)

収納木箱の寸法は、高さ16cm、幅22.3cm、奥行44cmである。上面が蓋、内側中央の仕切りで空間が二等分されている。蓋の墨書は長辺向き縦書きで、「おらんだ舶来 中村又左衛門 燃物皿式拾人前 慶応元年七月改」、短辺側面には「□木村 大皿式拾入 羽根」とある。(慶応元年:1865年)

収納されている資料は、藍絵プリントウェア平皿15枚である。文様は背中に瘤のある人物を含む挿絵ふうの風俗画であり、画面の上・下部にそれぞれ2行のオランダ語テキストが挿入されている。繊細な表現は少なくオランダ人向け製品とすれば、銅版転写の原版の段階からオランダで製作されたものであろうか。

7は径20.2cm、器高2.2cm、高台径11.6cm、8は径20.2cm、器高2.0cm、高台径12.0cmである。目跡は、内面に3ヶ所、外面は高台外側に3点1組のものが3ヶ所認められる。ただし15枚のうち図化資料7のみ、外面に確認できなかった。窓詰の際の最上段に置かれた個体と推定される。内面の周縁部分は白地であり、10弁の花文の浮彫りが周囲をめぐる。外側から大・中・小の3種類のサイズの花文リーフが取り巻く構成となっている。

皿内面にプリントされた文様パターンは全て同じで1種類あるが、外面高台内に押された刻印マークの形状には2種類がある(内訳は7のタイプが9点、8のタイプが6点)。7では(モチーフ不明の)ある形状の枠の下方に「P.REGOUT」、その下に接する長方形枠の中に「MAASTRICHT」、その下にアラビア数字「6」の文字陰刻が入る。8では本葉形の枠内中央にアラビア数字「22」、その上部に「・PETRUS REGOUT・」、下部に「MAASTRICHT」の文字陰刻が入る^{*}。

7と8では器高や高台径など形状にも違いがあり、白色無地部分は7の方が(釉溜りも含めて)やや青みが強く、比べて8はそれより黄色みを帯びた色調である。皿の周縁端部の調整にも粗雑の違いが認められ、8の方が滑らかに仕上げ

られている。以上により両者の素地は同時に製作されたものでない可能性が高いと考えられる。(武部)

3. 純薬の蛍光X線分析

(1) 分析方法と装置

測定は、それぞれの資料で色調の異なる部分を、それぞれ3ポイントづつにX線を照射する方法で行った。資料の表面について、削るなどの表面調整は行っていない。測定機器は(株)堀場製作所製 XGT-5000。測定条件はX線管電圧30kV、測定時間500秒、照射径100μm、雰囲気は大気である。

(2) 分析結果

測定結果を表1に示す。測定の結果、Al(アルミニウム)、Si(ケイ素)、P(リン)、K(カリウム)、Ca(カルシウム)、Ti(チタン)、Cr(クロム)、Mn(マンガン)、Fe(鉄)、Ni(ニッケル)、Zn(亜鉛)、Co(コバルト)、Cu(銅)、As(ヒ素)、Pb(鉛)の15元素が確認された。以下、各資料毎の特徴を述べる。

資料O1 (1)(分析番号212-5)

1は、赤色、緑色、黒色で草花文が描かれているものである。これらのうち、赤色3ポイント、緑色2ポイント、白色(透明部分)3ポイントの合計8ポイントにおいて測定を実施。すべての個所で確認された元素は、Al、Si、K、Ca、Fe、Cu、Pbの7元素であった。白色部分で3ポイントすべてにおいてMnとTiが確認された。赤色部分でCoの小さなピークを確認した。

資料O1 (2)(分析番号212-1)

1と同様の図柄を持つ資料である。すべての個所で確認された元素は、Al、Si、K、Ca、Fe、Cu、Pbの7元素。白色部分3か所でTiとMnが、緑色部分2か所でCrとZnが、赤色部分3か所でCrがそれぞれ確認された。

資料O2 (3)(分析番号107b)

青色の絵柄がプリントされた資料である。すべてのポイントで確認された元素は、Al、Si、K、Ca、Fe、Cu、Pbの7元素。白色部分3か所の

*これとやや異なる枠形状の刻印がよく知られている。「P.REGOUT MAASTRICHT」の文字を長円の中におさめたものは、1850年代から1880年代までまん中に数字を入れて使われており、数字でなく文字がはいっているものも1870年代に使われた。〔岡、1993〕

表1 各資料で認められた元素

資料番号	図番号	分析番号	色調	確認された元素									
資料01	1	212-5W	白	Al	Si	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Cu	Pb	
		212-5G	緑	Al	Si	K	Ca		Fe		Cu	Pb	
		212-5R	赤	Al	Si	K	Ca		Fe	(Co)	Cu	Pb	
資料02	2	212-1W	白	Al	Si	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Cu	Pb	
		212-1G	緑	Al	Si	K	Ca	Cr	Fe		Cu	Zn Pb	
		212-1R	赤	Al	Si	K	Ca	Cr	Fe		Cu	Pb	
資料03	3	107b-W	白	Al	Si	(P)	K	Ca		Fe	(Co)	Cu	Pb
		107b-B	青	Al	Si	K	Ca	Ti	Fe	Ni	Co	Cu	As Pb
	4	107a-W	白	Al	Si	P	K	Ca	Ti	Fe		Cu	Pb
	5	107a-B	青	Al	Si	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Ni	Co	Cu As Pb
		107c-W	白	Al	Si	K	Ca	(Ti)	(Mn)	Fe		Cu	Pb
	6	107c-B	青	Al	Si	K	Ca	(Ti)	Mn	Fe	Co	Cu	Pb
		107d-W	白	Al	Si	K	Ca	Ti	Fe		Cu	Pb	
	7	107d-B	青	Al	Si	K	Ca	(Ti)	Fe	Co	Cu	Pb	
		179B2-W	白	Al	Si	K	Ca	Ti	Fe	Co	Cu	Pb	
	8	179B2-B	青	Al	Si	K	Ca	Ti	Fe	Ni	Co	Cu	Pb
		179B1-W	白	Al	Si	K	Ca	Ti	Fe	Co	Cu	Pb	
	9	179B1-B	青	Al	Si	K	Ca	Ti	Fe	Ni	Co	Cu	Pb
		179A2-W	白	Al	Si	(P)	K	Ca	Ti	Fe		Cu	Pb
	10	179A2-B	青	Al	Si	K	Ca	Ti	Fe	Ni	Co	Cu	Pb
		179A1-W	白	Al	Si	K	Ca	Ti	Fe		Cu	Pb	
		179A1-B	青	Al	Si	K	Ca	Ti	Fe	Ni	Co	Cu	Pb

*各色調の個所を3か所づつ測定。

*()は、3か所の測定点で、確認されない箇所があったことを示す。

うち1か所からPとCoが確認された。青色部分3か所でNiとAsが確認された。

資料O2 (4) (分析番号 107a)

青色の絵柄がプリントされた資料である。白色部分3か所と青色部分3か所の測定を行い、すべての個所で、Al、Si、K、Ca、Ti、Fe、Cu、Pbの8元素を確認した。白色部分ではPが、青色部分ではMn、Ni、Co、Asが確認された。

資料O2 (5) (分析番号 107c)

青色の絵柄が描かれている資料である。白色部分3か所と青色部分3か所のすべての個所で確認された元素は、Al、Si、K、Ca、Fe、Cu、Pbの7元素である。白色部分でTiとMnが確認されるポイントがあった。また青色部分では、すべてのポイントでMnとCoが、一つのポイントでTiが確認された。

資料O2 (6) (分析番号 107d)

青色の絵柄がプリントされた資料である。白色部分3か所と青色部分3か所の測定を実施。すべての測定点で確認された元素は、Al、Si、K、

Ca、Fe、Cu、Pbの7元素。白色部分ではTiがすべてのポイントで確認されたが、青色部分では1ポイントのみであった。また青色部分ではCoが確認されている。

資料O3 (7)、および同タイプ (分析番号 179B2・179B1)

青色の絵柄がプリントされた資料である。同じ刻印をもつ皿から2枚を抽出し測定を行った。それぞれの測定個所は、外側底面の中央付近で、白色部分3か所と青色部分3か所である。すべての個所で確認された元素は、Al、Si、K、Ca、Ti、Fe、Co、Cu、Pbの9元素。青色部分ではNiがすべてのポイントで確認された。

資料O3 (8)、および同タイプ (分析番号 179A2・179A1)

青色の絵柄がプリントされた資料である。7と同様に2枚を抽出して測定した。測定個所は、皿の外部の底面。それぞれ白色部分3か所、青色部分3か所を測定した。すべての個所で確認されたのは、Al、Si、K、Ca、Ti、Fe、Cu、Pb

表2 FP法による成分比

白色部分

番号	分類番号	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO/FeO	CoO	CuO	PbO	Total
3	107b-81	11	65	2	6	0	0	1	2	0	13
	107b-82	11	65	2	6	0	0	2	0	2	100
	107b-83	11	63	2	7	0	0	0	2	0	15
4	107e-81	11	64	2	6	0	0	0	2	0	14
	107e-82	11	65	2	6	0	0	0	2	0	14
	107e-83	11	63	2	7	0	0	1	1	0	15
5	107e-81	10	69	2	10	0	0	0	2	0	8
	107e-82	10	73	2	7	0	0	0	2	0	6
	107e-83	9	75	2	6	0	0	0	2	0	6
6	107e-81	8	75	2	5	0	0	0	1	0	9
	107e-82	8	73	2	5	0	0	0	1	0	9
	107e-83	10	69	2	9	0	0	0	2	0	9
7	17982-81	12	71	2	5	0	0	0	2	0	8
	17982-82	12	69	2	5	0	0	0	3	0	9
	17982-83	11	70	2	5	0	0	0	2	0	9
8	17981-81	11	70	2	5	0	0	0	3	0	8
	17981-82	9	71	2	6	0	0	0	3	0	8
	17981-83	11	72	2	5	0	0	0	3	0	102
9	17982-81	12	68	2	5	0	0	0	4	0	9
	17982-82	11	67	2	6	0	0	0	3	0	10
	17982-83	11	70	2	5	0	0	0	2	0	9
10	17981-81	12	72	2	5	0	0	0	2	0	7
	17981-82	11	71	2	6	0	0	0	3	0	7
	17981-83	11	75	3	4	0	0	0	1	0	8

白色部分

番号	分類番号	Al ₂ O ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO/FeO	CoO	CuO	PbO	Total
1	212-591	12	74	2	8	0	0	0	0	3
	212-592	9	77	2	7	0	0	0	0	4
	212-593	9	73	2	7	0	0	0	0	9
2	212-191	10	74	2	7	0	0	0	0	8
	212-192	10	74	2	7	0	0	0	0	7
	212-193	9	73	2	7	0	0	0	0	9
3	107b-91	8	71	2	4	0	0	0	0	14
	107b-92	9	71	3	3	0	0	0	0	14
	107b-93	8	66	3	7	0	0	0	0	15
4	107e-91	11	67	2	6	0	0	0	0	14
	107e-92	10	67	2	5	0	0	0	0	15
	107e-93	12	68	2	6	0	0	0	0	11
5	107e-91	12	76	2	6	0	0	0	0	3
	107e-92	11	79	2	5	0	0	0	0	2
	107e-93	9	76	2	7	0	0	0	0	7
6	107e-91	11	71	2	8	0	0	0	0	8
	107e-92	11	74	2	7	0	0	0	0	7
	107e-93	10	76	2	6	0	0	0	0	7
7	17982-91	11	77	3	4	0	0	0	0	5
	17982-92	11	76	3	4	0	0	0	0	6
	17982-93	11	76	3	4	0	0	0	0	8
8	17981-91	10	77	3	4	0	0	0	0	5
	17981-92	10	78	3	4	0	0	0	0	5
	17981-93	11	77	3	4	0	0	0	0	5
9	17983-91	12	75	3	4	0	0	0	0	9
	17983-92	11	77	3	4	0	0	0	0	5
	17983-93	11	77	3	4	0	0	0	0	5
10	17981-91	11	77	3	4	0	0	0	0	5
	17981-92	11	77	3	4	0	0	0	0	5
	17981-93	11	77	3	4	0	0	0	0	5

の8元素。白色部分ではPが1ポイントで確認されたが、青色部分ではNiとCoがすべてのポイントで確認された。

(3) 青色染料の種類について

今回分析をおこなった資料10点のうち、青色部分からNi(ニッケル)が確認されたものは6点、As(ヒ素)が確認されたがものが2点であった。当時のコバルト顔料がどこから調達されたものなのか、今回の分析結果から追求することはできない。しかし、NiとAsが含まれているものが確認できたことから、今後追及すること

ができるかもしれない。

コバルトの利用について、大規模に利用し始めたのは古代エジプトとされ、その原材料はエジプト国内で産する「コバルトミョウバン」であったとされる。また、その後の時代に製造されたガラス製品などに含まれるコバルトについては、古代から近世に至るまで、その供給地は特定されていない。その中で中世以降の主なコバルト原料とその産地は、イラン産のコバルト華(Asを含む鉱物)、インド産の輝コバルト鉱(Asを含む)、ドイツ産の輝コバルト鉱(銀や錫とともに産する)等が示されているが、ガラス製品の再利用等の問題があり、コバルトの供給経路は解明されていない(阿部2017)。

(4) 鉛の含有率について

今回分析をおこなった資料のスペクトルをもとに、ほぼすべての資料で共通する10元素(Al,Si,K,Ca,Ti,Mn,Fe,Cu,Pb)に限定し、FP法(ファンダメンタルパラメータ法という機械的な計算方法)によって酸化物としての比率を算出した(表2)。これらの値は、FP法によるもので、決して真の組成値を示すものではない。しかし今回は同一条件下での比較を目的に数値化を行った。その結果、PbOの比率に大きな違いが現われた。資料02(3・4)においてPbOが14%程度の値を示している。他の資料がほぼ10%未満であることと比較して有意な差があるものと考える。あわせてこれらの資料ではAs(ヒ素)が確認されるという特徴も確認できた。この様な違いの原因について、筆者らは言及する材料を持ち合わせていない。素材の違いか、作業場の差によるものか、製作時期の違いによるものなのか、分析事例をふやす事で追及できれば幸いである。(堀木)

4.まとめにかえて

ここで紀年銘箱書をもつ資料として取り上げた陶器皿は、ある段階にこの形に組物とされた資料群であり、箱書との関係からすぐさま製作年代を結びつけて考えられるという説ではない。ただ少なくとも個々の器は、鎌国期の日本では茶器として高く評価され好まれた西洋の文物であり、紀年銘を付して「阿蘭陀」「おらんだ舶来」

「蘭陀焼」は大切に所蔵され今日に至っている。「うつわに加飾された（西洋の）絵画」と当時の画家に認識され、「プリントウェア流入の衝撃と愛好熱をうかがい知る証拠」（岡,2011）と評価される歴史資料であり、遺跡での出土情報は地點の性格や流通の実態を探る重要な手掛かりとなっている。

さて、今回箱单位での観察・分析により、一見揃いのセットのように思われた資料は、規格と文様が同様か、あるいは似通ったもので構成されている場合があることが明らかとなった。素地の検討と釉薬の分析においても、製作地あるいは製作時期が異なる可能性が指摘できそうである。天保期以降に増加の傾向がうかがわれるという箱書の年代にも留意しつつ、継続して資料の提示・情報の蓄積を進めていきたい。

(武部・堀木)

謝辞

本稿をまとめるにあたり、次の方々のご助言、ご協力をいただきました。記して御礼申し上げます。

小澤一弘 松浦繁蔵 松浦節子 金子知久
藤山誠一



50

引用・参考文献

- 水松 実 1993「発掘された食文化の洋風化について」『長崎出島の食文化』親和文庫第17号 親和銀行
- 岡 泰正 1993「オランダ・マーストリヒトにおけるレグゥート窯について—江戸時代後期のオランダ陶器受容に関する基礎資料—」『長崎出島の食文化』親和文庫第17号 親和銀行
- 岡 泰正 2001「第2節 出島・護岸石垣出土のヨーロッパ製陶器について」『国指定史跡 出島和蘭商館跡—護岸石垣復元事業に伴う発掘調査及び工事報告書—』長崎市教育委員会
- 神戸市博物館 2004『神戸市博物館蔵品目録 美術の部20 外国製陶磁器』
- 岡 泰正 2010「第6章第2節 出島南側護岸石垣前面出土の西洋陶器について」『国指定史跡 出島和蘭商館跡—南側護岸石垣発掘調査・修復復元工事報告書—』長崎市教育委員会
- 岡 泰正 2011「プリントウェアの復能をめざして—日本におけるヨーロッパ転写陶器受容の意義—」「阿蘭陀焼 憐れのプリントウェア—海を渡ったヨーロッパ陶磁』
- 仲野泰裕 2011「阿蘭陀焼と日本陶磁 陶磁の東西交流」「阿蘭陀焼 憐れのプリントウェア—海を渡ったヨーロッパ陶磁』
- 愛知県陶磁資料館
- 長久智子 2011「藍絵阿蘭陀焼」「阿蘭陀焼 憐れのプリントウェア—海を渡ったヨーロッパ陶磁』愛知県陶磁資料館
- 阿部善也 2017「古代オリエント世界におけるコバルトの利用」「特別企画展染付・青繪の世界』愛知県陶磁美術館

岡崎市西牧野遺跡における 旧石器時代の一考察

社本有弥

岡崎市に所在する西牧野遺跡は県下で有数の旧石器時代の包含層を持つ遺跡である。当センターと愛知県埋蔵文化財調査センターのそれぞれが調査を行い、旧石器時代遺物の出土を多数確認している。しかしながら、この遺跡についての研究は少なく、未だ愛知県内での位置付けもはっきりしていない状態である。そこで、西牧野遺跡の旧石器時代の様相を解き明かすために遺物の分布から時期の検討を行うものである。

1. はじめに

西牧野遺跡は岡崎市に所在する遺跡で、平成21年度に当センターが、平成22年度に愛知県埋蔵文化財調査センターが調査を行なっている。確認された遺構・遺物の時代は旧石器時代から近世までと幅広く、長期間にわたって断続的に人が住んでいたと考えられる。

2. 研究史概観

西牧野遺跡における旧石器時代の研究には、白石浩之氏の研究がある(白石2017)。白石浩之氏は、遺物の分布をブロックとして区分し、石器組成や形態、石材といった観点から相違的な区分が可能であるか検討を行なった。石器集中地點である09Cb区と隣接する09Cc区では計5つのブロックに分けられること、時期は上層と下層で分けられることが指摘されている。そして、西牧野遺跡の編年的位置付けについて上層の石器群は岩宿II並行期、下層の石器群を岩宿IIより古手で、始良Tn火山灰降灰以前の可能性があるとしている。

今回は西牧野遺跡でも愛知県埋蔵文化財センター調査の旧石器時代史料について検討を行う。石器群の時期は分けることが可能であるか、またその時期について検討するものである。

3. 石器群について

旧石器時代の遺物は、09Cb区と09Cc区に

集中して出土している(図1)。特に09Cb区は調査区全体に広がっており、いくつかの集中地點も確認できる(図2)。遺物に目を向けると、ナイフ形石器、角錐状石器、尖頭器といった狩猟道具に伴って削器や搔器、石錐などが出土している。ナイフ形石器が主体として出土しており、いわゆるナイフ形石器文化期に比定される。

使用された石材は主に凝灰岩と黒曜石で、チャートが伴っている。黒曜石は産地分析が行われており、全てが和田岬系の黒曜石である。

4. 石器の分布

09Cb区の石器の分布についてみていく。垂直分布を見ると、上下にそれぞれにまとまりがみられる(図3)。また土層断面に合わせて見ると、図3-1の4層、図3-4の3層では遺物の出土が薄く、間に一層挟んで上下で石器群が別れるものと考えられる。以降、上部の石器群を上層石器群、下部の石器群を下層石器群とする。

統いて平面分布を見てみると、上層石器群は09Cb区の南東よりに分布しているのに対し、下層石器群は北西よりに分布している。

5. 石器群について

ここからは上下の石器群がどのような様相を呈しているのかについて見ていく。

上層石器群の石器組成は、ナイフ形石器・角錐状石器・石錐・削器・搔器である(図4)。ナイフ形石器に注目すると、柳葉形のナイフ形石器と切出形のナイフ形石器で構成されている(1)

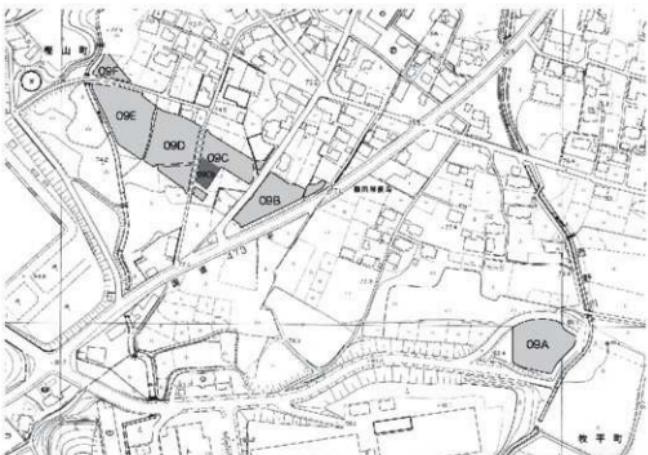


図1 西牧野遺跡周辺と埋蔵文化財センターの調査区

52

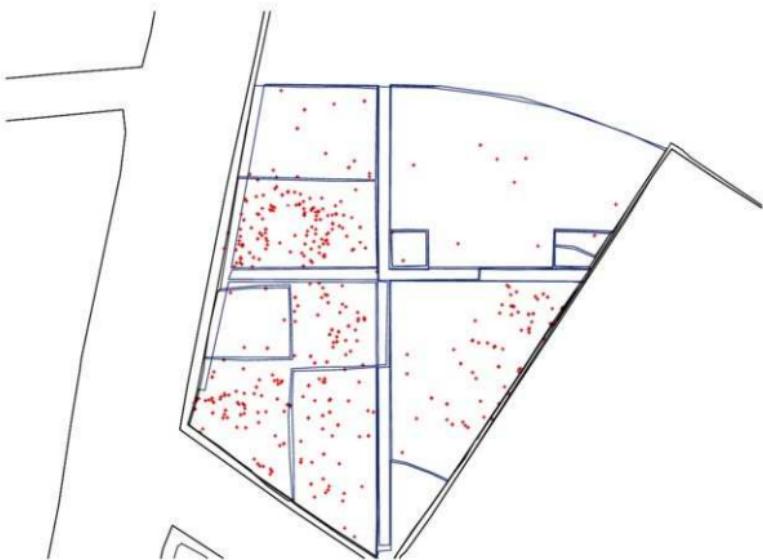


図2 O9Cb 区、遺物の平面分布

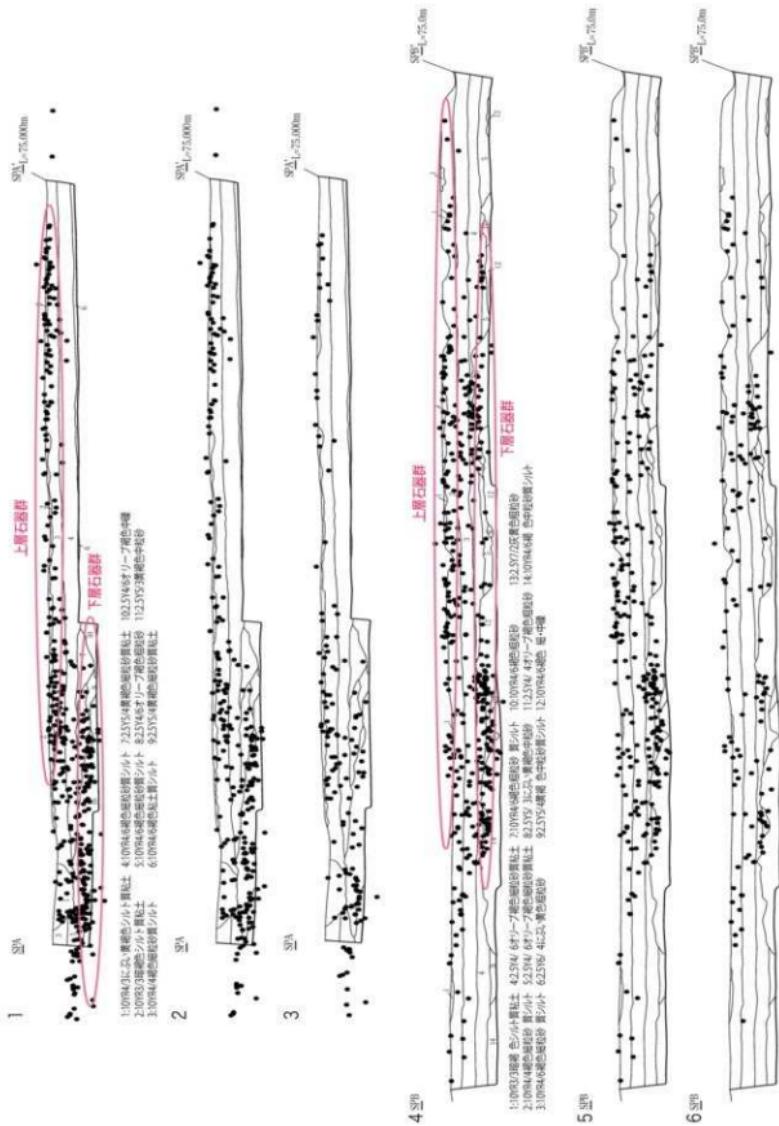


図3 Cb区、遺物の垂直分布

～4)。素材となる縦長剥片を切断・加工しているものと、末端部の縁辺を残して加工をするものがある。素材剥片の利用については形態によって変わるものではない。削器は不定形、搔器は円形(9)とやや拇指状を呈するもの(10)となっている。削器は寸詰まりの縦長剥片を素材としており、搔器は加工は著しいため素材剥片の形態は不明であるが、比較的厚みのある剥片を使用していると考えられる。角錐状石器の素材剥片は恐らく横長剥片が使われている。石核・剥片を見てみると、ナイフ形石器の素材となっている縦長剥片を剥離している石核が古め、角錐状石器の素材となっている横長剥片を剥離したと思われる石核は少ない。打面を作出し、連続して縦長剥片を作出するような石核もいくつか見られるが、主体はさまざまな方向から剥片剥離を行なっている石核と言える。出土している剥片も縦長剥片や寸詰まりの剥片は多く、横長剥片は見られない。

統いて下層石器群の石器組成はナイフ形石器、削器、搔器となっている(図5)。ナイフ形石器は二側縁加工や一側縁加工のナイフ形石器が主体であるが、上層石器群に見られた柳葉形や切出形と言うような定形的なナイフ形石器は見られない。素材剥片は縦長剥片が主体と考えられるが、横長剥片を使っているものがある(8)。また、7・8のように先端部に刃部を残し、大部分に加工をしているものも見られる。削器、搔器についても定型的なものではなく、不定形である。石核・剥片を見ると、石核は一方向から連続して縦長剥片を作出していたと考えられるものが主体で、剥片も縦長剥片や寸詰まりの剥片が主体で、幅広の不定形な剥片はあるが、8の素材になりそうな横長剥片は見られない。

6. 石材について

ここで少し石材について見ていく。西牧野遺跡における石器石材の主体は凝灰岩と黒曜石であり、一部チャートが入り込む形となっている。凝灰岩・チャートはいわゆる在地系の石材で、黒曜石は遠隔地石材である。西牧野遺跡で出土した黒曜石については分析されており、和田峰系(星ヶ塔・男女倉)であると結論付けられて

いる(酒井2013)。

7. 石器群の時期

上下の石器群の特徴を改めて挙げ、その時期について検討する。

まず上層石器群であるが、ナイフ形石器・角錐状石器・石錐・削器・搔器を有している。ナイフ形石器の形態は柳葉形と切出形である。削器は不定形であるが、搔器は円形や拇指状を呈している。角錐状石器や切出形のナイフ形石器が見られるため、いわゆる岩宿II文化期に並行すると考えられる。統いて下層石器群であるが、ナイフ形石器・削器・搔器を有している。定型的な石器はなく、一部横長剥片を素材としたと思われる石器が見られる。切出形のナイフ形石器を伴わないことから岩宿II文化期より古い段階であろう。

8. おわりに

以上、西牧野遺跡における旧石器時代の出土遺物について検討を行なった。上層の石器群は切出形ナイフや角錐状石器を伴う文化で岩宿II並行、下層石器群は特徴的な形態を持たない文化と言え、AT降灰直後またはAT降灰前の可能性がある。上層と下層の間に1層挟まっているように見えるのでAT降灰以前と言うことは十分に有り得ることである(白石2017)。今回の検討は報告書上の範囲に留まっているため、未報告の資料を加えた検討は次回の課題とした。また、愛知県埋蔵文化財調査センターが調査を行なった調査区でも旧石器時代の遺物がまとまって見つかっており、こちらについても今後検討を行いたい。

謝辞

本論をまとめるにあたり愛知県埋蔵文化財センターの藤山誠一氏にお世話をになった。

引用・参考文献

愛知県史編さん委員会 2002 「愛知県史 資料編I 考古I 旧石器・縄文」

酒井俊彦 2013 「西牧野遺跡」 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第174集

白石浩之 2017 「愛知県岡崎市西牧野遺跡の遺物分布から

見たナイフ形石器文化の様相」『東海石器研究 第7号』

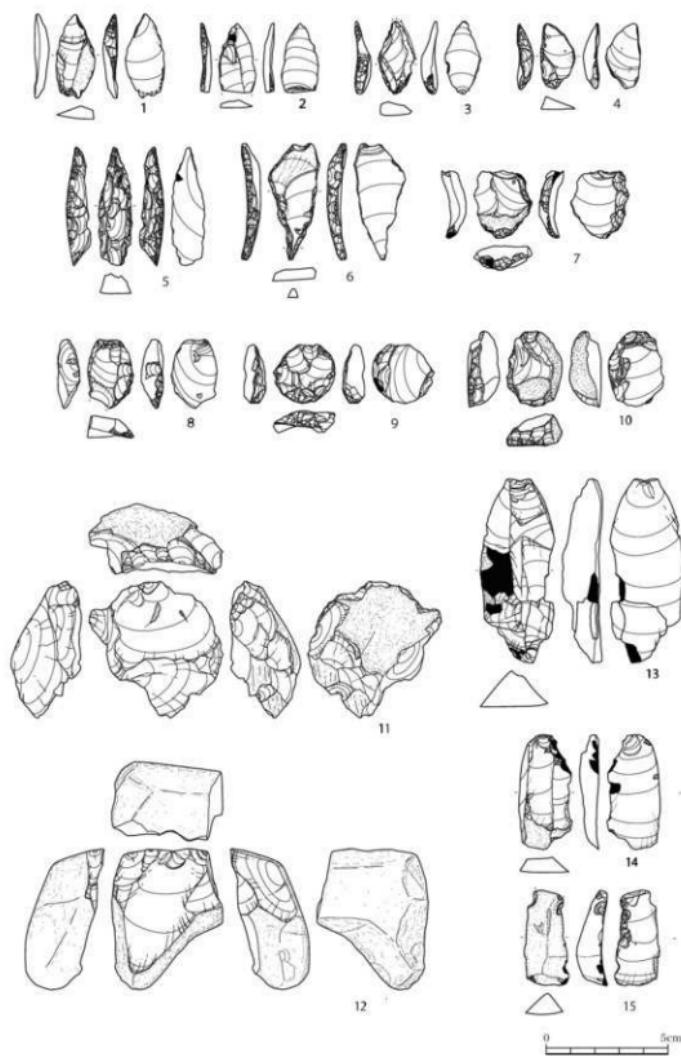


図4 上層石器群 (1/2)



图5 下层石器群 (1/2)

設楽町の縄文時代 竪穴建物跡の比較・分析

渡邊 岐

設楽ダム関連事業によって新たに発掘された縄文時代竪穴建物跡について時期ごとの棟数、形、面積、付属施設、儀礼等のデータをまとめ、その変遷を分析した。

1.はじめに

愛知県埋蔵文化財センターでは、2014年から継続的に設楽ダム建設事業に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所から愛知県教育委員会を通じた委託を受けて設楽町の遺跡を発掘し、多くの成果をあげてきた。本論ではその成果のうち、縄文時代の竪穴建物跡に焦点を当てて、取り上げてみたい。

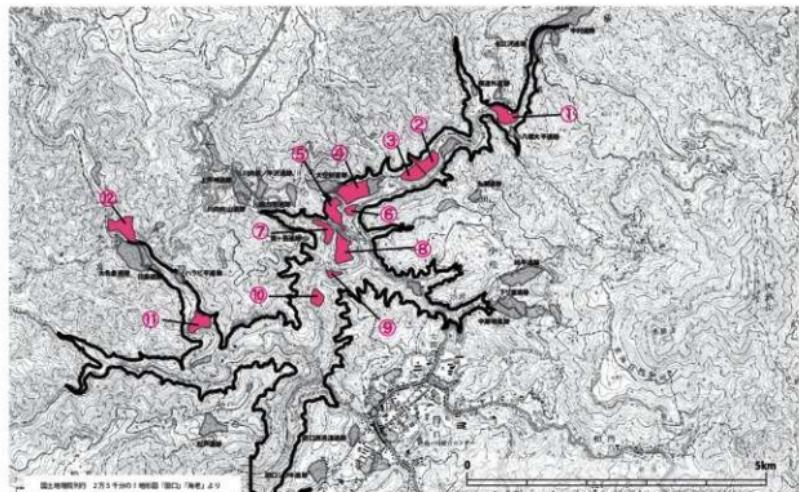
設楽町域の発掘調査事例として、1954年北設楽郡旧津具村（現設楽町）の鞍船遺跡において縄文時代前期の竪穴建物跡が6基の調査事例

がある。設楽町内での縄文時代集落の実態はあまり把握されていなかった。

しかし設楽ダム建設に伴う当センターによる発掘調査が行われた結果、設楽町内で数多くの縄文時代の竪穴建物跡が発見された。本論ではこれらのデータをまとめ、設楽町域における縄文時代竪穴建物跡の移り変わりをみていくたい。

2.対象の遺跡

対象とする縄文時代の竪穴建物跡が出土している遺跡はこれまでの調査で12遺跡存在し、図1のように①～⑫の遺跡は境川沿岸に、⑬、



①澣瀬遺跡 ②下坂遺跡 ③石原遺跡 ④上ヲロウ・下ヲロウ遺跡 ⑤万瀬遺跡 ⑥笛平遺跡 ⑦大栗遺跡 ⑧大畑遺跡
⑨川向東貝津遺跡 ⑩大崎遺跡 ⑪胡桃庵遺跡 ⑫西地・東地遺跡

図1 縄文時代竪穴建物跡を有する設楽町ダム関連埋蔵文化財遺跡と周辺遺跡の位置図

⑫の遺跡は豊川沿岸に分布している。これらの遺跡のうち、ここでは主要な遺跡について簡潔に述べる。

①の滝瀬遺跡は境川右岸の河岸段丘上から山麓の丘陵斜面に立地する。2015年から3回発掘調査を行い、2022年現在も継続して行なっている。全12遺跡の内一番北にあり、標高も437mと最も高い位置にある。滝瀬遺跡の大きな特徴として、縄文時代早期前葉以前、9,000年前を遡る良好な堅穴建物跡が11棟見つかっている。これらは現状愛知県内における最も古い集落の調査事例となり、初期の定住集落を考察する上でも貴重な遺跡と言える。

③の石原遺跡は境川右岸のやや開けた谷地形に立地する。2018年から2回発掘調査を行い、調査は終了している。遺跡からは縄文時代晚期後葉の配石墓等が出土している他、設楽町内の縄文時代堅穴建物としては最大の面積を有し、現在2例しか確認されていない縄文時代中期前葉の堅穴建物跡325SIがある。

⑥の笹平遺跡は境川の左岸、川に対して西に張り出す段丘上に立地し、遺跡の上流に石原遺跡、下流に万瀬遺跡、境川を挟んで対岸に上ヲロウ・下ヲロウ遺跡がある。2015年の発掘調査により調査は全て終わっており、2022年には愛知県埋蔵文化財センターより報告書も刊行されている。笹平遺跡の特徴としては縄文時代中期末から後期中葉の時期の掘立柱建物跡が2棟確認された他、縄文時代後期の堅穴建物跡が21棟集中して出土したことが挙げられる。この数は設楽町内の縄文時代堅穴建物跡としては2022年現在で全体の5分の1、縄文時代後期では全体の半分以上の数である。

⑩の大崎遺跡は境川の東岸、河岸段丘状の緩斜面上に立地している。当地は現在の田口集落西にある丘陵尾根が境川に向かって伸びる末端付近に当たり、遺跡の北と東には丘陵尾根が迫っている。遺跡の特徴としては中世の大規模な水田関連遺構が検出された他、縄文時代中期から弥生時代中期に至るまでの堅穴建物跡も19棟検出している。縄文時代後期中葉から晩期の堅穴建物跡は、設楽町内ではこの大崎遺跡が唯一である。

3. 堅穴建物跡の検討

今までの設楽ダム関連事業に伴って調査された全遺跡の内、縄文時代の堅穴建物跡が確認された全12遺跡の時期別の各遺跡の堅穴建物跡の棟数と形式・構成要素をまとめたものが表1である。これをもとに設楽町における縄文時代堅穴建物跡の変遷を見していくと、万瀬遺跡や滝瀬遺跡において縄文早期前葉の集落を築いた後(図2①-③)、縄文時代前期後半に胡桃崖遺跡にある一例と、旧津具村の鞍船遺跡では縄文前期後葉の堅穴建物跡が6棟検出されている(川添2020)。続く縄文時代中期前葉における石原遺跡での堅穴建物跡の例の後(図2⑤・⑥)、縄文時代中期中葉以後の上ヲロウ・下ヲロウ遺跡や大畑遺跡においても縄文時代中期後半から大幅に堅穴建物群の確認事例が増える(図2⑧・⑨)。この堅穴建物跡が増加する傾向は縄文時代後期初頭から前葉にかけての笹平遺跡でも見られ、縄文時代後期中葉から晩期にかけての大崎遺跡では減少する(図3)。弥生時代の堅穴建物跡は上ヲロウ・下ヲロウ遺跡と大崎遺跡で確認されている。

堅穴建物跡の面積に注目すると、石原遺跡の縄文時代中期前葉の堅穴建物跡(図2⑤)が最大で、遺跡毎の平均の面積は縄文時代中期中葉から縄文時代後期前葉に至るまで徐々に大きくなっているのがわかる(図4)。

一方住居を構成する施設に注目すると、縄文時代中期後半では多く見られた4本柱の主柱穴と壁柱穴の組み合わせが、縄文時代後期以降では激変し、ほとんどが壁柱穴主体の構成となる(図5)。これらの堅穴建物跡の特徴は長野県や関東地方の堅穴建物跡の施設の変遷と類似している(宮本1996)。平面形では隅丸方形の堅穴建物跡と円形の堅穴建物跡は縄文時代中期後葉から縄文時代後期前葉まではほぼ半々の割合だったが、縄文時代後期中葉の大崎遺跡では隅丸方形の堅穴建物跡が主流になっている(表1)。

表2では各遺構の炉跡に注目し、時期別の堅穴建物跡に伴う炉の形態と規模をまとめた。その結果、炉跡に問しても縄文時代中期後葉から縄文時代後期前葉にかけて、いくらかの変化が

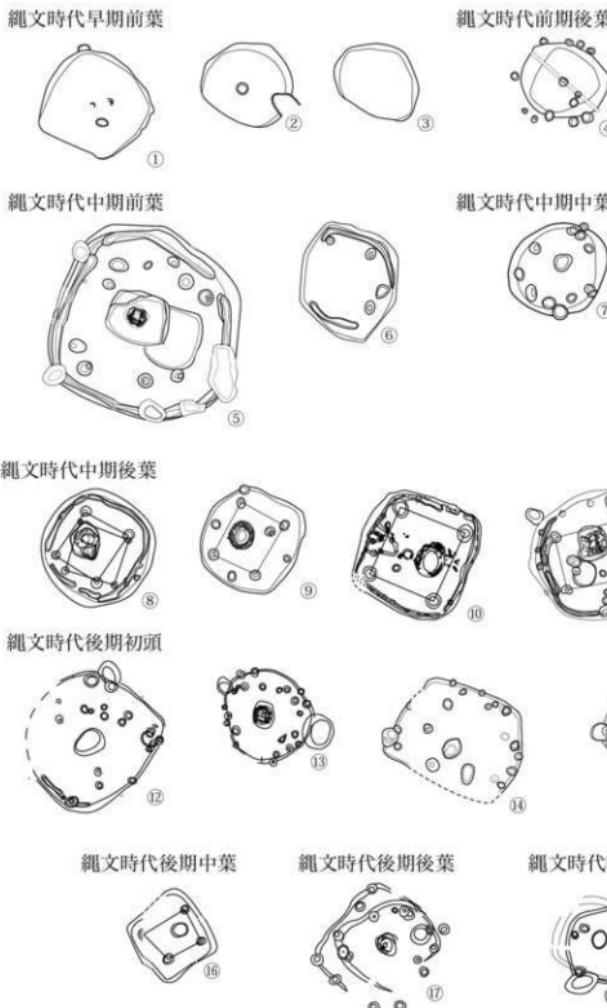


図2 設楽町ダム関連遺跡の縄文時代竪穴建物跡 (1/200)

- ①, ②, ③, ⑭: 滝瀬遺跡 ④: 胡桃窓遺跡 ⑤, ⑥: 石原遺跡 ⑦: 上ヲロウ・下ヲロウ遺跡 ⑧, ⑨: 大畑遺跡
 ⑩, ⑫, ⑬: 笹平遺跡 ⑪: 川向東貝津遺跡 ⑯: 西地・東地遺跡 ⑯, ⑰, ⑱: 大崎遺跡

表1 時期別の各遺跡の竪穴建物跡の形式と構成要素

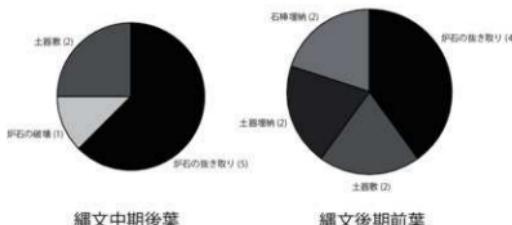
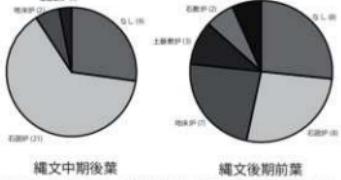
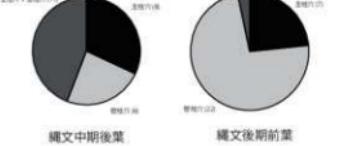
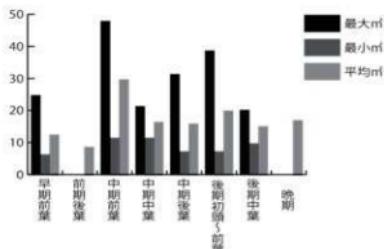
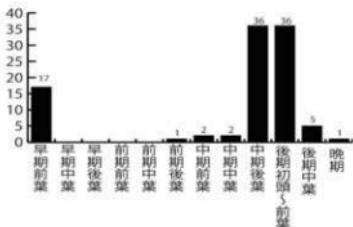
時代	遺跡名	棟数	平面形式			面積			主柱	壁柱	主+壁溝	
			(楕)円形	方形	隅丸(長)	多角	最大m	最小m	平均m			
早期前葉	万瀬遺跡	6				6	26.4	6.15	12.47	0棟	5棟	0棟 0棟
	漁港遺跡	11	7	2	2		24.62	6.15	12.09	0棟	0棟	0棟 0棟
前期後葉	胡桃庵遺跡	1	1				8.48		8.48	1棟	0棟	0棟
中期前葉～	石原遺跡	2	2				47.76	11.34	29.55	0棟	1棟	1棟 2棟
	上ヲロウ・下ヲロウ遺跡	1	1				11.34		11.34	0棟	1棟	0棟 0棟
	大烟遺跡	1				1	21.16		21.16	0棟	1棟	0棟 1棟
中期後葉	漁港遺跡	3	1			2	19.12	7.06	15	0棟	2棟	0棟 0棟
	下延坂遺跡	2				2	21.38	12.96	17.17	1棟	1棟	0棟 0棟
	上ヲロウ・下ヲロウ遺跡	6	6				18.85	9.07	12.72	0棟	1棟	5棟 0棟
	済平遺跡	3	2			1	31.18	7.24	18.68	1棟	1棟	1棟 1棟
	大烟遺跡	11	6	2	3		16.4	7.07	12.9	3棟	0棟	0棟 3棟
	川向東貝津遺跡	2				2	16	7.5	11.75	0棟	0棟	2棟 1棟
	大崎遺跡	5	1		4		19.76	9.8	13.5	3棟	0棟	0棟 0棟
	胡桃庵遺跡	2				2	19.27	10.78	15	0棟	2棟	0棟 0棟
	西垣・東地遺跡	2				2	25	25	25	0棟	1棟	1棟 0棟
後期初葉～	漁港遺跡	2				2	27.93	27.93	27.93	0棟	1棟	0棟 0棟
	上ヲロウ・下ヲロウ遺跡	4	2			2	13.85	7.07	11.08	1棟	2棟	0棟 0棟
	済平遺跡	21	13			8	38.56	9.51	22.77	1棟	16棟	0棟 0棟
	大烟遺跡	1				1	16.4		16.4	1棟	0棟	0棟 0棟
	川向東貝津遺跡	3	1			2	27.35	14.4	22.25	0棟	1棟	0棟 0棟
	大崎遺跡	2				2	16	9.6	17.6	1棟	0棟	0棟 0棟
	西垣・東地遺跡	3				3	25	16	20.42	0棟	2棟	1棟 0棟
後期中葉～	大崎遺跡	6				6	20	9.6	14.89	3棟	2棟	0棟 0棟
晚期	大崎遺跡	1				1	16.8		16.8	0棟	1棟	0棟 0棟

表2 時期別の竪穴建物跡に伴う炉の形態と規模

時代	遺跡名	棟数	炉形態			炉面積(cm)			その他		
			なし	石凹	地床	土器數	石敷	土器埋納	-60×60	-80×80	80×80-
早期前葉	万瀬遺跡	6	6								
	漁港遺跡	1		1							
前期後葉	胡桃庵遺跡	1			1						
中期前葉～	石原遺跡	2	1	1					1		
	上ヲロウ・下ヲロウ遺跡	1		1					1		
	大烟遺跡	1	1								
中期後葉	漁港遺跡	3	3						1		2
	下延坂遺跡	2	2						1	1	副炉 ¹
	上ヲロウ・下ヲロウ遺跡	6	4	2					6		
	済平遺跡	3	1	1	1					2	
	大烟遺跡	11	8	3					2	1	副炉 ¹
	川向東貝津遺跡	2	2						1	1	
	大崎遺跡	5	1	4					4		
	胡桃庵遺跡	2	2						2		
	西垣・東地遺跡	2	2						1	1	
後期初葉～	漁港遺跡	2	1						1	1	1
	上ヲロウ・下ヲロウ遺跡	4	1	1	1				1	1	2
	済平遺跡	21	6	5	5	2	2	1	4	2	9
	大烟遺跡	1	1							1	
	川向東貝津遺跡	3	2	1							1
	大崎遺跡	2			2				2		
	西垣・東地遺跡	3	1	2	2				2		1
後期中葉～	大崎遺跡	5	1	2	2				3	1	
晚期	大崎遺跡	1		1					1		

表3 時期別の竪穴建物跡に伴う儀礼の形態

時代	遺跡名	かご				麻布儀式		住居	麻布儀式	埋設土器(住居)
		かご石の抜き取り	かご石の破壊	土器敷	土器埋納	石棒埋納	配石遺構			
中期後葉	瀧瀬遺跡	1								
	下坂遺跡		1					2		
	上ヲロウ・下ヲロウ遺跡			1						
	篠平遺跡	1								
	大畠遺跡						1			
	川向東貝津遺跡	2						1	1	1
	胡桃津遺跡	1								
	西地・東地遺跡			1						
後期初頭～	篠平遺跡	4	1	2	2				1	
	大畠遺跡		1							
	西地・東地遺跡	1								1



あることが示された。炉の形態に注目すると、縄文時代中期後葉ではほとんどが石囲炉であったのに対し、縄文時代後期に入つてからは石囲炉の割合は減少し、地床炉や石敷炉、土器埋納炉など型式が多様になっていることがわかる(図6)。また炉の大きさに注目した場合、縄文時代中期より縄文時代後期のほうが大型化する傾向にある。

最後に竪穴建物跡に伴う儀礼の形態を時期別にまとめたものが表3である。炉跡の廃絶儀礼に注目した場合、縄文時代中期では炉石の抜き取りがほとんどであったが、縄文時代後期に移つてからは、炉の形態の変化と同じように土器埋納や石棒埋納など廃絶儀礼も種類が増えている(図7)。一方竪穴建物跡の廃絶儀礼に注目すると、配石遺構が縄文時代中期後葉では行われていたが、縄文時代後期では未だ確認できていない。

4.まとめ

以上大まかにではあるが、現在確認されている設楽ダム関連遺跡の縄文時代竪穴建物跡を表にまとめ、比較してみた。今後の課題としては出土遺物のデータと合わせ、より広範囲の地域に対象を広げ、竪穴建物跡のデータの比較を行なっていきたい。

謝辞

本稿の執筆にあたり愛知県埋蔵文化財センターの藤山誠一氏よりご教示を賜った。末筆ながら感謝を申し上げる。

引用・参考文献

- 愛知県埋蔵文化財センター 2016 「瀧瀬遺跡」『年報 平成27年度』
愛知県埋蔵文化財センター 2017 「瀧瀬遺跡」『年報 平成28年度』
愛知県埋蔵文化財センター 2018 「大畠遺跡」『年報 平成29年度』
愛知県埋蔵文化財センター 2019 「石原遺跡」「瀧瀬遺跡」『年報 平成30年度』
愛知県埋蔵文化財センター 2020 「万瀬遺跡」『年報 令和元年度』
愛知県埋蔵文化財センター 2021 「上ヲロウ・下ヲロウ遺跡」「胡桃窪遺跡」『年報 令和2年度』
愛知県埋蔵文化財センター 2022 「大崎遺跡」「下坂遺跡」『年報 令和3年度』
川添和曉編 2019 「西地・東地遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第211集
川添和曉 2020 「設楽町津具の大根平遺跡・鞍船遺跡について」『研究紀要第22号』 愛知県埋蔵文化財センター
鈴木正貴編 2022 「伊平遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第215集
植上昇編 2020 「川向東貝津遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第213集
植上昇編 2022 「大栗遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第218集
宮本長二郎 1996 『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版

尾張国富田荘絵図に描かれた 建物と海

～中世富田荘周辺の古地理と遺跡～

藤山誠一・鬼頭剛

神奈川県鎌倉市円覚寺所蔵『尾張国富田荘絵図』に描かれている名古屋市中川区戸田地区における古地理の解析と遺跡の調査成果について検討した。その結果、絵図に描かれた河道の流れや道路・堤防の位置を想定し、建物や海岸が描かれた意図の一端を示すことができた。

1.はじめに

本稿は、神奈川県鎌倉市に所在する円覚寺所蔵の『尾張国富田荘絵図』（以下『富田荘絵図』と呼ぶ、図1）に描かれた富田荘について、絵図に描かれた現在の名古屋市中川区戸田地区周辺の江戸時代以前の河川の変遷を明らかにし、周辺で行われた発掘調査の成果について検討し、伊勢湾東部に立地する遺跡と古地形との関係を解明しようとするものである。

中世における尾張国富田荘の調査・研究は、『富田荘絵図』や関係する文書が多数あることから、歴史学による多くの研究蓄積があり、上村喜久子（上村1986、上村1990など）等による総括が行われている。1998年に刊行された『新修名古屋市史第2巻』には、市域の歴史として富田荘形成の経緯やその背景について（上村1997）と『富田荘絵図』の絵図表現や富田荘と一柳御厨との境争論、絵図の主題と作成契機などについて（村岡1998）まとめられている。その後『富田荘絵図』の主題について円覚寺所蔵文書・文書目録の読解と絵図表現との整合関係から絵図の主題と作成契機について、荘園の支配領域図としての主題があり、作成契機を文和四年（1355）にみられる守護土岐氏勢力による押領に対応するものと先の村岡の理解を補強した（上村2001）。これらの研究に伴い、『富田荘絵図』に描かれた地名などについて現地比定が大凡なされており、絵図に描かれた内容には絵図を描いた円覚寺側の意図を汲んだ描き分けの存在が指摘されている。

その他には歴史地理学的研究として安田喜憲による旧河川の抽出と条里地割の形成に関し

て、当地の発掘調査や花粉分析なども併せた考察がある（安田1970）。また金田章裕は中世以後の集村化現象について論述する際、明治時代の地籍団の宅地分布の集村化した状況と比較して、『富田荘絵図』に描かれた家屋が「全体に散在しているように見えることから、疎塊村もしくは小村の状況を示している」と評価されている（金田1985）。

考古学的研究としては、1980年代の遺跡分布調査で中川区など名古屋市内の荘域内の遺跡がいくつか確認され（愛知県教育委員会1986）、1990年代末からは千音寺遺跡や戸田遺跡（当初は戸田B遺跡）の発掘調査が行われて、成果をまとめた報告書（名古屋市教育委員会・名古屋市上下水道局・名古屋市住宅都市局）が刊行されている。愛知県埋蔵文化財センター中・近世研究部会においても、成願寺付近の歴史地理学的分析、現地踏査による遺物採集調査などの分析により古代以後の遺跡の存在が明らかにされ、「富田荘絵図」の北側に描かれた流路や道、建物などの現地の比定と遺跡の分布との関係について検討した（愛知県埋蔵文化財センター中・近世研究部会2004）。また今回の分析には直接関係しないが、絵図の右上に描かれた董津付近については、鬼頭・藤山他により分析が行われている（藤山・加藤・鬼頭・鈴木・松田2007）。

本稿では、名古屋市中川区戸田地区を中心とした明治17年作成の地籍図に記された土地利用・地割から抽出した地形と現在の地形図を解析した表層地形が、尾張沖積平野との部分の地形を示すことができているのか、また表現できただ地形と『富田荘絵図』に描かれた情報との対応関係を述べることにより、『富田荘絵図』

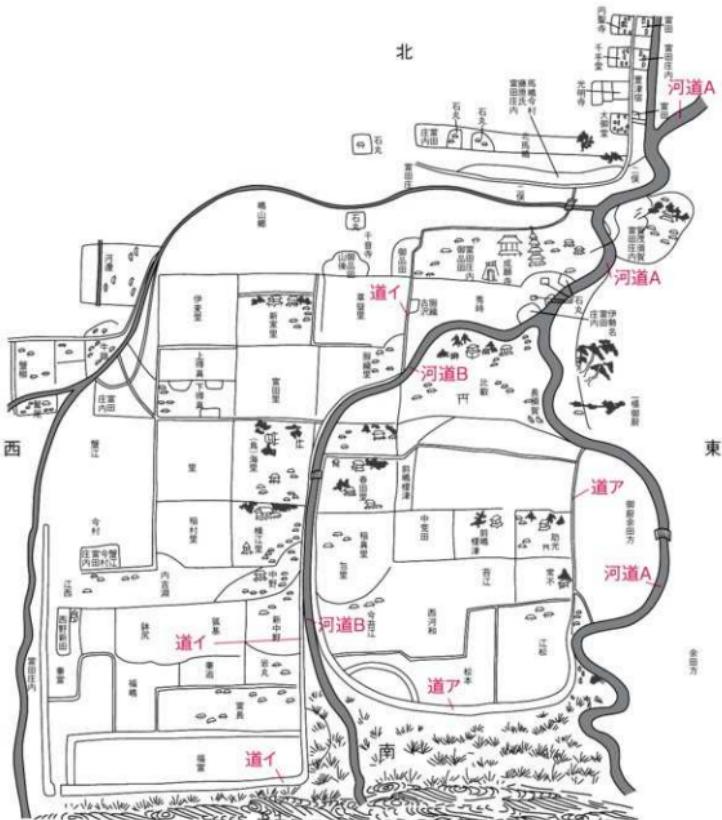


図1 尾張国富田莊絵図のトレース図(赤字は本文記載の仮の名称)

の描かれた意図の一端を示すことが可能と思われる。

2. 地籍図からの解析

(1) 地籍図の解析方法

名古屋市中川区戸田地区を中心とした南北約4.5km、東西約3.5km範囲について、愛知県公文書館所蔵の明治17年作成の地籍図を図化し、解析を行った。地籍図の図化にあたっては、愛知県埋蔵文化財センター中・近世研究部会に

より図化された旧海東郡万場村・千音寺村・新家村の地籍図に、今回新たに旧海東郡の11ヶ村と旧愛知郡の3ヶ村の地籍図を追加した^{*}(図2)。

地籍図の分析では、地籍図に記載された地割と地目に着目して、宅地・寺社・畠地・墓地・林・藪等の微高地群を18箇所(微高地群A～微高地群R)と微高地群に挟まれた水田と草生等の低地部14箇所(低地部A～低地部N)を抽出した。微高地群の抽出にあたっては、およそ自然河道などによる風成地形と思われる單

* 図化した地籍図名 愛知郡:前田村、大船郷村、下之一色村、海東郡:万場村、千音寺村、新家村、伊麦村、長須賀村、正知村、伏屋村、春田村、戸田村、助光村、榎津村、供米田村、包里村、江松村

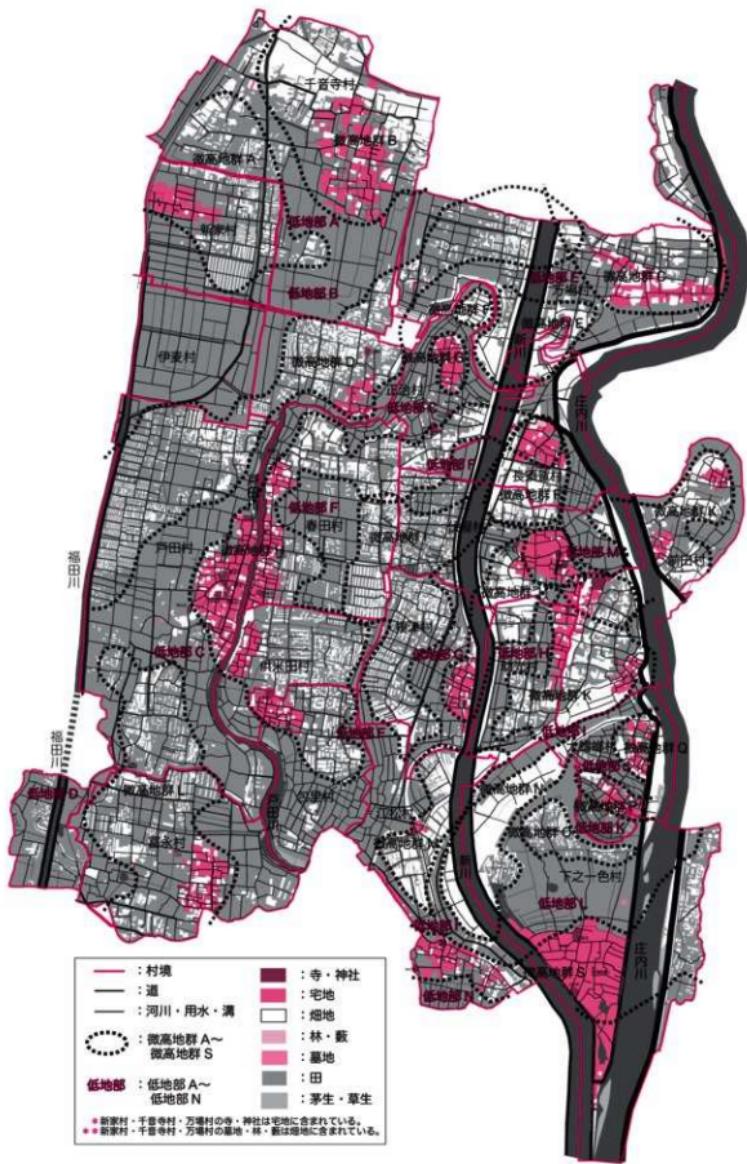


図2 名古屋市中川区戸田地区的地籍図（約25,000分の1）

表1 地籍図からみた地形分類

地形分類	西側・北側 微高地群	低地部	東側・南側 微高地群	備考
地形1	微高地群 A	低地部A	微高地群 B	
地形2	微高地群 C・ 微高地群 D	低地部B	微高地群 D	
地形3	微高地群 E・ 微高地群 F	低地部E	微高地群 E・ 微高地群 F・ 微高地群 G	
地形4	微高地群 C・ 微高地群 D・ 微高地群 F・ 微高地群 G・ 微高地群 L	低地部C	微高地群 H	一部が富 田村被災 の旧田川 、戸田 通路確認 自然河道 跡
地形5	-	低地部D	微高地群 L	
地形6	微高地群 H	低地部F	微高地群 I	一部が正保 被災前の旧 五条川
地形7	微高地群 I	低地部G	微高地群 J	
地形8	微高地群 J	低地部H	微高地群 K の南側	
地形9	微高地群 K の南側・ 微高地群 M	低地部I	微高地群 N・ 微高地群 Q	18世紀後 半以前の農 耕未前の旧 庄内川
地形10	微高地群 O	低地部J	微高地群 P	富田被災 の庄内川
地形11	微高地群 P	低地部K	微高地群 Q	
地形12	微高地群 O	低地部L	微高地群 S の東側	
地形13	微高地群 R	低地部M	微高地群 K の北側	富田庄地図 の庄内川の 可能性
地形14	微高地群 S	低地部N	-	江戸時代 の干拓地 に接する

位の抽出に努め、江戸時代以後の堤や河川敷に所在する畠地などは周囲の土地利用の状況を考慮して抽出した。解析の結果を述べるにあたり、比較的大規模な河川は2つの並行する微高地群2箇所とその微高地群に挟まれた低地部1箇所をもって旧流路の痕跡としての地形が形成されたものと考え、地形1～地形14を分類した。また小規模な河川では、1箇所の微高地群の中に旧流路の痕跡と思われる比較的小規模で帯状の水田域など（低地部）を確認できる場合が認められる。

（2）地籍図解析により分類した地形

今回の分析範囲では、主に江戸時代以前に流れている庄内川とその支流により形成された地形14箇所を分類した（図2・表1）。地籍図にある地形の記述では、地籍図の単位である旧郡・村名によりその範囲を述べるが、旧郡名を省略し、村名のみで表記する。

地形1：微高地群A（千音寺村南西部から新家村北東部）と微高地群B（千音寺村北東部）に挟まれた低地部A（千音寺村中央部）で、低地部Aは千音寺村南東部で低地部Bと合流し、微高地群Dで止まる。

地形2：低地部Aがあるために連続していないが、北東側の微高地群B（千音寺村北東部）から南西側の微高地群A（新家村南東部）の南東側で、微高地群D（万場村中央部から西部、正治村西部を経て戸田村北西部に至る）に挟まれた低地部B（千音寺村南西部から伊麦村南東部、新家村南西部に続く）で、低地部Bは低地部Aとつながる。

地形3：庄内川に面する微高地群C（万場村東部から万場村北側中央部）と微高地群D（万場村北西部から千音寺村南東端部と正治村西部を経て戸田村北西部に至る）と微高地群E（万場村南部から長須賀村北部）・微高地群F（正治村北端部）・微高地群G（正治村北東部）に挟まれた低地部E（万場村中央部から南西部）で、低地部Eは万場村南東端部にて庄内川に接する。低地部Eは低地部Cと接続していた可能性もあるが、微高地群Dにより南が止まる。

地形4：微高地群D（万場村西端部から千音寺村南東端部と正治村西部を経て戸田村北西部に至る）・微高地群E（万場村南部から長須賀

村北部）・微高地群F（正治村北端部）・微高地群G（正治村北東部）・微高地群L（戸田村南部から富永村中央部）と微高地群H（長須賀村中央部・小千村南端部、春日村北部から西部を経て戸田村東部・供米田村・包里村北部に至る）に挟まれた低地部C（長須賀村北部から正治村中央部と戸田村中央部を経て供米田村南西部・富永村東部・包里村南部に至る）で、低地部Cは西の低地部Dとつながり、長須賀村北部で庄内川に接する。微高地群E～微高地群Gの間には低地部Cとつながる低地部が見られ、微高地群Gの周囲をめぐる蛇行流路の痕跡を残す。

地形5：東側の微高地群L（戸田村南部から富永村中央部）とその西にある低地部D（戸田村南西部）で、微高地群Lは微高地群Dとつながっていた可能性がある。

地形6：微高地群H（長須賀村中央部・小千村南端部、春日村北部から西部を経て戸田村東部・供米田村・包里村北部に至る）と微高地群I（長須賀村中央部から伏屋村南西部・春田村南東部を経て榎津村西部に至る）に挟まれた低地部Fで、低地部Fは長須賀村中央部と春田

村東部の2ヶ所において微高地群Hと微高地群Iに閉ざされる。

地形7：微高地群I（長須賀村中央部から伏屋村南西部・春田村南東部を経て榎津村西部に至る）と微高地群J（伏屋村中央部から助光村北西部を経て榎津村東部に至る）に挟まれた低地部G（伏屋村中央部から榎津村中央部）で、低地部Gの南側は低地部Hとつながる。低地部Gの伏屋村中央部北側では微高地群Rが巡っている。

地形8：微高地群J（伏屋村中央部から助光村北西部を経て榎津村東部に至る）と微高地群K（前田村から助光村南部に至る）に挟まれた低地部H（伏屋村中央部の南側から助光村中央部を経て同村南西部に至る）で、低地部Hは榎津村南東端部で低地部Gとつながる。低地部Hの伏屋村中央部南側で微高地群Rが巡っている。

地形9：微高地群Kの南西側（前田村南西部から助光村南部に至る）・微高地群M（助光村南端部から江松村中央部に至る）と微高地群N（下之一色村北端部から江松村中央部に至る）・微高地群Q（大蠟螂村北東部）に挟まれた低地部Iで、微高地群Kと微高地群Mは分かれているが、助光村南端部にて堤状畠地でつながる。また微高地群Nと微高地群Qも分かれているが、大蠟螂村北西部にて堤状畠地でつながる。低地部Iは大蠟螂村北東端部で庄内川と接する。

地形10：微高地群Q（大蠟螂村北東部）と微高地群Kの一部（前田村南部）・微高地群P（大蠟螂村中央部南側）に挟まれた低地部J（大蠟螂村中央部北側）で、低地部Jの東側で庄内川に接する。低地部Jは微高地群Nから北東にのびる堤状畠地により閉じられており、微高地群Pの北西部で低地部Kと低地部Jはつながる。地形11：微高地群P（大蠟螂村中央部南側）と微高地群O（下之一色村北部）に挟まれた低地部K（大蠟螂村南端部・下之一色村北東端部）で、低地部Kの東側で庄内川に接する。低地部Kは微高地群Nによりその北西部を閉じられており、微高地群Oの北西部で低地部Lと低地部Kはつながっている。

地形12：微高地群O（下之一色村北部）と微高地群Sの東側（下之一色村南部）に挟まれ

た低地部L（下之一色村中央部）で、低地部Lの東側で庄内川に接する。低地部Lは微高地群Nにより西側を閉じられており、微高地群Oの西側で新川や低地部Iと接する。

地形13：微高地群R（長須賀村中央部から伏屋村東部を経て前田村南西部に至る）と微高地群Kの北東側（前田村北東部）に挟まれた低地部M（長須賀村南東部から伏屋村東部）で、低地部Mは長須賀村南東部から伏屋村東部で庄内川に接する。低地部Mは伏屋村南東端部でも庄内川に接するが、前田村北東部から続く微高地群Kにより閉じられているようにも見える。

地形14：微高地群S（下之一色村東部から同村南部を経て江松村南部に至る）と微高地群Sの南にある低地部N（江松村南端部）で、微高地群Sは庄内川と新川に切られる。

（3）地形の変遷

次に14地形に分類した地形の変遷について検討する。各地形を構成する微高地群と低地部の重複関係と接合関係で、地形の大凡の変遷を検討する。また先の分析により地籍図から抽出した地形1～地形14は江戸時代後期以後の状況を反映する地籍図にみられる庄内川と新川より古い地形である。

地形1と地形2は、低地部Aが千音寺村南東部で低地部Bと合流し、微高地群Dで止まるところから、地形4に先行する地形である。また低地部Aは低地部Bとつながることから、低地部Bの形成は地形1の微高地群A・微高地群Bと同時期かより古い可能性が高い。

地形3の低地部Eが万場村南東端部で、地形4の低地部Cが長須賀村北部で庄内川に接する。また低地部Cは地形5の低地部Dとつながる。地形4の微高地群E～微高地群Gの間に低地部Cとつながる低地部が見られ、蛇行流路の痕跡と考えられる。また低地部Eは低地部Cと接続していた可能性もあるが、低地部Eは微高地群Dにより南が止まるところから、地形3は地形4より古い地形と考えられ、地形5は地形4と同時期の地形になる可能性がある。

地形6は、低地部Fが長須賀村中央部と春田村東部の2ヶ所において地形4にも関わる

微高地群Hと地形7の微高地群Iに閉ざされており、地形6は地形4と地形7より古い地形と考えられる。

地形7の低地部Gと地形8の低地部Hが榎津村南端部においてつながり、低地部Gの伏屋村中央部北側において、低地部Hの伏屋村中央部南側で地形13の微高地群Rが巡っている。よって地形7と地形8は同時期の可能性があり、地形13より古い地形と思われる。地形9は低地部Iが大船瀬村北東端部で庄内川と接しており、微高地群Mと微高地群Nは新川により切られてしまい、地形9は新川掘削以前の地形である。

地形10の低地部Jは大船瀬村中央部で、地形11の低地部Kは下之一色村の北端部にて、地形12の低地部Lは下之一色村中央部東側で庄内川に接する。地形10の低地部Jは地形9の微高地群Nから北東にのびる堤状畠地により閉じられており、微高地群Pの北西部で低地部Kと低地部Jはつながっていることから、地形10は地形9と地形11より先行する地形と思われる。同様に低地部Kは微高地群Nによりその北西部を閉じられており、微高地群Oの北西部で低地部Lと低地部Kはつながっていることから、地形11は地形9と地形12より先行する地形と思われる。同様に低地部Lは微高地群Nにより西側を閉じられており、微高地群Oの西側で新川や低地部Iと接することから、地形12は地形9と新川より先行する地形である。

地形13の低地部Mは長須賀村南東部から伏屋村東部で庄内川に接する。低地部Mは伏屋村南東端部で庄内川に接するが、前田村北東部から続く地形9の微高地群Kにより閉じられているようにもみえ、地形13は地形9より古い地形である可能性がある。

地形14の微高地群Sは庄内川と新川に切られる。

以上をまとめると、地形1～地形3・地形6は地形4に先行する地形で、地形6は地形7より古い地形と考えられる。地形4と地形5、地形7と地形8はそれぞれ同時期の地形になる可能性があり、地形7と地形8は地形13より古い地形と考えられる。地形9～地形12は、

地形10より地形11、地形12、地形9、新川の順に変遷し、地形13は地形9より古い地形である可能性がある。

(4) 地形の形成時期

以上の地形の変遷について大凡の時期を検討する。

まず、円覚寺所蔵『尾張国富田荘絵図』に描かれた旧庄内川（以下河道A）とその支流（河道B）の位置との対応関係を述べる。

今回地籍図において解析した範囲では、河道Aは「賀茂須賀富田庄内」の地点でやや東に振り、その南で大きく西に折れて支流である河道Bが「伊勢名富田庄内」の南東にて南西に分かれれる。河道Aは河道Bと分かれた後、南下してやや東に振りて3本の樹木絵の西で西へ少し曲がり、「長須賀」の辺りでふくらんで、東に大きく流れを振る。そして「御厨余田方」を大きく囲んで再び西に流れを変えて「江松」の東にある堤状道に当たり、南東に大きく折れて余田方に流れ、樹木の絵の南東でさらに西へ折れて、もう一度草生の北東端部で南に大きく折れて東に流れを変えて、草生の南東端部で南に折れて南南東に流下して海へと至る。地籍図との対応関係では万場村南東端部で微高地群Cの南で微高地群Eの東になる低地部Cにやや河道Aが西に振りて河道Bが分かれて低地部Eを流れれる可能性もあるが、絵図の「長須賀」の東で西に流れがふくらむところを低地部Mに当たると河道Bは長須賀村北側にて河道Aより分かれて低地部Cを流れる。河道Aの南側では、絵図の「助光」と「江松」の位置が地籍図の助光村と江松村の位置で変わらず、また助光村の東側村境が絵図の「助光」と「江松」の東を区切る道アとおおよそ同じ地点を通ると考えると、「江松」の東にある堤状道に河道Aの流れが当たるのは地籍図低地部Jの部分となる。

続いて河道Bは、河道Aより絵図の「伊勢名富田庄内」の南東にて南西に分かれ、一度少し南下して寄棟風建物の絵の北で西北西に流れを変えて北にふくらみ、「服織古沢」の南東にて南西に曲がって、「服織里」の東で条里状に北から南下する道イに当たり、「服織里」の南を道イに沿って南西に流れれる。そして「鳥

時代	鎌倉時代以前で時期不明	富田荘絵図 (室町時代)	~戸田時代中期	江戸時代後期以後
地形	地形1～地形3 → 地形4・地形5	富田荘絵図の戸田川、河道B (地形4の部分を含む)	地籍図の福田川 濡地化 → 尾張国元禄国絵図の戸田川	→ 地籍図の福田川
	地形13	地形13 (富田荘絵図の庄内川、河道A)	正保尾張国図・正保尾張国図・庄内川・地形6の一部	尾張絵図・尾張国明細図の萱津川・新川 (地籍図の新川)
	地形6 → 地形7・地形8	地形10 (富田荘絵図の庄内川) 地形14	地形11～地形12 → 地形9	→ 地籍図の庄内川

図3 地籍図からみた地籍の変遷

海里」と「春田里」の間、「横江里」と「船真里」の間、「中野」と「包里」の間、「新中野」と「今昔江」の間を堤状道に挟まれる中を流れ、「岩丸」・「富長」の東にある草生の中を南南東に流れ海に至る。地籍図との対応関係では、河道Bは長須賀村北部にて河道Aより分かれて低地部Cを流れる。そして水田域のつながりを重視すると、正治村と万場村の村境に沿って北上して、微高地群Gの北を西にすすんで、正治村中央部の微高地群Dの南東側に沿って南西に流れ春田村北西部にて南に折れて南に流れる。この河道Bの屈曲部は、絵図の「富田里」が地籍図の伊麦村南東部にあたるものと想定されているので、絵図の「服織里」の南西部にあたる。河道Bがほぼ真っ直ぐに南に流下する部分は、低地部Cの春田村と戸田村の村境付近を流れる戸田川の位置とおおよそ対応するものと思われる。地籍図の戸田村と供米田村・包里村の村境に沿って戸田川が東に曲がって蛇行する流れとも大凡合うようと思われる。地籍図にある新川と福田川は絵図には描かれていない。

次に、江戸時代の絵図との対応関係から、地形の形成時期を検討する。江戸時代の絵図には、江戸時代正保期の絵図とされる愛知県図書館所蔵『尾張国図 西』と江戸時代元禄期の尾張国絵図の控えとされる愛知県図書館所蔵『尾張国元禄国絵図』、江戸後期の愛知県図書館所蔵『尾張絵図』と同所蔵『尾張国明細図』、江戸時代後期の寛政頃に作成された愛知県図書館所蔵『海東郡村邑全図』がある。これらの絵図に描かれた庄内川・五条川・萱津川・新川・戸田川・福田川と海岸側の干拓地堤防と村の位置、などにより大凡の地形の変遷を考えたい。

先ず庄内川は江戸時代正保期の『尾張国西』と江戸時代元禄期の『尾張国元禄国絵図』では、地籍図の上流側ではほぼ同じ位置を流れ、下流側では低地部Iの位置を流れおり、江戸時代後期の寛政頃に作成された愛知県図書館所蔵『海東郡村邑全図』の「下之一色村」と『中須村』には「古川」として河道跡が描かれている。18世紀末以後の『尾張絵図』と『尾張国明細図』、『海東郡村邑全図』の各村絵図に、地籍図の位置ではほぼ描かれている。

新川は18世紀末以後の『尾張絵図』と『尾張国明細図』、『海東郡村邑全図』の各村絵図に、地籍図の位置ではほぼ描かれている。

戸田川は江戸時代正保期の『尾張国西』には描かれていないが、江戸時代元禄期の『尾張国元禄国絵図』、18世紀末以後の『尾張絵図』と『尾張国明細図』、『海東郡村邑全図』の各村絵図に、地籍図の位置ではほぼ描かれている。

福田川は江戸時代正保期の『尾張国西』、江戸時代元禄期の『尾張国元禄国絵図』、18世紀末以後の『尾張絵図』と『尾張国明細図』、『海東郡村邑全図』の各村絵図に、地籍図の位置ではほぼ描かれている。

萱津川（萱津井・五条川筋）は新川掘削以前に存在した河道で、地籍図の範囲ではほぼ同じ位置を流れると考えられるが、萱津川は江戸時代正保期の『尾張国西』に描かれ、上流で上萱津村と中萱津村の間から五条川から分流する河道で、江戸時代元禄期の『尾張国元禄国絵図』と18世紀末以後の『尾張絵図』と『尾張国明細図』では、上流で上萱津村の北側で法界門橋の南から清須川（幼川・五条川）から分流する河道である。この河道は、『尾張国富田荘絵図』には描かれておらず、地籍図にも自然河

道としては辿れない。萱津川を江戸時代の絵図に描かれた村の位置をもとに辿ると、上流はおよそ新川の位置を南下して流れ、長須賀村の北側で庄内川に最も接近し、長須賀村の東側で庄内川の西に流れ、長須賀村の南東で西に折れて長須賀村と伏屋村の間を流れ、伏屋村の西端部で南に折れて春田村と伏屋村の村境付近と供米田村と榎津村の村境付近を経て、包里村と江松村の村境付近の低地部Fを流れるものと思われる。低地部Fの南端である江松村から包里村を経て富永村に至る村境は、江戸時代正保期の『尾張国図 西』で、五条川筋が「福田新田」と記された干拓堤防の内側に流下する北側干拓地境の形状と似る。

以上の地籍図から分類した地形の変遷と地形形成の時期分析の結果をまとめたものが図3である。(藤山)

3. 等高線図による解析

(1) 分析方法

調査地点を含めた周辺地形を解析するため、1/2500スケールで等高線図を作成した。等高線図の作成にあたり愛知県名古屋市発行の「名古屋市都市計画基本図(1/2500)」にプロットされた標高値を基にした。2010(平成22)年に測量されたものを用いた。なお、現在の河川堤防や高速道路、工場や学校といった人工的に建設されたことが明らかな標高値は除外して等高線を描画した。

(2) 分析結果

(2) -1 遷跡周辺の等高線図

東西約5.85km、南北約5.88kmの範囲全体では標高-1.8mから標高1.0mまでの等高線が描かれる(図4)。解析範囲全体では図の北と北東方向で相対的に高く、解析範囲の北東、名古屋市中川区烏森町に標高1.0mを超える場所や、名古屋市中川区の万場に標高1.0mを超える場所がみられるものの、解析範囲の南と西は標高0mよりも低い場所となっている。およそ標高-1.4mを境にして等高線間隔が狭くて地形勾配が比較的急なところと、等高線間隔が広くて地形勾配が緩やかなところに大きく2分される。解析範囲の南約3kmには伊勢湾が

ひろがる。河川はすべて北から南へ流下しており、西から福田川、福田川から東へ約880mで戸田川、戸田川から東へ約620mで新川、新川から東へ約200mで庄内川、庄内川から東へ約1.3kmで荒子川の5河川が流れる。解析範囲の北には北東・南西方向に名古屋市中川区八田から蟹江町にかけてJR関西本線が通る。また、近畿日本鉄道(略称近鉄)は八田から名古屋市中村区横井山緑地の南側まではJR関西本線と並行して通るが、横井山緑地の南側から線路は分岐し、さらに南西方向の近鉄蟹江駅へ向かう。図の中央部分には19号線が東西方向に、さらに南には国道1号、さらに南には70号線が通る。解析範囲のでは国道302号線が通る。図の北には名古屋高速5号万場線が通る。

等高線間隔には疎密差がみられ、疎密差の空間的な配置状況から低平な場所の起伏が読み取れる。解析範囲では、閉曲線の等高線からなる島状に高いところと、それらの間には谷地形が判別できる。先の河川沿いごとに標高の高いところから北、南へ順に述べる。

1. 西の福田川沿いには、解析範囲の北西側に伊福に標高-1.4m～-0.2mで解析範囲にかかっているところだけで東西約620m、南北約630mの標高の高い地形がみられる。また、その南の下ノ森付近にも標高-1.4m～-0.2mで解析範囲にかかっているところだけで東西約420m、南北約440mの標高の高い地形がみられる。福田川の東には千音寺に標高0m～0.6mで、解析範囲にかかっているところだけで東西約500m、南北約290mの標高の高い地形がみられる。さらにその南の服部にも標高-0.6m～-0.2mの閉曲線で囲まれる東西約410m、南北約250mの島状に標高の高い地形がみられる。

2. 戸田川沿いには北からJR関西本線の春田駅の西側に、春田から供米田にかけて標高-1.4m～-0.2mの閉曲線で囲まれた東西約630m、南北約1.2kmの島状に標高の高い地形がみられる。供米田の戸田川左岸には標高-1.4m～-0.8mの閉曲線で囲まれた東西約150m、南北約180mの島状に標高の高い地形がみられる。供米田からさらに南の「かの里」では、戸田川の左岸に標高-1.4m～-0.4mの閉曲線で囲

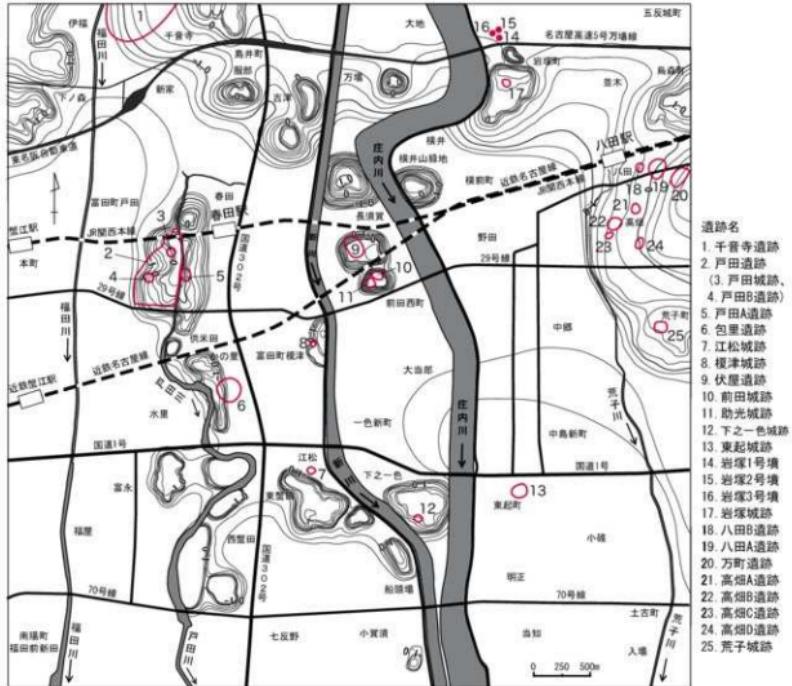


図4 名古屋市中川区および周辺の等高線図

また東西約240m、南北約650mの島状に標高の高い地形がみられる。かの里のさらに南の富永付近には戸田川の右岸に標高-1.4m~-0.6mの閉曲線で囲まれた東西約410m、南北約250mの島状に標高の高い地形がみられる。また、そのさらに西にも標高の高いところが認められ、標高-1.8m~-0.8mで東西約290m、南北約510mの島状に標高の高い地形がみられる。戸田川の左岸の西蟹田でも標高の高い3地域が認められ、北から標高-1.6m~-0.8mの閉曲線で囲まれた北東・南西に約350m、北西・南東に約220mの島状に標高の高いところがみられる。上で述べた地形の南には戸田川の左岸に標高-1.6m~-1.2mで東西約260m、南北約630mで島状に標高の高いところがみられる。さらにその東には標高-1.8m~-1.2mで東西約350m、南北約410mの島状に標高の高いところがみられる。

3. 新川沿いには北から、新川の右岸である吉津において2つの標高の高いところが認められ、北には標高-0.6m~-0.4mで東西約230m、南北約400mの島状に高いところ、その南には標高-1.4m~-0.4mで東西約410m、南北約400mで南側に凸の舌状地形がみられる。富田町桜津の新川右岸には標高-1.4m~-0.4mの閉曲線で囲まれた東西約190m、南北約420mの島状に標高の高い地形がみられる。富田町桜津のさらに南の江松、そしてさらに南の船頭場にかけての新川右岸には北西から南東方向へ3つの島状地形がみられる。北から標高-1.4m~-0.2mの閉曲線で囲まれた北西・南東に約620m、北東・南西方向の幅約440mの島状に標高の高い地形がみられる。その南東には標高-1.4m~-0.4mの閉曲線で囲まれた東西約240m、南北約180mの島状に標高の高いところがみられる。3つ目の船頭場付近には標高

-1.4m ~ -0.6m の閉曲線で囲まれた北西・南東に約 350m、北東・南西の幅約 200m の島状に標高の高いところが認められる。さらに南の小賀須には新川右岸に標高 -1.2m ~ -0.8m の閉曲線で囲まれた東西約 110m、南北約 200m の島状に標高の高いところが認められる。

4. 庄内川沿いには北から万場付近の庄内川右岸において標高 -0.8m ~ 1.0m で東西約 260m、南北約 250m の南側への凸地形をもつ舌状地形がみられる。万場において庄内川を挟んで対岸の庄内川左岸には、岩塚町に南北方向に 2 つの島状地形が認められる。北のものは標高 0m ~ 0.6m の閉曲線で囲まれた東西約 160m、南北約 140m の島状に標高の高いところ、さらにその南には標高 0m ~ 0.8m の閉曲線で囲まれた北東・南西に約 530m、北西・南東の幅約 410m の南側へ凸の舌状地形がみられる。庄内川右岸のさらに南の長須賀では標高 -1.4m ~ 1.0mまでの閉曲線で囲まれた東西約 360m、南北の幅約 490m の島状に標高の高いところがみられる。長須賀の庄内川を挟んだ対岸、庄内川左岸の横井山線地には標高 -1.4m ~ 0.6m の島状に標高の高いところ、さらに南の前田西町には標高 -1.4m ~ 0.2m の閉曲線で囲まれた小さな島状地形が南北方向に 2 つ連なった形でみられる。北側のものは標高 -1.4m ~ 0.2m で東西約 440m、南北約 320m の島状地形と、標高 -1.4m ~ 0m で東西約 320m、南北約 240m の島状地形が認められる。さらに南の下之一色には庄内川の右岸と新川の左岸との間に標高 -1.4m ~ -0.2m の閉曲線で囲まれた東西約 560m、南北約 530m の島状に標高の高いところがみられる。

5. 荒子川の周辺には北から南へ中郷、中島新町、小碓、土古町、入場にかけて周りよりも標高の高いところはみられない。いっぽう、荒子川の北東にある烏森町には JR 関西本線の八田駅の北東に、確認されるだけで標高 0m ~ 1.0m で東西約 600m、南北約 350m で西方に張り出した舌状地形が認められる。その南の荒子町にも標高 -1.4m ~ 0.4m で、確認できるだけで東西約 620m、南北約 630m の南に張り出した舌状地形がみられる。

いっぽうで、谷地形もみられる。北西から南

東へ順に列記する。

1. 図の北西、下ノ森に北と南に並ぶ標高 -1.0m の等高線がつくる東に張り出した舌状地形との間に、北から西へ約 80 度傾いた谷の長軸方向をもつ標高 -1.4m ~ -1.0m で長軸方向の長さ約 440m。長軸に直交する最大幅約 90m の谷地形がみられる。現在、この谷の中を流下する河川はない。
2. 解析図の西側、北の新家から福屋、南陽町福田前新田にかけて標高 -1.8m 以上で長軸方向の長さ約 5.0km 以上で、北の新家付近で谷の最大幅約 1.0km の谷地形がみられる。現在、この谷の中を流下する河川はない。
3. 解析図の北側、千音寺には谷の長軸方向が北から約 50 度東に傾き、谷の最大幅約 440m、谷の長さ約 1km 以上の谷地形がみられる。現在、この谷の中を流下する河川はない。
4. 解析図の北側中央、先の千音寺でみられた谷の東、島井町、服部、吉津において谷の長軸が北から約 15 度西に傾き、谷の最大幅約 340m、谷の長さ約 780m の谷地形がみられる。現在、この谷の中を流下する河川はない。
5. 解析図の北側中央、万場にかけて西の標高 -1.4m ~ -0.2m までに谷の長軸方向が北から約 50 度西に傾いた谷の最大幅約 560m、谷の長さ約 420m の谷地形がみられる。この谷の中を現在の新川が流下している。
6. 解析図の北側中央、大地から岩塚町にかけて標高 -1.4m ~ -0.8m までに谷の最大幅約 680m、谷の長さ約 850m の谷地形が認められる。この谷の中を現在の庄内川が流れる。
7. 解析図の北側東、岩塚町、並木、烏森町から樅前町方向へ向かう標高 -1.4m ~ -0.2m までに谷の最大幅約 1.3km、谷の長さ約 1100m の谷地形が認められる。現在、この谷の中を流下する河川はない。
8. 解析図の北東、八田において、標高 -1.4m ~ 0.8m までに谷の長軸方向が北から約 70 度東に傾いた谷の幅約 370m、谷の長さ約 1000m の谷地形がみられる。現在、この谷の中を流下する河川はない。
9. 解析図の中央西より、供米田には北の春田から供米田にかけて標高 -1.4m ~ 0.2m の閉曲線からなる島状地形の南端に、谷の長軸方向

が北から約 65 度東へ傾いた谷の幅約 120m、谷の長さ約 300m の谷地形がみられる。現在、この谷の中を流下する河川はない。

10. 解析図の南西側、西蟹田には西から北側を島状の 4 つの地形に囲まれて標高 -1.8m ~ -1.2m までに谷の長軸方向が北から約 50 度西に傾いた、谷幅約 850m、谷の長さ約 510m の谷地形がみられる。現在、この谷の中を流下する河川はない。

11. 解析図の南東側、北の大当郎、中郷から中島新田、東起町、小碓、明正、土古町、当知、入場にかけて標高 -1.8m ~ -1.6m までに、谷の長軸方向が北から約 15 度西に傾いた谷の最大幅約 1900m、谷の長さ 2900m 以上の谷地形が認められる。この谷の中を現在の庄内川と荒子川が流下している。

(2) -2 地籍図と等高線図の古地形解析結果の対比

1884(明治 17) 年に作成された地籍図を用いた古地形の解析結果と、現在の標高値を基に描画した地形等高線図による解析結果との対比を行なった。なお、解析に用いた地籍図の範囲は東西約 3.5km、南北約 4.5km の範囲、等高線図の範囲は東西約 5.85km、南北約 5.88km であり、等高線図の面積の方が大きく、地籍図の範囲は等高線図の面積全体の 51.3% 分を表している。具体的には、等高線図の庄内川流路よりも東約 1.76km 分にある荒子川周辺域や、等高線図の福田川流路よりも西約 0.73km の距離分が地籍図には表れてこないことをお断りする。

古地形の対比にあたり、微高地と微高地との間で從属性に現れる低地ではなく、低平な地表に凸地形となって現れる微高地に着目した。地籍図の北西端にある微高地群 A の範囲は等高線図では千音寺付近の谷地形にあたり、等高線図には表れてこない。地籍図の北にある微高地群 B は等高線図の千音寺や脇部に認められた凸地形にあたり対応関係がみられる。地籍図の北東端にある微高地群 C は等高線図北部の万場付近の凸地形に対応する。地籍図の中央より北西寄りの微高地群 D や、新川流路北側にみられる微高地群 E・F・G にそのまま対応する等高線図による地形はみられないものの、微高

地群 D の北側部分や微高地群 E・F は等高線図の北部の吉津付近に認められる凸地形に対応しているようである。なお、新川流路により切られる微高地群 E にあたる地形は等高線図には認められない。地籍図の主に戸田川の流路沿いに設定された微高地群 H について、特に微高地群 H の南側半分は等高線の戸田川流路沿いの春田、供米田、かの里に認められた島状に周りよりも標高の高いところにあたり良い対応関係を示している。地籍図の中央、新川の流路沿いに設定された微高地群 I に対応する地形は等高線図にはみられない。地籍図の中央部、新川と庄内川とに挟まれた地域に設定された微高地群 J は等高線図の前田西町や富田町榎津にみられる島状に標高の高いところに対応している。地籍図の中央東端、庄内川流路沿いに設定された微高地群 K に対応する等高線図に現れる地形はみられない。地籍図の南西端の微高地群 L にそのまま対応する等高線図の地形はみられないものの、微高地群 L の東端の一部が等高線図の戸田川流路沿いの富永でみられる島状の凸地形に対応している。地籍図の南端、戸田川と庄内川とに挟まれた範囲に設定された微高地群 M・N・O・P・Q について、等高線図には対応する地形が現れない。地籍図の中央部北東寄りにある微高地群 R は、等高線図の中央付近で新川と庄内川との挟まれた長須賀に良く対応している。地籍図の南端、新川と庄内川との合流部に設定された微高地群 S は等高線図の南端の江松、下之一色、船頭場にかけて認められる島状に標高の高い範囲と良く対応している。

以上をまとめると、地籍図に設定された微高地群と等高線図に認められた周囲よりも標高の高い凸状地形について、両方ともに対応関係がみられたところとして微高地群 B・C・D・E・F・G・H・J・L・R・S の 11 微高地群が対応している。いっぽうで、地籍図の微高地群 A・I・K・M・N・O・P・Q の 8 微高地群については、等高線図にはまったく現れなかったり、周囲よりも標高の低い谷地形の中となってしまうところもみられた。

(2) -3 微高地群と地形分類の対応と推定される古環境

地籍図により設定された微高地群と低地部と

の組み合わせを基にして第2章では14の地形を区分し、その古地理を推定した（図2）。ここでは、それらの地形分類と等高線図の凸地形との関係性と、それから推定される古環境について、地形の空間的な配置から推定を試みる。なお、地質学では地層の層序の垂直的な層相変化に基づき古環境を推定するのが本来だが、筆者らの手元には参考となるような地質学的データが圧倒的に少ないため、地形の空間的な配置のみからの推定であることをお断りしておく。

先ず地籍図から設定された微高地群と等高線図の凸地形とがとても良く対応したところは2地点しかない。それは地籍図の微高地群C・Dと低地部Bからなり地形3とされたところと、微高地群D・E・F・G・L・Hと低地部Cからなり地形4とされたところである。等高線図にも地形3とされたところには吉津や万場にかけてみられた凸地形が認められるが、特に地形4については戸田川流路沿いの春田、供米田、かの里の島状の地形の連なりとして明瞭に現れている。地形4は『富田莊絵図』にも「春田里」や「包里」として描かれており、さらに名古屋市による戸田遺跡の発掘調査地点にもあたり、本地点が13世紀から現在にいたるまでヒトの生業活動に適した場所であった可能性が高い場所であると指摘できる。地形1・2、5～8、13・14は微高地群と等高線に認められる凸状地形と一部対応関係があるが、特に地籍図において宅地を含まずに畠地の分布のみから設定された微高地群Iは等高線図にはまったく現れず、現在の標高値のみからの推定では描画の限界にある微高地を地籍図が描き出している可能性がある。その最たるもののは地籍図の微高地群のみに現れて、等高線図にはまったく現れなかった凸地形がある。微高地群K・M・N・O・P・Qの組み合わせからなる地形9・10・11・12である。これらは『富田莊絵図』に描かれた庄内川の流路と推定されるが、特に微高地群K・M・N・Qからなる組み合わせから、それらに囲まれた範囲にはかつての河道と思われるものが明瞭に現れた（図2）。これは18世紀後半以前の漁港前の旧庄内川の流路跡と推定される。等高線図からの解析スケールでは判明しなかったものが地籍図の解析

から得られた好例であろう。地籍図から設定される微高地群と等高線図から得られた凸地形とが一部対応した地形1・2、5～8、13・14は、それぞれ『富田莊絵図』や『正保国絵図』に描かれる庄内川や五条川の流路とそれらがつくる低地が現れているものと思われる。

さて、ここで特筆すべき事項として微高地群Sと低地部Nの組み合わせから設定された地形14がある。この微高地群Sに対応するのが等高線図の南端、新川と庄内川との合流部付近において島状に標高の高い江松、下之一色、船頭場にかけて認められた島状地形である。現在の新川はこれらの島状地形との間を抜けて南の伊勢湾へ向けて流下している。この島状地形の成因について、先ず新川が河川流路沿いに形成した自然堤防である場合がある。これに関して、新川は1784（天明4）年から1787（天明7）年にかけて現在の位置に新川が開削された歴史があり、人工的な日々の浅い河川流路であることから、自然堤防を形成するのに十分な時間が経っていないことがあげられる。実際、江松、下之一色、船頭場よりも北側の範囲には、富田町桜津において新川の流路に沿う凸地形が認められるものの、江松や下之一色などでみられる凸地形に比べて面積は小さく、また富田町桜津以外には新川の上流や下流には河川流路に沿う凸地形はみられない。新川による自然堤防である可能性は低いと思われる。では、その地形の成因は何であるかの疑問が残る。それについては問題提議したいため後述し考察を行う。いずれにせよ、地籍図の解説による地形14として設定されたうちの微高地群Sには、等高線図の江松、下之一色、船頭場にかけて認められる島状に標高の高い地域が対応する。（鬼頭）

4. 名古屋市中川区の遺跡と古地形

（1）名古屋市中川区の遺跡分布と古地形

名古屋市中川区戸田地区周辺の遺跡について述べる（図4参照）。庄内川以西の北から名古屋市中川区富田町大字千音寺に千音寺遺跡（1）があり、奈良時代の溝、土坑など、鎌倉時代～室町時代の溝や土坑、井戸などが確認されている。同戸田一丁目・戸田二丁目には、平安時代

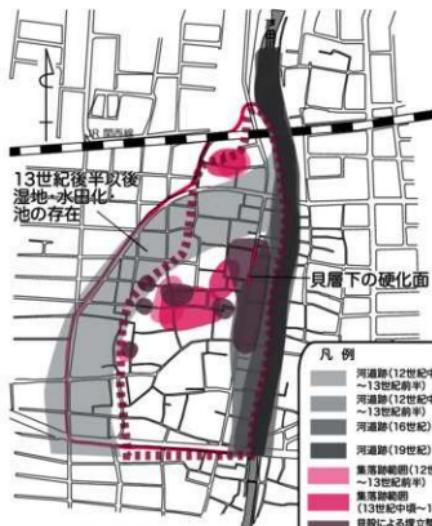


図5 戸田遺跡の変遷

(伊藤雅乃・熊谷洋一・高梨雅幸他「第4次戸田遺跡発掘調査報告書」名古屋市上下水道局掲載第13回をトレース・合成したものに加筆、1:10,000)

後半へ江戸時代の戸田遺跡（2、以前は戸田城跡（3）・戸田B遺跡（4）に分けられていた）があり、戸田川を挟んで東の同春田四丁目に戸田A遺跡（5）がある。同かの里一丁目～かの里三丁目には包里遺跡（6）、同伏屋二丁目には伏屋遺跡（9）があり、平安時代～室町時代の灰釉陶器・山茶碗・古瀬戸の陶器などが採集されている。戦国時代の城館跡では、戸田遺跡内の戸田一丁目に戸田城跡（3）、同富田町大字桜津に桜津城跡（8）、同伏屋三丁目に助光城跡（11）、同前田西町一丁目に前田城跡（10）、同江松三丁目に江松城跡（7）、同下之一色町に下之一色城跡（12）がある。

庄内川以東では、北から名古屋市中村区小鶴町に古墳時代の岩塚1号墳（14）～岩塚3号墳（16）があり、戦国時代では同岩塚町新屋敷に岩塚城跡（17）、名古屋市中川区東起町4丁目に東起城跡（13）がある。

当地域の遺跡の分布は、名古屋市中村区から中川区の北西部にかけて古墳時代から奈良時代の遺跡が広がり、平安時代以後に中川区の南側へと遺跡が展開する傾向がみられる。先の地形

変遷の中では（図2参照）、地形1・地形2に関わる微高地群Aに千音寺遺跡（1）がある。地形4・地形6に関わる微高地群Hに戸田遺跡（2、戸田城跡（3）を含む）と包里遺跡（6）、地形7・地形8に関わる微高地群Jと地形13に関わる微高地群Rが重複する地点に伏屋遺跡（9）がある。また地形7・地形8に関わる微高地群Jに桜津城跡（8）、地形8に関わる微高地群Kに前田城跡（10）と助光城跡（11）がある。奈良時代以前の千音寺遺跡（1）が存在するのは最も形成時期が古いと考えられる地形1・地形2に関わる微高地群Aに限られ、平安時代以後の遺跡がより南側に分布する地形4～地形8に関わる微高地群D～微高地群Kに立地する。

自然科学的分析による調査では、千音寺遺跡の第6次調査のNo.3区で遺跡の自然基盤層と考えられる6層（2.5Y5/2～4/2暗灰褐色砂質土）出土のイヌエンジの生材のAMS放射性炭素測定年代がBC360-201cal、第7次調査のNo.11区で周辺の旧河道に由来する堆積層と考

えられる5層（10YR5/1褐灰色砂シルト質土）出土のヤナギ属の生材のAMS放射性炭素測定年代がAD671～770calとの分析報告があり（木村2015）、千音寺遺跡の立地する基盤層の形成年代の一且を知ることができる。

（2）名古屋市中川区戸田遺跡の調査成果

先に述べた遺跡の中で、発掘調査が行われた遺跡に戸田遺跡（2）と千音寺遺跡（1）があり、本論の分析で大きく関わる戸田遺跡について検討したい。

戸田遺跡の発掘調査報告では、古地形と遺構の変遷について4つの時期に検討されている（図5・図6）。

中世の遺構が形成される時期は12世紀中葉以後で、4F区中央部・4C区北側と4P区東側・4Q区・4R区・4S区・3A区～3E区・1次区の標高-2.4m～-1.0mにかけて認められ、標高-2.0m～-1.7mより高い地点に遺構が認められる。特に標高-1.6mより高い4P区東側・4Q区・4R区東側・4S区・3E区北端部・3E区南端部・1次区において13世紀～16世紀の遺構と出土遺物が多数確認されている。

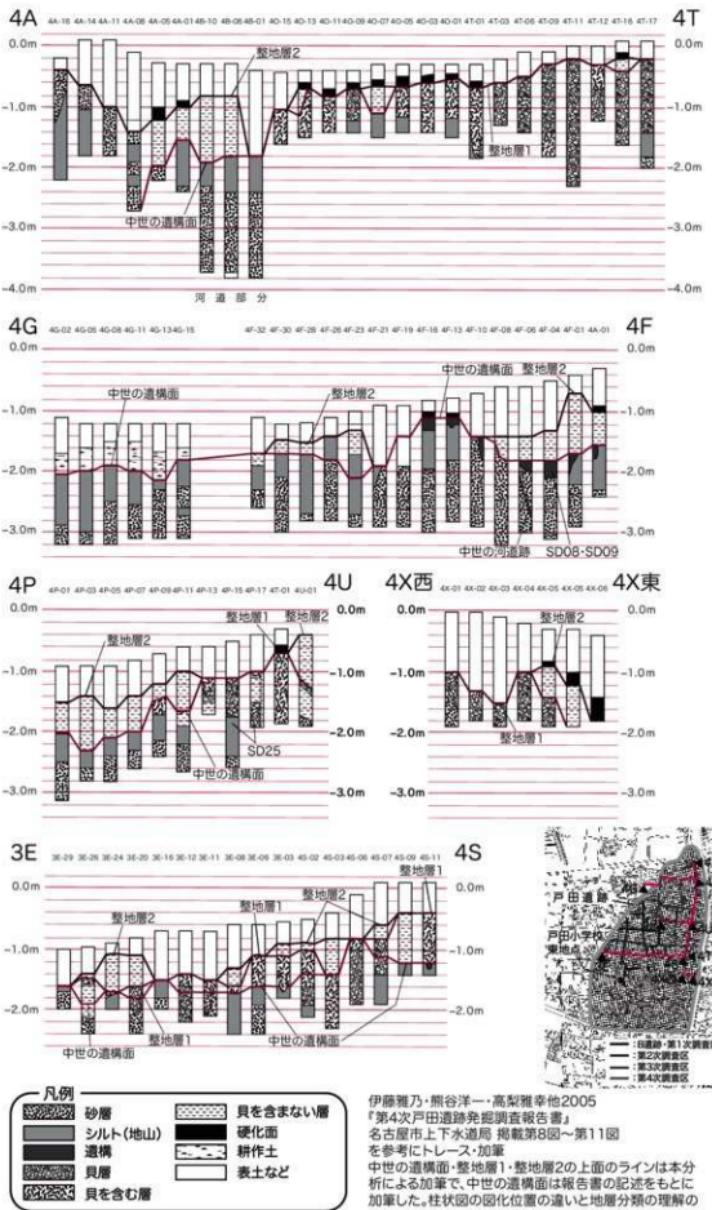


図 6 戸田遺跡模式柱状図



続く13世紀～14世紀は、度重なる洪水と戸田川の流路の移動が推定される時期で、4A区南側・4B区・4Oにかけての地点からその南西にある4C区・4H区～4K区・4M区・4N区・4P区西側にかけて流下する河道が推定されている。

3番目の時期は、16世紀に形成された整地層1で、15世紀～16世紀の遺物を包含して、ほぼ貝殻のみの貝層、破碎した貝殻層、貝殻にシルトと砂が混入する混貝土層からなり、戸田川に沿った4O区・4T区・4X区に認められる。整地層1は中世に現在より幅広く流れていた戸田川が現在の戸田川の川幅まで西岸を埋め立てられたものと推定されている。

4番目の時期として、江戸時代後期以後に形成された整地層2がある。整地層2は、表土下にある旧道路面と推定される硬化面（標高-1m～-0.6m）とその硬化面の下にある18世紀～19世紀の遺物を包含する粘土・シルト層である。現在に続く町並みの基盤層が形成されたものと理解されている。

（3）戸田遺跡における中世河道について

先に述べたものは、ほぼ確認された調査成果に基づくものであるが、戸田遺跡の北側で推定された中世の河道について、4B区で確認された中世河道（底面）と4P-11区の標高-2.4m～-1.9mにある砂質を帯びた有機物腐食土層（4P-11区6層～8層）から13世紀中葉～16世紀後葉の山茶碗・陶磁器などの出土について異なる理解が想定できるため、検討したい。

まず、4P-11区で確認された砂質を帯びた有機物腐食土層は4P-9区から以東の4P-11区・4P-12区・4P-14区・4P-15区・4P-17区に確認されるもので、西にある4P-1区～4P-8区の標高-2.3m以下に堆積する砂層においても木片などを含むことから河道や河道に伴う湿地が推定されたものである。これらの調査成果について個別に述べることできないが、砂質を帯びた有機物腐食土層は最も東にある4P-17区のSD25とされる16世紀の溝状落ち込みに伴う地層と考えられ、4P-17区から東西に30m以上確認される有機物腐食土層は全てが連続するわけではないが、4P区の標高-2.4m前後からみられる砂層を底面とする遺構と考えられな

いであろうか。これと関連して、4F-1区で確認された16世紀の溝SD08とその西4F-2区～4F-9区に確認された13世紀の溝SD09は報告ではSD08がSD09より新しい重複関係を確認されているが、検出された遺構平面と土層からは同一の遺構である可能性があるものである（図7）。また4F区中央部から西側では、4F-16区・4F-17区で確認された15世紀後半の南北溝SD13をはじめ、中世の土坑や溝などが多く確認されている。特に15世紀後半～16世紀にかけての溝は比較的規模が大きく、また軸線が類似するものが多い。これらの溝は、4F区と4P区の間で4N区・4M区の西にあたる地点で村絵図に記述される「古城」、戦国時代の戸田城跡に関わる遺構の可能性があり、4N区・4M区では明確な遺構は確認されなかつたが、調査された遺構面は標高-1.5m～-1.0mと最も高い地点である。

次に4B区付近の戸田川から南西にのびる旧河道は、4B区において標高-2.4m前後から下にみられる砂層の下面にあたる標高-3.9mに河道底面（底面は砂粒を多く含む粘質土で上面には径1cm～3cmの小礫が堆積する）が確認され、その河道底面には12世紀中葉～13世紀前半の完形の山茶碗が伏せた状態で複数出土したことと、周囲の4A区南側・4O区の堆積状況とその南西にある4C区・4H区～4K区・4M区・4N区・4P区西側の遺構の検出状況などから、河道が推定されているものである。この河道の堆積状況は、標高-2.4m前後から下にある黄褐色～褐色砂層は北に傾斜する堆積状況をもっており、砂層の上に黄褐色砂・黄灰色砂を混入する黒褐色粘土層が標高-2.2m～-1.9mに砂層を挟みながら埋没するもので、その上に先に述べた4F区の16世紀のSD08や4B-07区の井戸1が検出されている（図7）。また4A-15区の標高-0.9m～-1.0mにて確認された13世紀頃の土坑SK03・SK04がある地点では、河道は立ち上がりしているものと思われる。また4B区の西にある4F区の堆積を検討すると、4F-6区の西側で黄褐色砂層（東側の9層と西側の14層）に挟まれて東に傾斜する暗灰黄色砂質シルト（10層）の堆積がみられる。4F-8区東側地点において、4F-11区の黄



78

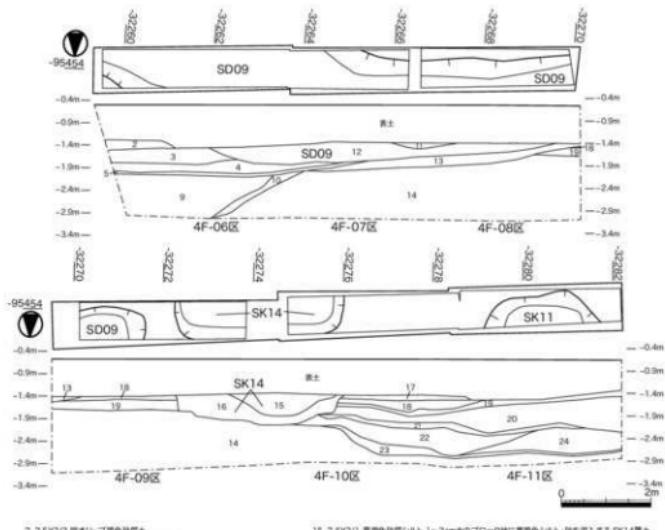


図7 戸田遺跡 (上図) 4B-07区～4B-09区、(下図) 4F-06区～4F-11区 (1:100)

褐色砂層(14層)の上を東に立ち上がる黒褐色砂質シルト層(23層)より上層にある黄褐色砂(18層)・黄褐色シルト層(19層)までが上に被って堆積する。4B区の河道が4F-6区の黄褐色砂層(14層)を含むものであれば、4F-6区より西にある4F-7区～4F-19区において確認された中世の遺構も4B区からの河道の上に位置することから、中世東側に傾斜する堆積層と西側に傾斜する堆積層は別の流路堆積によるものと思われる。よって先に述べた4F区中央部から西側では、13世紀から16世紀にかけての遺構が多く確認されている点、その南の地点に戦国時代の戸田城跡の存在も想定できることから、4B区の標高-3.9mで確認された河道は、戸田川の西岸にある4B-13区より30m西の4F-8区東側で立ち上がるものと考えられる。このように考えると、4O区・4T区・4U区・4V区・4W区・4X区の標高-1.0m前後にて検出される

貝殻を含む整地層1は16世紀の遺構上部に堆積する貝層に統く可能性はあるが、先に述べた4F区の16世紀のSD08や4B-07区の井戸1の遺構上面が標高-1.8m～-1.5mにあること、整地層2との前後関係が不明であることから、整地層1は江戸時代以後の形成の可能性が高く、現在の戸田地区周辺の伊勢湾沿岸部の町に普遍的に認められる近代以後の整地地行に類似するものである(大野・藤山・鬼頭2015)。

最後に地籍図(図2)との対応関係を検討すると、4P区東側に確認される砂質を帯びた有機物腐食土層の地点は宅地のある部分で、微高

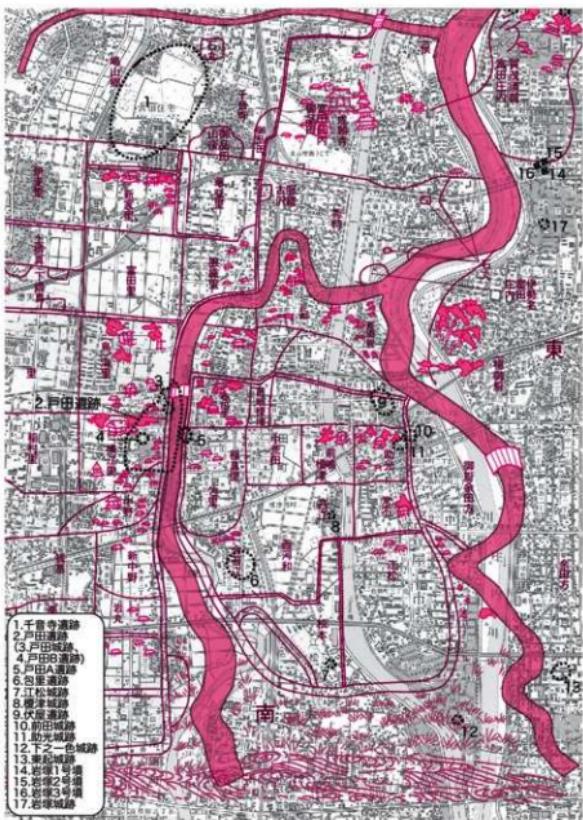


図8 名古屋市中川区戸田地区における尾張国富田荘絵図の想定(約1:37,500)

地群Hの範囲である。4B区付近の戸田川から南西にのびる旧河道は4A区・4B区・4O区・4P区東側は宅地で微高地群Hの範囲であるが、その西側4C区・4H区～4K区・4M区・4N区・4P区西側は田の部分で低地部Cの範囲にあたり、地形図の解析においても南北の微高地状高まりの中にある北東から南西への谷状地形を示す。また、先に述べたようにこの地区で遺構や出土遺物が少ないのも、谷状地形に示される窪地となり中世においても人が住む居住域としての利用は少なく、水田域や湿地などの景観となっていたものと思われる。(藤山)

5.『富田莊絵図』における建物と海

(1)『富田莊絵図』に描かれた建物と遺跡の関係

名古屋市中川区戸田地区の分析結果と『富田莊絵図』の情報を大凡合わせたものが図8である。この想定図は、現在の福田川の位置、地籍図などの解析による戸田川と庄内川の位置、地籍図の村境・現在の町境などをもとに推定しており、千音寺遺跡が「嶋山郷」の南側に、戸田遺跡が「横江里」の東側を中心北は「鳥海里」の南東隅部、南は「中野」の北東側に、包里遺跡が「今苔江」と記載ある箇所に、伏屋遺跡が「助光」の北にある無記載の箇所に当たる。当時の実態がどの程度反映されたものかわからないが⁵、建物が描かれている戸田遺跡、建物が描かれていない千音寺遺跡、何も記載がない伏屋遺跡と絵図における扱いが異なることが分かる。愛知県あま市の旧海部郡七宝町域においても、中世の遺物が表面採集できる地点で、『富田莊絵図』に建物が描かれた箇所と描かれない箇所があり(藤山2005)、『富田莊絵図』において複数の書き分けがあるものと思われる。

中世における遺跡の変遷はあるが、中世の遺物が表面採集できる遺物包含地としての遺跡や発掘調査が実施されて中世の構造が残る遺跡では人々の営みが存在したものと考えられる。よって、この書き分けの基準として、描かれたものは富田莊に関わる施設や建物、描かれてなかつたものは富田莊外の建物と富田莊に居住する一般庶民の建物と想定したい。(藤山)

(2)想定される海側環境とその理解

本論で解析対象とした富田莊のある名古屋市中川区、同市中川区、あま市(旧海部郡甚目寺町)、海部郡蟹江町は濃尾平野の南東端にある。濃尾平野の愛知県側は犬山市付近から西に沖積平野がひろがり、上流部から扇状地帯、自然堤防帶、三角州帶の3地帯に区分できる。このうち富田莊は三角州帶にあたる。等高線図による地形解析では東西約5.85km、南北約5.88kmの範囲全体で標高-1.8mから標高1.0mまでの等高線が描かれ、解析図の北と北東方向で相対的に高く、南と西は標高0mよりも低い場所と

なっていた。また、標高-1.4mを境にして等高線間隔が狭くて地形勾配が比較的急なところと、等高線間隔が広くて地形勾配が緩やかなところに大きく2分された(図4)。ところで、本邦の土地の高さを示す標高は東京湾の平均海面を標高0mの基準として測られT.P.(トーキョーベール)と略記される。基準となる海面(平均海面)はその場所の地形や潮汐・潮流、海水温、気圧などの変動により地域ごとに異なる。伊勢湾には名古屋港基準面(N.P.)があり、東京湾平均海面(T.P.)よりも1.412m低いことが知られている。本論ではこれまで東京湾平均海面(T.P.)を用いて議論を進めてきた。より厳密に議論をするためには標高値の補正が必要である。名古屋港基準面(N.P.)を用いれば、補正した標高値($h_{\text{correction}}$)は現在の標高の値($h_0 = h_{\text{TP}}$)に名古屋港基準面(N.P.)(h_{NP})分だけ加えなければならない($h_{\text{correction}} = h_0 + h_{\text{NP}}$)。補正を加えると等高線図の解析範囲全体は標高-0.38mから標高2.41mまでの等高線へと変換される。また、東京湾平均海面(T.P.)を用いた場合、地形勾配の緩急の変化は標高-1.4mラインで認められたが、それが標高0.01mとなる。加えて、解析範囲の名古屋市中川区や海部郡蟹江町は愛知県内でも有数の地盤沈下地帯として有名である。高度経済成長期に伴う地下からの揚水の影響により濃尾平野南部の地盤沈下は著しく、名古屋市中川区と港区西部では80cm~100cm以上の沈下量を示している(東海三県地盤沈下調査会、1995)。つまり、補正標高値($h_{\text{correction}}$)には、さらに地盤沈下した沈降量($h_{\text{subsidence}}$)を加えなければならない($h_{\text{correction}} = h_0 + h_{\text{NP}} + h_{\text{subsidence}}$)。沈降量を少なく見積もって80cmとし沈降量をも考慮すると、解析範囲全体でもっとも標高値の低かった標高-1.8mラインは標高0.40mとなり、今回の解析範囲全体のほとんどが正の標高値($h_{\text{correction}} = h_0 + h_{\text{NP}} + h_{\text{subsidence}} > 0$)をもつ土地となる。これは解析範囲に離水した土地がひろがっていたことを意味する。また、等高線図の等高線間隔の粗密度から『富田莊絵図』に該当する地域には地形の傾斜がほぼ0度であるような極めて低平な土地が読み取れ、13世紀~14世紀に莊園の水田が展開していたこと

とも整合性が認められる。

さて、ここで等高線図の標高-1.8m～-1.6mライン沿いに認められた島状に標高の高い地形、具体的に言えば春田、供米田、かの里、富永、江松、下之一色、船頭場でみられる凸地形の成因を考えたい。本論の対象範囲の約3km南には庄内川と新川とが現在の伊勢湾に注ぐ河口となっている。新川と庄内川との合流部にある江松、下之一色、船頭場地域に認められた島状に標高の高いところは東西方向に配列しており、北から南へ南北方向に流下する新川や庄内川の河川流路に沿って配置しているというよりも、その平面的な配置と形状から海岸沿いにならぶ砂堆地形と考えることもできる。ところで、これまでの調査・研究の中には砂堆と浜堤とをまったく同じものであるかのように認識されている例が見受けられるため、ここで説明を加えておく。水や大気などが砂や泥といった堆積物を運ぶとき、その堆積物の表面において、その上を流れる水や大気の流れにより形成される面（これを堆積面といふ）には少なからず凹凸状の起伏が生じる。その起伏の総称を砂堆という（ミッドルトン, 1965）。対して、浜堤は海水の波（専門的には波浪と呼称する）の影響のつよい環境で形成され、波によって打ち上げられた砂礫が波の到達する上限付近に堆積し小高い高まりをつくり、海岸線に平行な列をして連なるものと定義される（ペイツ＆ジャクソン, 1987）。要するに浜堤が海の波の影響でつくられるのに対して、砂堆とは海底でも、河川や湖の底でも、流れがあればどこにでも形成される堆積地形のことを指す。浜堤は成因を限定するが、砂堆は河川・潮流・波浪や海流の流れがつくる砂州・沈水した沿岸州など、その成因や規模は問わない用語であることに注意しなくてはならない。本論では堆積地形の空間的な配置のみから議論を展開しており、地層の層序関係や地層に観察される堆積構造に基づいたものではなく、成因についての詳細がわからぬいため砂堆の用語を使うのである。さて、『富田莊絵図』には「江松」や「松本」と描かれた海側（南側）に、並行する2本の曲線で描かれた南へ凸となる堤防状の高まりが描かれている。その高まりの一端が江松、下之一色、船頭

場で認められた島状の地形にあたるのかも知れない。『富田莊絵図』の「江松」の南に描かれた堤防状のものは海と干拓地とを境する堤防であるとの解釈が歴史学の研究者よりなされている（板倉, 1952；村岡, 1998）。歴史学による『富田莊絵図』から解釈した干拓地の堤防は、地質学的にはもともとその地にあった周囲よりも標高の高い凸状の砂堆地形を利用したものと捉えられる可能性を指摘できる。

さて、『富田莊絵図』の「江松」や「松本」の海側（南側）に描かれた堤防状をした凸地形の、さらに南側には草本植物と想像される植生と、さらに南には海が描かれており、河川と海とが交わる場所が『富田莊絵図』には表現されている。河川と海との相互作用で形成される堆積地形の典型的なものが三角州（デルタ）である。とくに三角州が海に臨む漸移帶では河成作用と海の諸作用とが複合してさまざまな微地形がつくられる。三角州が形成されるその成因に関する議論は欧米において1970年代以降から発展してきており、三角州の地形的な特徴や堆積様式には3つの環境要素が起因していることがわかつてきただ。ひとつは陸上から流下していく河川の運搬力、さらに海の波浪の力、そして海水の干潮・満潮による潮汐力があげられる（ギャロウェイ, 1975；バタキャリヤ＆ウォーカー, 1992；ギャロウェイ＆ホブディ, 1996）。たとえば、河川が卓越する例としてアメリカ、ミシシッピ河の河口に位置する三角州が知られている。ここでは河川の運搬力が他の2つの要素より勝っており、三角州はたえず海側に向かって前進している（ライト, 1978；コールマン, 1981）。いっぽう、干満の影響をよく受ける場所では潮汐優勢の三角州が形成される。このタイプの三角州表層では干潟からなる平坦面と、三角州前面に形成されたパリアー島の発達などが特徴としてあげられる。波浪の影響が優勢する三角州では、波浪の營力により三角州から供給された堆積物は再移動して海浜や海岸砂丘を発達させる。このように三角州は河川・波浪・潮汐という3つの環境要素を端成分として、諸作用の相対的なつよさに応じて漸移帶の地形的特徴を変えるわけである。翻つて、以上のような観点から『富田莊絵図』に

関わる地域をみた場合、どのような堆積地形環境が想定されるであろうか。『富田荘絵図』には庄内川や戸田川に対比される河川流路が描かれており、三角州の3つの堆積要素のうち河川の運搬力が考慮されなくてはならないことが先ず理解できる。次に問題となるのは波浪と潮汐の2つの要素である。先ず波浪について考える。波浪により形成される堆積地形の代表に浜堤がある。波による水の分子運動は円～梢円運動をする振動流として伝わる。この分子運動のエネルギーは海底にたまつた堆積物表面との摩擦により減衰する（ライト＆コールマン, 1973；クリフトン, 1976；クリフトン＆ディングラー, 1984）。海底の堆積面との接触が少ないほど波のもつ運動エネルギーは衰えることなく伝わるのである。例えば、現在の日本でみられる浜堤には千葉県の九十九里浜や新潟県の新潟平野、愛知県渥美半島から静岡県の御前崎にいたる遠州灘など、外洋に面して陸から海に向かい急激に水深の増す場所で波浪による堆積地形が顕著となるのである。対して、海の水深が浅い場合には、海底との摩擦により波の運動エネルギーは減衰する。ところで、地形解析を行なった範囲の南端から約3km南では現在、庄内川と新川が伊勢湾に注ぐ。河口には2002(平成14)年にラムサール条約に登録された藤前干潟がひろがっている。一般的に干潟は、波浪の影響を受けにくく、外洋にくらべて波が穏やかなところで形成される。現在みられる堆積地形が過去にも存在したとは一概に言えないものの、九十九里浜や遠州灘のような浜堤がかつてひろがっていたとは想定し難く、少なくとも波浪のみが卓越する典型的な波浪卓越型三角州ではないと思われる。いっぽう、潮汐が優勢な三角州の場合、海の干満の影響を受ける。陸と海とが接する海岸は干満の影響により、満潮時に海水面よりも高い場所を潮上帯とし、大潮の干潮時にも常に水中にある場所を潮下帯、満潮時には海水中に没し干潮時には大気にさらされるような潮上帯と潮下帯の中間にある場所を潮間帯といふ。干満による海水面の上昇・下降により特徴的な堆積地形が形成される。陸と海との境界である海岸から直交方向の海側へ向かい、潮上帯には塩性湿地（ソルトマーシュ）と

呼ばれる耐塩性の草本植物が繁茂する地形が、潮間帯には陸から海へ向かい泥質干潟から混合干潟、そして砂質干潟がこの順番に並び、さらに常に水中にある潮下帯には潮汐チャネル（流路）というように、出現する堆積地形は段階的に移り変わるのである。ところで、『富田荘絵図』の「江松」や「松本」の堤防状のさらに海側（南側）には海との間に草本植物の繁茂状況が描かれていた（図1）。海と草本植物という組み合わせから、草本植物が描かれたところは地質学的には潮上帯における塩性湿地を描いているものと指摘できる。さらに『富田荘絵図』の南端に描かれた海は、そこから潮間帯となる場所にあたり、海が描かれているその下には干潟環境が隠れていると推定できる。遠浅の干潟環境に現れる潮上帯の塩性湿地帯を農業の耕作地へと転換させるいわゆる干拓が、洋の東西を問わず歴史的に古くから慣習されてきた。『富田荘絵図』の「江松」の南に描かれた堤防状のものが海と干拓地とを境する堤防であるとの歴史学者による解釈を先に述べたが、地質学的に想定される堆積地形も干潟環境という干拓の適地であったと指摘できる。ところで、『富田荘絵図』に描かれた地域の地理学的な研究には自然地理学を専門とする安田喜憲による航空写真判読と古文書の記載を基に庄内川下流域の河道変遷と微地形を分類したものがある（安田, 1971）。安田（1971）では三角州（デルタ）の形成を主に河成作用を重視して考察した。本論でも述べたように、三角州（デルタ）をつくる環境要素のひとつとして河川の影響は重要であるが、ほかにも潮汐の影響、堆積物の供給量、堆積物をためる受け皿となる盆地の沈下など複雑な相互作用を考慮する必要がある。そのような相互作用のひとつとして、潮汐のような海域の影響も考える必要があることを指摘したい。今回は古地形解析により現れた地形の、空間的な配置のみで考察を行なった。前述したように、三角州は河川・波浪・潮汐の3つの環境要素の組み合わせとその強弱により特有の地形が形成される。潮汐の影響がつよければ地質学的にはカレント・リップルやヘリンボーン構造といった、その環境に特有の堆積構造が地層に保存されているはずである。（鬼頭）

(3) 結びに代えて

まとめると、本論において戸田遺跡の発掘調査にある自然流路が『富田莊絵図』に描かれた旧戸田川であることを指摘した。この事により『富田莊絵図』は13世紀中頃～15世紀の状態を示したものであると考えられる。また、旧河道や道・堤の位置の復元により、描かれた建物は富田莊に関わる施設・家屋である可能性を指摘した。この建物の描き分けは、歴史学における絵図作成主題を莊園支配領域とする村岡氏と上村氏の考え方を支持する。地形解析では江松・下之一色・船頭場に島状の凸地形が並び、河成作用とともに潮汐などの海域の影響を受けた砂堆地形が想定される。今後、対象地の考古学および地質学的な調査が行われることを期待したい。最後になるが、本論が富田莊地域を検討する際の歴史学などの他分野の研究の一助になれば幸いである。(藤山・鬼頭)

参考・引用文献

- 板倉勝高 1952 「尾張国富田庄を例とせる日本庄園の村落構造」『東北地理 5巻1号』
- Middleton, G. V., 1965, Primary Sedimentary Structures and Their Hydrodynamic Interpretation, Soc. Econ. Paleontologist and Mineralogists, Spec. Publ., 12, 265p.
- 安田喜憲 1970 「尾張国富田庄の歴史地理学的研究」『立命館文学第303号』
- 安田喜憲 1971 「濃尾平野庄内川デルタにおける歴史時代の地形変化」『東北地理』23-1, 29-36
- Wright, L. D. and Coleman, J. M., 1973, Variations in morphology of major river deltas as functions of ocean wave and river discharge regimes, Bull. Amer. Assoc. Petro. Geol., 57, 370-398.
- Galloway, W. E., 1975, Process framework for describing the morphologic and stratigraphic evolution of deltaic depositional systems, In Broussard, M. L., eds., Deltas, models for exploration, Houston Geol. Soc., Houston, 87-98.
- Galloway, W. E., 1975, Process framework for describing the morphologic and stratigraphic evolution of deltaic depositional systems, In Broussard, M. L., eds., Deltas, models for exploration, Houston Geol. Soc., Houston, 87-98.
- Clifton, H. E., 1976, Wave-generated structures - a conceptual model, In Davis, R. A. and Ethington, R. L., eds., Beach and Nearshore Processes, SEPM Spec. Publ., 24, 126-148.
- Wright, L. D., 1978, River deltas, In Davis, R. A. Jr., eds., Coastal sedimentary environments, New York, Springer-Verlag, 5-68.
- Coleman, J. M., 1981, Deltas : Processes and models of deposition for exploration, Burgess Publ., 1-12.
- Clifton, H. E. and Dingler, J. R., 1984, Wave-formed structures and paleoenvironmental reconstruction, Mar. Geol., 60, 165-198.
- 金田草裕 1985 「集村化現象の進展」『条里と村落の歴史地理学研究』第四章 古代・中世の村落形態とその変遷、株式会社大明堂
- 上村喜久子 1986 「絵図にみる富田莊の開発と形成」『名古屋短期大学研究紀要 24』
- 愛知県教育委員会 1986 「愛知県遺跡分布図(1)尾張地区」
- Bates, R. L. and Jackson, J. A., 1987, Glossary of Geology -Third Edition, American Geological Institute, 788p.

謝辞

本論を作成するにあたり、2022年2月に実施された中間発表において愛知県埋蔵文化財センターおよび愛知県埋蔵文化財調査センターのスタッフの方々からはご批判・ご意見を賜り、とくに愛知県埋蔵文化財調査センターの石黒立人氏、愛知県埋蔵文化財センターの鈴木正貴氏、樋上 異氏、堀木真美子氏からの建設的な助言は本論をまとめるにあたり大いに参考となった。等高線図の作成では前田弘子氏・鈴木好美氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

- 上村喜久子 1990『富田莊』『講座日本莊園史 5 東北・関東・東海地方の莊園』株式会社吉川弘文館
- Bhattacharya, J. P. and Walker, R. G., 1992, Deltas. In Walker, R. G. and James, N. P., eds., Facies models : response to sea level change, Geol. Assoc. Can., 157-177.
- 東海三県地盤沈下調査会, 1995, 平成 6 年における濃尾平野の地盤沈下の状況, 東海三県地盤沈下調査会, 68p.
- Galloway, W. E. and Hobday, D. K., 1996, Terrigenous Clastic Depositional Systems, 2nd ed. New York, Springer-Verlag, 489p.
- 上村喜久子 1997『第四節 莊園公領制の形成と在地勢力』『第五節 組と系の莊園・安食莊』『新修名古屋市史第1巻』『第七章 摂閑政治から院政へ』名古屋市
- 村岡幹生 1998『第四章 莊園・公領制下の人々の生活』『新修名古屋市史第2巻』『第四章 莊園・公領制下の人々の生活』名古屋市
- 山田誠一・野口泰子 2000『埋蔵文化財調査報告 35 千音寺遺跡(第1・2次)』『名古屋市文化財調査報告 47』名古屋市教育委員会
- 伊藤雅乃 2000『千音寺遺跡(北宮田団地)発掘調査報告書』名古屋市住宅都市局
- 上村喜久子 2001『尾張國富田莊絵図』の主題をめぐって-文書目録と絵図読解-『愛知県史研究第5号』愛知県
- 東園千輝男 2001『下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書古千音寺遺跡』名古屋市上下水道局下水道本部
- 伊藤雅乃 2002『第2次中川区戸田二丁目付近下水道工事に伴う戸田B遺跡発掘調査報告書』名古屋市上下水道局下水道本部
- 伊藤正人他 2003『埋蔵文化財調査報告書48』『名古屋市文化財調査報告62』名古屋市教育委員会
- 中・近世研究部会 2004『尾張国富田莊の考古学的研究-成願寺を中心として-』『研究紀要第5号』、(財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
- 熊谷洋一 2004『戸田遺跡発掘調査報告書-第4次中川区戸田二丁目付近下水道工事に伴う調査-』名古屋市上下水道局下水道本部
- 熊谷洋一 2004『第3次戸田遺跡発掘調査報告書』名古屋市上下水道局下水道本部
- 近藤真人 2004『千音寺遺跡発掘調査報告書-第4次中川区富田町千音寺付近下水道築造工事に伴う調査-』名古屋市上下水道本部
- 大浜良介 2004『千音寺遺跡発掘調査報告書-第6次中川区富田町千音寺付近下水道築造工事に伴う遺跡発掘調査-』名古屋市上下水道局
- 藤山誠一 2005『七宝町の中の富田莊～絵図に描かれた莊園と描かれなかったもの～』平成16年海部津島の歴史を考える講演会(2005年2月21日、於七宝町公民館)、口頭発表資料
- 伊藤雅乃・熊谷洋一・高梨雅幸 2005『第4次戸田遺跡発掘調査報告書』名古屋市上下水道局
- 藤山誠一・加藤博紀・鬼頭剛・鈴木正貴・松田訓 2007『中世萱津を考える』『研究紀要第8号』、(財)愛知県教育・スポーツ振興財团愛知県埋蔵文化財センター
- 木村有作 2015『千音寺遺跡(第6次・第7次)』『埋蔵文化財調査報告書73』『名古屋市文化財調査報告90』名古屋市教育委員会
- 大野麻子・藤山誠一・鬼頭剛 2015『貝殻からみえる昔のくらし～貝が語る伊勢湾沿岸の環境と歴史～』蟹江町歴史民俗資料館特別展冊子、蟹江町教育委員会
- ※ 脱稿後次の研究を知ることができた。『富田莊絵図』の認識・理解について、今後検討したい。
- 磯貝富士男 2004『円覚寺所蔵尾張國富田莊絵圖の成立事情』『大東文化大学紀要四十二号』
- 磯貝富士男 2006『円覚寺領尾張國富田莊絵圖にみる海平面変動』『大東文化大学紀要四十四号』



研究紀要 第23号

発行年月 2022年5月

編集・発行 (公財)愛知県教育・スポーツ振興財團
愛知県埋蔵文化財センター

印 刷 一柳印刷株式会社